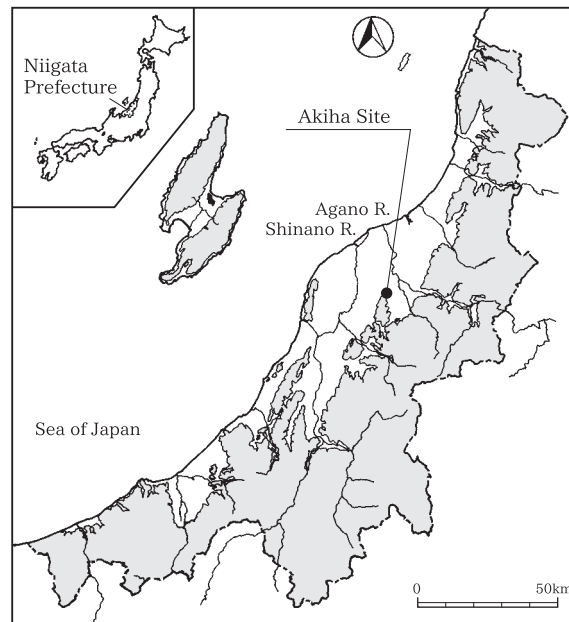


# あきは 秋葉遺跡 第13次調査

— 個人住宅建設に伴う秋葉遺跡第2次発掘調査報告書 —



2021

新潟市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は新潟県新潟市秋葉区秋葉1丁目4704番地他で実施した秋葉遺跡（新潟市遺跡番号182）の発掘調査記録である。
- 2 調査は個人住宅建設に伴い、開発者から依頼を受け新潟市が行った。調査は新潟市教育委員会（以下、市教委という）が調査主体となり、新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター（以下、市文化財センターという）が補助執行した。調査費用は国（文化庁国庫補助金「発掘調査等市内遺跡」）が50%、市が50%を負担した。
- 3 平成29年度に発掘調査、平成30年度から令和元年度に整理作業、令和2年度に報告書を刊行した。発掘調査と整理作業の体制は第三章に記した。
- 4 出土遺物及び調査・整理にかかわる記録類は、一括して市文化財センターが保存・管理している。
- 5 本書の執筆は第V章第2節A縄文土器を田中耕作（市文化財センター非常勤職員）、B石器を立木宏明（市文化財センター係長）、第VI章第2節A2）土器の混和材についてを前山精明（市文化財センター学芸員）が行い、その他の執筆と編集は今井さやか（市文化財センター主査）が行った。
- 6 本書で用いた写真のうち、遺跡写真は今井が撮影した。遺物写真は、土器・土製品を松永由佳氏（有限会社マックス）に撮影を委託し、石器・石製品は立木が撮影した。ただし写真図版1の空撮写真は（株）オリスが撮影したものを使用した。
- 7 遺構図のトレースと各種図版作成および本書の編集に関しては、有限会社不二出版に委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。
- 8 縄文土器の年代観については増子正三氏からご教示頂いた。
- 9 今回の調査成果については、これまで平成29年度新潟市遺跡発掘調査速報会や新潟市文化財センター年報第6号で発表されている。報告書と齟齬のある場合は、本報告書をもって正とする。
- 10 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関からご指導ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げます。  
荒川隆史・長田友也・加藤 学・鈴木俊成・寺崎裕助・増子正三  
新潟県教育庁文化行政課・（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

（所属・敬称略、五十音順）

## 凡 例

- 1 本書は本文・別表と巻末図版（図面図版・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。磁北は真北から西偏約7度である。
- 3 掲載図面のうち既存の地形図を利用したものは、原図の作成者・作製年を示した。
- 4 引用文献は、著者と発行年（西暦）を本文の〔 〕中に示し、巻末に一括して掲載した。
- 5 遺構番号は現場で付したものを用了。番号は遺構の種別ごとに付さず通し番号とした。
- 6 土層の土色及び遺物の色調観察は『新版 標準土色帖』〔小山・竹原1967〕を用い、色調名と番号を示した。
- 7 遺物実測図は1/3を基本とし、これと異なる場合は各図面に明記した。
- 8 遺物写真図版の縮尺は基本的に実測図と同一であるが、異なる場合は各図面に明記した。
- 9 遺物の注記は調査年度「17」、秋葉遺跡の「秋葉」とし、出土地点や層位を続けて記した。
- 10 遺物番号は種別（土器・土製品・石器）ごとに通し番号とし、本文及び観察表・写真図版の番号は同一番号とした。

# 目 次

第Ⅰ章 序 章	1
第1節 遺跡概観	1
第2節 発掘調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	3
第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 周辺の遺跡	3
A 新津丘陵上の縄文時代遺跡	5
B 沖積地の縄文時代遺跡	5
C 弥生時代・古墳時代遺跡	6
第Ⅲ章 調査の概要	8
第1節 確認調査	8
第2節 発掘調査(第13次調査)	10
A 調査方法	10
B 調査経過	10
C 調査体制	11
第3節 整理作業	11
A 整理方法	11
B 整理経過	11
C 整理体制	11
第Ⅳ章 遺 跡	12
第1節 概 要	12
第2節 地形と層序	12
第3節 遺 構	13
A 遺構の概要	13
B 遺構各節	14
第Ⅴ章 遺 物	15
第1節 概 要	15
第2節 縄文時代の遺物	15
A 縄文土器	15
B 土製品	19
C 石 器	20

第Ⅵ章 総括	22
第1節 遺構	22
第2節 遺物	22
A 土器の様相	22
B 石器の様相	24
第3節 遺跡の位置づけ	25
引用・参考文献	26
別表	29
報告書抄録・奥付	巻末

### 挿図目次

第1図 秋葉遺跡の主な調査地点	2	第7図 遺構の平・断面形態の分類	13
第2図 秋葉遺跡周辺の地形分類図	4	第8図 遺構埋土の堆積形状の分類	13
第3図 秋葉遺跡周辺の遺跡分布図（縄文・弥生・古墳）	7	第9図 縄文時代後・晩期の掘立柱建物の分類	13
第4図 秋葉遺跡確認調査（第1次調査）位置図	8	第10図 円筒上層式土器実測図	22
第5図 秋葉遺跡確認調査（第1次調査）試掘坑配置図	9	第11図 秋葉遺跡と周辺遺跡の土器混和材	24
第6図 秋葉遺跡確認調査（第1次調査）土層柱状図	9	第12図 秋葉遺跡半径4km圏の縄文時代遺跡分布図	25

### 表目次

第1表 秋葉遺跡調査履歴	2	第3表 秋葉遺跡第13次調査出土土器の混和材分類別 点数	23
第2表 秋葉遺跡周辺の縄文・弥生・古墳時代の遺跡	6		

### 別表目次

別表1 遺構計測表	29	別表3 土製品観察表	33
別表2 土器観察表	30	別表4 石器・石製品観察表	33

### 図版目次

図版1 周辺の旧地形図	図版7 包含層出土土器（3）
図版2 秋葉遺跡調査区とグリッド設定図	図版8 包含層出土土器（4）・第7次調査出土土器
図版3 遺構全体図（1/80）	図版9 土製品
図版4 遺構個別図（1/80、1/40）	図版10 遺構出土石器・包含層出土石器（1）
図版5 遺構出土土器・包含層出土土器（1）	図版11 包含層出土石器（2）
図版6 包含層出土土器（2）	



## 写真図版目次

- |        |                                  |         |                  |
|--------|----------------------------------|---------|------------------|
| 写真図版 1 | 秋葉遺跡空中写真、第 13 次調査完掘写真            | 写真図版 6  | 包含層出土土器 2        |
| 写真図版 2 | 着手前状況、表土掘削、基本層序 1・2、SK20・54      | 写真図版 7  | 包含層出土土器 3        |
| 写真図版 3 | SK55、SK56、SB1                    | 写真図版 8  | 土製品              |
| 写真図版 4 | SB1、第 7 次調査 SK1、完掘状況、第 7 次調査完掘状況 | 写真図版 9  | 遺構出土石器、包含層出土石器 1 |
| 写真図版 5 | 遺構出土土器、包含層出土土器 1                 | 写真図版 10 | 包含層出土石器 2        |
|        |                                  | 写真図版 11 | 秋葉遺跡出土縄文土器の胎土    |

# 第 I 章 序 章

## 第 1 節 遺 跡 概 観

秋葉遺跡は新潟市秋葉区秋葉 1 丁目 4704 番地に位置する。平成元年刊行の新津市史に表面採集された土器が掲載されており、その記載に基づき周知化された。

秋葉遺跡で最初に発掘調査が行われたのは、平成 10（1998）年の確認調査である。広範囲で縄文時代中期から後期にかけての遺物が出土した。翌平成 11（1999）年の個人住宅建設に伴う本発掘調査においても竪穴住居 2 棟がみつき新津丘陵の拠点的な集落であることが分かった。

平成 18（2006）年には、下水道工事により広範囲の工事立会を行った。その結果、北側に隣接する秋葉ブードー園遺跡と一体のものであることがわかり、秋葉ブードー園遺跡を秋葉遺跡に統合し現在の範囲となった。

## 第 2 節 発掘調査に至る経緯

平成 10 年 7 月 17 日新潟市教育委員会（当時。以下新潟市教委という。）に対して土地所有者（個人）から新潟市秋葉 1 丁目（現：新潟市秋葉区秋葉 1 丁目）の荒蕪地での宅地造成計画による文化財保護法（以下法という。）第 57 条の 2 第 1 項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出と埋蔵文化財事前調査の依頼があった。このため新潟市教委は、同年 7 月 23 日に新潟県教育委員会（以下県教委という。）あてに進達を行ったところ確認調査の指示があり、同年 7 月 24 日から 28 日のうち実質 4 日間に確認調査（第 1 次調査）を行った。調査の結果、縄文時代中期・後期を主体時期とする土器や石器が平箱 10 箱出土した。埋設土器や遺物の出土量の多さから、新潟市教委は開発の際には本調査が必要との認識を示したが、その後 10 年経過しても開発は行われなかった。

平成 21 年には今回調査を行った場所で家庭菜園および宅地内通路整備の計画により法第 93 条第 1 項の規定に基づく埋蔵文化財の届出と埋蔵文化財事前調査の依頼が開発者（個人）からあった。これにより平成 22 年に区画の擁壁設置部分についての確認調査（第 7 次調査）が行われた。なお平成 23 年度には個人住宅 3 棟の建設計画についての事前照会が新潟市教育委員会（以下新潟市教委という。）あてにあり、平成 10 年の確認調査の結果を基に協議を行い、擁壁設置部分についての確認調査（第 9 次調査・第 10 次調査）を行い、住宅基礎部分は工事立会で対応した。

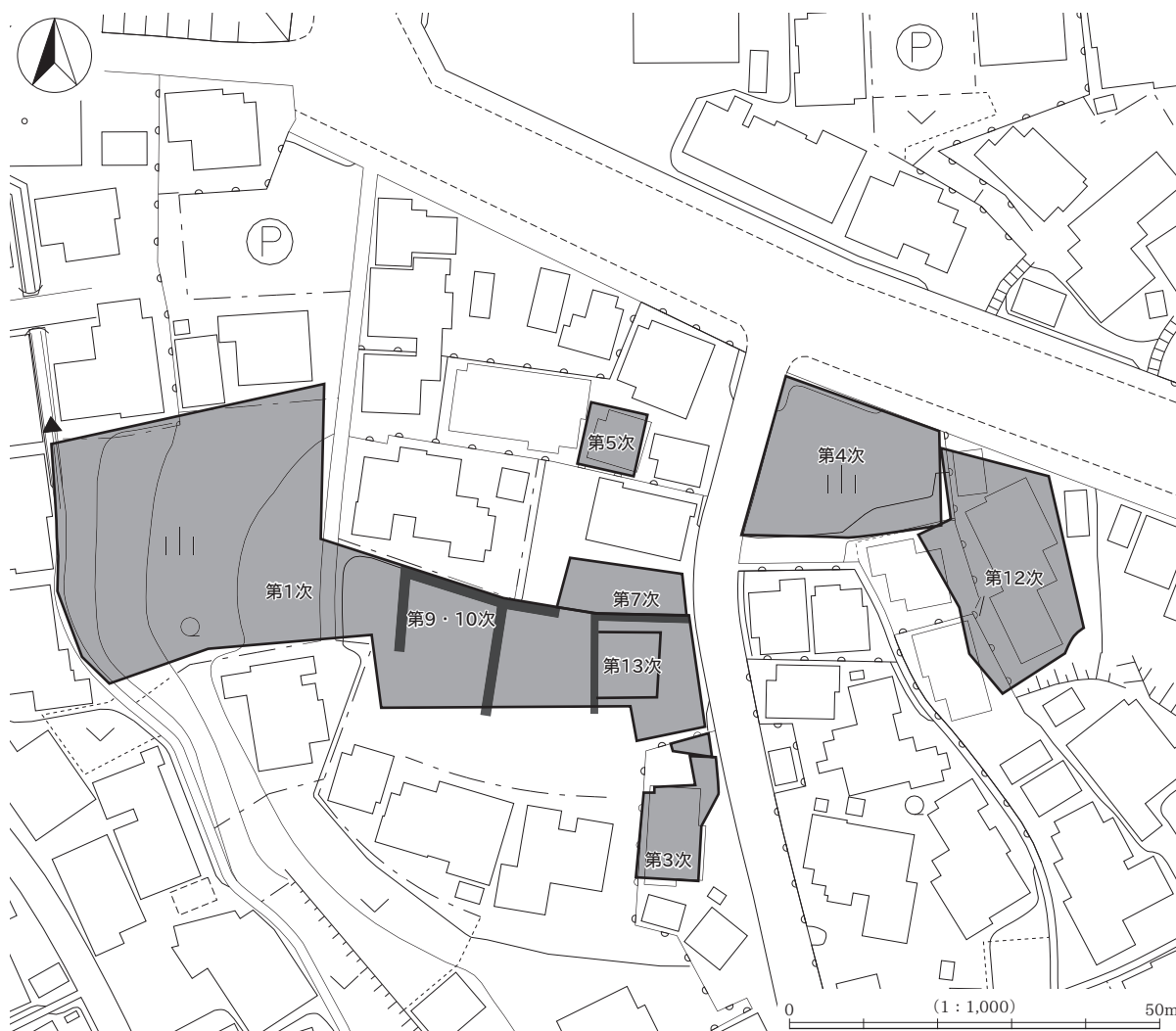
平成 29 年になり、今回の調査地について個人住宅を建設する旨の事前照会が開発者（個人）からあった。新たに確認調査は行わず、平成 10 年の確認調査成果に基づいた協議を行い、同年 5 月 26 日付で法第 93 条第 1 項の規定による埋蔵文化財の届出と埋蔵文化財事前調査依頼書が提出された。住宅基礎部分は、地盤改良が予定されていることから遺跡の現状保存ができないため、地盤改良および住宅基礎が入る部分について本発掘調査をすることとなった。新潟市教委は同年 6 月 12 日から 7 月 1 日までを実施期間とする埋蔵文化財発掘調査の着手報告（法第 99 条）を県教委教育長に提出し、市文化財センターが本発掘調査を実施した（第 13 次調査）。

第2節 発掘調査に至る経緯

第1表 秋葉遺跡調査履歴

通算調査回数	調査年	調査種別	調査原因	調査主体	調査担当	主な成果	調査面積	文献	備考
第1次	H10(1998)年7.24～7.28	確認調査	宅地造成	新津市	立木宏明	縄文時代中期から後期の土器が出土した	62.25㎡	[本書]	
第2次	H11(1999)年6.28	確認調査	個人住宅建設	新津市	渡邊朋和	竪穴住居を検出	12.0㎡		
第3次	H11(1999)年7.5～7.25	本調査	個人住宅建設	新津市	渡邊朋和	竪穴住居2棟と縄文時代中期から後期初頭にかけての集落跡	100.0㎡		
第4次	H18(2006)年5.12～5.13	確認調査	駐車場造成	新潟市	潮田憲幸	縄文時代中期から後期にかけての土器が出土した	12.8㎡		
	H18(2006)年7.18～ H19(2007)年1.29	工事立会	下水道新設	新潟市	朝岡政康				この結果により、秋葉ブド一園遺跡と統合
第5次	H20(2008)年7.30～8.1	確認調査	個人住宅基礎除却	新潟市	今井さやか	縄文時代中期から後期の土器・土偶が出土した	5.0㎡		
第6次	H21(2009)年6.17	確認調査	個人住宅建設	新潟市	今井さやか	—	3.0㎡		
第7次	H22(2010)年2.4～2.15	確認調査	擁壁設置	新潟市	潮田憲幸	土坑16基のほか、縄文時代中期～後期の土器が出土した	23.65㎡	[本書]	
第8次	H22(2010)年4.19	確認調査	個人住宅建設	新潟市	立木宏明	—	3.0㎡		
第9次	H24(2012)年4.23～5.20	確認調査	個人住宅建設	新潟市	渡邊ますみ	縄文時代中期から後期の土器、石器等が出土した	24.9㎡	[新潟市2014]	
第10次	H24(2012)年4.23～5.20	確認調査	個人住宅建設	新潟市	渡邊ますみ		15.7㎡	[新潟市2014]	
第11次	H27(2015)年1.29～1.30	確認調査	個人住宅建設	新潟市	朝岡政康	—	12.58㎡		
第12次	H27(2015)年5.11	確認調査	個人住宅建設	新潟市	諫山えりか	土坑・ピットのほか縄文時代中期～後期の土器が出土した	3.0㎡		
第13次	H29(2017)年6.12～6.27	本調査	個人住宅建設	新潟市	今井さやか	土坑3基のほか縄文時代中期～後期初頭の土器・石器・土偶が出土した	97.85㎡	[本書]	

※工事立会については、遺跡の統合・拡大に関わるものを掲載した



第1図 秋葉遺跡の主な調査地点 (1/1,000)

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境（第2図）

新潟市は広大な越後平野のうち、信濃川と阿賀野川の河口にあたる総面積 726.1km<sup>2</sup> の市である。大部分が沖積地から成るが、越後平野の西端に角田山塊、東に新津丘陵がある。新津丘陵は越後平野の東縁に連なる「東山丘陵」の北端に位置する。この東山丘陵の新津市街地から加茂川に至る南北 17km 間は、一般に「新津丘陵」と呼ばれている。新津丘陵には南から護摩堂山（268m）、高立山（276m）、菩提寺山（248m）、金比羅山（139m）が連座し、金比羅山から南では標高 100m 以下の丘陵地となっている。丘陵の高さは北北東に向かって低くなり、丘陵北端の秋葉山付近では標高 70～80m ほどである。秋葉遺跡はこの丘陵裾の段丘上標高 20m 前後に立地している。遺跡の西には谷が形成され、起伏のある地形となっている。地質的には菩提寺山から北は中新世期（2,300 万～500 万年前）の砂岩・泥岩の互層、砂岩含礫泥岩、泥岩、礫岩などの堆積岩から形成されている。一方、菩提寺山南側は安山岩などの火山岩を主体としており、菩提寺山を境に地質が異なっている。

新津丘陵は石油の産出地としても知られる。明治 7（1874）年から平成 8（1996）年まで操業が継続した近現代の石油採掘・精製に関わる施設群は、平成 30 年に「国史跡新津油田金津鉞場跡」として新規登録がされている。新津油田の幕開けは、慶長 13（1608）年に真柄仁兵衛が新田開発地を探している際に草水（石油）が染み出ている所を複数発見したことにはじまる。その後、慶長 18（1613）年に真柄が新発田藩へ 7 か所の草水採掘を願い出て許可を受けている〔新潟市 2008〕。なお、この石油資源は古くは縄文時代から利用されていることが分かっており、5km 南下した大沢谷内遺跡では多数の天然アスファルトが出土している。アスファルトは原油の揮発性成分が失われ固形化したもので、少なからず新津丘陵に居住した縄文時代の人々は石油資源を目的として選地していたと言っておよむ。

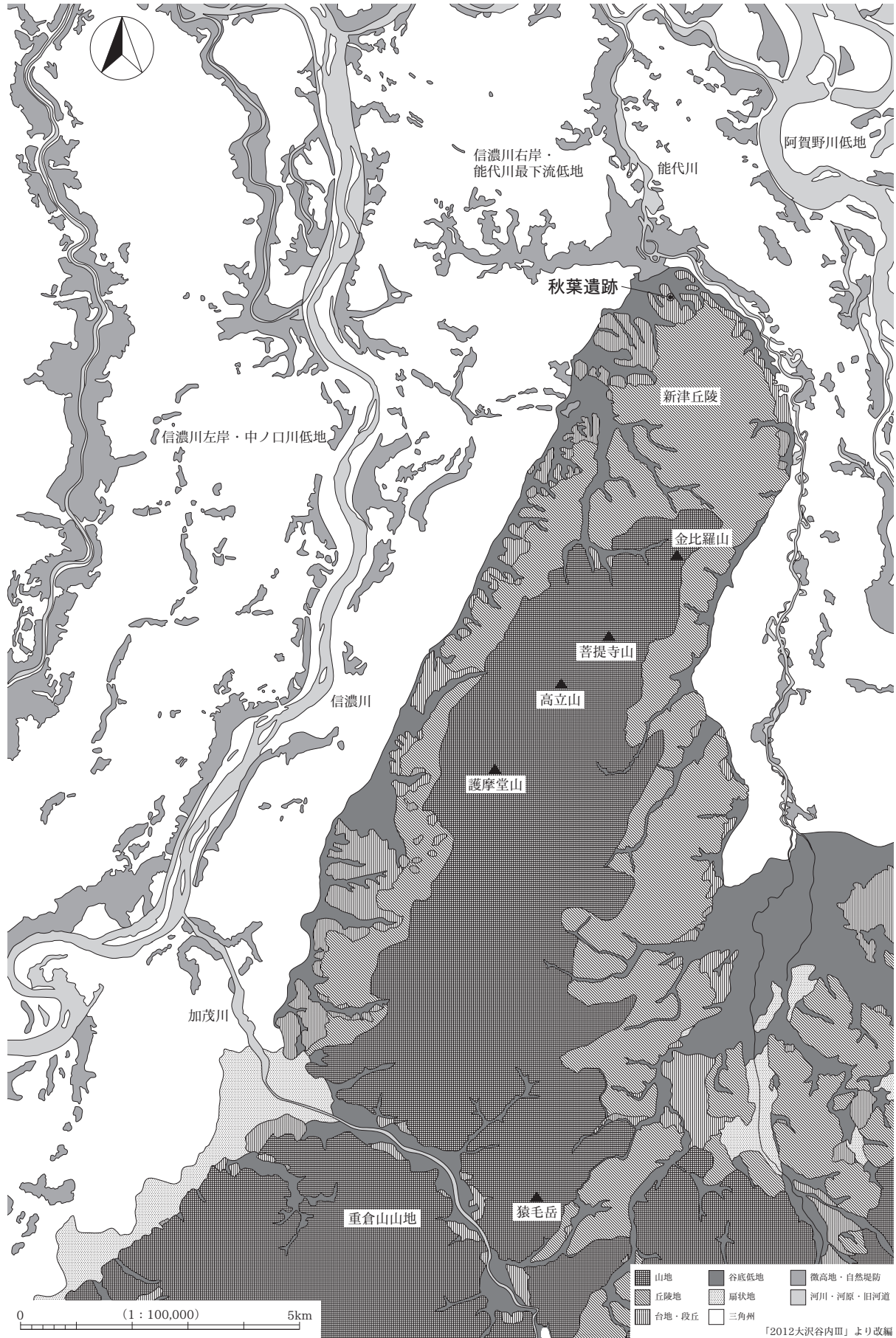
沖積地は、新津丘陵の東西を挟むように流れる阿賀野川・信濃川によって形成され、自然堤防や旧河道・後背湿地・三角州等の地形がみられる。現景観は水田地帯となっているが、江戸期～明治・大正にかけての揚排水工事や昭和の耕地整理によって乾田化する前にはいくつもの潟が存在していた。

次に気候について述べる。新潟市は日本海側に位置し、太平洋側と気候が大きく異なる。特に季節風の影響を受ける 11 月から 3 月末までは、降雪を含む降水量が東京の 10 倍にものぼる。

豪雪県として知られる新潟県であるが、強い北西の季節風によって山雪になることが多いため、新潟市での降雪量・積雪量はともに少ない。気象庁のデータによると新潟市の 1961 年～2002 年の積雪量平均は 31.5cm（2 月）と県内の豪雪地帯に比べると少ない。一方で新津丘陵がある新津地点での積雪量平均は 57.1cm と市街地のおよそ 1.8 倍の積雪量がある。

### 第2節 周辺の遺跡（第3図・第2表）

新津丘陵周辺の縄文・弥生・古墳時代の遺跡分布を第3図・第2表に示す。時代別の分布をみると縄文時代は丘陵上および縁辺の段丘を中心に分布し、沖積平野部にも散見される。近年沖積地での試掘調査により、これまで深層に埋没して発見が容易でなかった遺跡の確認される例が相次いだことによる。弥生時代の遺跡は丘陵・段丘上に集中する。古墳時代になると沖積平野上にも遺跡が分布し、稲作をきっかけに人々が沖積地へと進出しはじめたことがわかる。



第2図 秋葉遺跡周辺の地形分類図



## A 新津丘陵上の縄文時代遺跡

新津丘陵上で最も古い縄文時代の遺跡としては、丘陵北東部に草創期の愛宕澤遺跡 (No.109) があり、草創期前半の石器 (神子柴型の石斧・石核) が出土している [立木ほか 2004]。続く早期の遺跡は現在のところ確認されていない。前期の遺跡では、丘陵北西部に位置する居村 C 遺跡 E 地点 (No.34) から前期前葉布目式段階の土器が少量確認されている [渡邊ほか 1997]。また、程島館跡 (No.10) が丘陵北西末端部に位置する。程島館跡は平成 29 (2017) 年に個人住宅建設に伴う本発掘調査が行われ、縄文時代前期末の土器のほか、国内で 20 例ほどしか出土例を見ない「の」字状石製品が出土している [相澤 2019]。縄文時代中期から遺跡の数が増加しはじめる。特に新津丘陵裾部には、中期から後期にかけての長期継続型の拠点集落遺跡が出現し本遺跡もその一つに含まれる。その他の新津丘陵上の拠点集落遺跡は、丘陵東側に平遺跡 (No.107) (中期初頭～前葉、後期初頭～中葉)、居平遺跡 (No.108)、西側に原遺跡 (No.15) (中期～晩期) がある。このうち平遺跡は昭和 56 (1981) 年に個人住宅建設に伴って発掘調査が行われ、縄文時代後期の竪穴住居跡や土坑が出土している [川上・遠藤 1983]。

原遺跡では平成 26 (2014) 年に社殿建替えに伴う確認調査が行われ、縄文時代後期後葉～晩期の土器埋設土坑 2 基、土坑 4 基が、また平成 30 (2018) 年には個人住宅建設に伴う本発掘調査が行われ、小規模の調査ながら埋設土器 3 基、袋状土坑を含む土坑 16 基などが確認された。いずれの調査においても、アスファルト付着土器が出土し、後述する大沢谷内遺跡 (No.41) との関連性が想定される [前山 2016、立木 2020]。

## B 沖積地の縄文時代遺跡

新津丘陵周辺の沖積地においても近年発掘調査が行われ、その内容が明らかになっている。本遺跡から最も近い沖積地の遺跡として大野中遺跡 (No.9) (中期前葉～中葉、後期前葉) がある。平成 20 (2008) 年の病院建設に伴う試掘調査で地表面下 2m から遺物が見つかった。新津丘陵周辺の沖積地遺跡では最も古い遺跡である [前山 2018]。五泉市巳ノ明遺跡 (No.102) (後期前半前葉) は新津丘陵東麓の山裾から約 1km 東に位置する。能代川改修に伴う発掘調査が行われ、平地式の住居状遺構 4 棟が確認された [山崎・草間・田村・金内ほか 2004]。縄文時代晩期になると沖積地の遺跡が目立って増加する傾向にある。特に新津丘陵西側の沖積地に立地する遺跡が多い。大沢谷内遺跡 (No.41)・大沢谷内北遺跡 (No.40) (縄文晩期中葉～後葉) では、一般国道 403 号小須戸田上バイパス整備工事に伴い平成 17 年から平成 28 年まで発掘調査が行われた。特に大沢谷内遺跡北部から大沢谷内北遺跡にかけては、縄文時代晩期中葉の大洞 C1 式期から大洞 C2 式前半期の亀甲形の掘立柱建物 3 棟や屋外炉といった遺構のほか、不整形な板状のアスファルト塊が大量に出土し、縄文時代の人々のアスファルト利用を裏付ける遺跡となっている。 [前山ほか 2010、細野・伊比ほか 2012]。また、大沢谷内遺跡の南部では、縄文時代後期後葉の鳥屋 2a 式段階の遺物のほか竪穴住居 2 棟と 6 角形の亀甲型の掘立柱建物 6 棟、長方形の掘立柱建物が 1 棟確認されており、居住域が大沢谷内遺跡の北側から南側へと移動していることがわかっている [相田ほか 2020]。大沢谷内遺跡・大沢谷内北遺跡ともに偏った石器組成や沖積地に立地するにも関わらず木製品や食料残渣の出土量が乏しいこと、土器の胎土分析によって遺跡外から搬入された土器がほとんどを占めることから一般的な拠点集落とはいえ、アスファルトの精製や交易を主としたキャンプサイト的な利用が想定されている [前山 2010、2020]。新津丘陵西側の田上町保明浦遺跡 (No.54) では墓を含む多数の土坑および晩期後葉を主体とする多量の土器・石器類、土偶などが出土した [田畑 1993・1996・2003・2004]。この遺跡でもアスファルトが厚く堆積した土器の底部が出土しており、新津丘陵とアスファルトの密接な関係が見られる。

## C 弥生時代・古墳時代の遺跡

弥生時代の遺跡も丘陵を中心に分布する。本遺跡においても平成15(2003)年に調査外であるが弥生時代中期前葉の土器が1点確認されている〔渡邊・立木ほか2004〕。古津八幡山遺跡(No.30)は弥生時代後期から終末期の高地性環濠集落であり、二重の環濠・竪穴住居・方形周溝墓が確認されている。河川交通により北陸と東北南部とを結節する重要な場所であった〔渡邊・立木ほか2001・2004、相田・渡邊2014〕。新潟市外では、新津丘陵西裾の田上町に後期前葉の中店遺跡(No.43)〔中島ほか1976〕、丘陵東裾の五泉市に後期中葉の高地性集落の大倉遺跡(No.99)〔川上1994、尾崎2005〕が挙げられる。沖積地に立地する弥生時代遺跡は、大沢谷内遺跡(No.41)や大沢谷内北遺跡(No.40)で弥生時代後期の土器がわずかに出土しているのみで、遺跡数・出土量ともに多くない〔細野・伊比ほか2012〕。

古墳時代の遺跡は丘陵西裾に古墳時代中期の舟戸遺跡(No.17)〔相田2015a、金田2017〕、塩辛遺跡〔相田2015b、相田2018〕がみられる。これらの集落は、県内最大規模の古津八幡山古墳(No.29)を造営した人々の集落と考えられる。沖積地の集落としては、丘陵北側の能代川流域に、古墳時代中・後期の沖ノ羽遺跡〔石川ほか1996、遠藤・澤野ほか2014〕、古墳時代後期の中田遺跡(No.2)〔笹澤(諫山)2009〕など8遺跡が分布しており、丘陵東側の五泉市では古墳時代前期の笥下遺跡(No.103)〔山崎・鈴木2004〕や古墳時代前期・後期の住吉田遺跡(No.94)〔山崎・草間2004〕が挙げられる。沖積地への本格的な進出が古墳時代中期以降にあったことを裏付ける。

第2表 秋葉遺跡周辺の縄文・弥生・古墳時代の遺跡

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	結	古墳	24	二百刈	縄文	45	糠吐	縄文	68	花立	縄文	91	中江橋	古墳
2	中田	古墳	25	江先	縄文	46	長沢	古墳	69	加茂市役所	縄文(中・後)	92	浦西	古墳
3	結七島	古墳	26	下谷地	縄文	47	三波	縄文	70	遊覧場	縄文	93	宮古	縄文(中)
4	内畑	古墳	27	烏撃場	縄文(後)	48	古屋敷	縄文(前・中)	71	桜沢	縄文	94	八幡平	縄文(後)
5	中谷内	古墳	28	神田	縄文	49	土居下	古墳	72	岩野原A・C・D	縄文(中・後・晩)	95	八幡	縄文
6	上浦B	古墳	29	古津八幡山古墳	古墳	50	新川	縄文	73	岩野原B	縄文(中)	96	南谷地西	縄文
7	沖ノ羽	古墳	30	古津八幡山	縄文(後)・弥生・古墳	51	塚野	縄文(中・後)	74	七谷忠魂碑	縄文(中・後)	97	住吉田南	古墳
8	山谷北	古墳				52	川ノ下	縄文(後)	75	松ヶ沢	縄文(中)	98	五百地	縄文
9	大野中	縄文(中・後)	31	高矢A	縄文(後)	53	半ノ木	縄文	76	猿毛山	縄文(前・後)	99	大倉山	弥生
10	程島館跡	縄文(前・中)	32	高矢B	縄文	54	保明浦	縄文(晩)	77	下土倉	縄文(前・中)	100	四十九沢	縄文
11	味方排水機場	縄文(中)	33	鎌倉新田居村	縄文	55	川船河	縄文(中・後・晩)	78	牧	縄文(中・後・晩)	101	赤坂	縄文(前・中・後)
12	山崎	縄文(後)	34	居村C	縄文・弥生	56	陣ヶ峰北	縄文(中・後)	79	大坪Ⅰ・Ⅱ	縄文	102	巳ノ明	縄文(中・後)
13	城見山	縄文	35	居村B	弥生	57	石川	古墳	80	岡屋敷	縄文(晩)	103	笥下	縄文(晩)
14	沢海	縄文(後)	36	三沢原	縄文(前)	58	釜淵	古墳	81	野入Ⅰ・Ⅱ	縄文	104	下野山	縄文(後)
15	原	縄文(中・後・晩)	37	十ヶ沢B	縄文(後)・弥生	59	馬寄	古墳	82	一ノ沢	縄文	105	諏訪田	弥生
16	東島大道下	古墳	38	坪が入	縄文	60	丸湯	古墳	83	寺田	縄文(晩)	106	小突山	縄文(中・後・晩)・弥生
17	舟戸	弥生・古墳	39	横川浜堤外地	縄文(中)	61	白山A	古墳	84	寺田A	弥生	107	平	縄文(中・後)
18	塩辛	弥生・古墳	40	大沢谷内北	縄文(晩)・弥生	62	白山B	古墳	85	羽場山	縄文	108	居平	縄文(中)
19	山脇	古墳	41	大沢谷内	縄文(後・晩)・弥生・古墳	63	剱前	古墳	86	刈羽	縄文	109	愛宕澤	縄文(草)
20	平林	縄文				64	吉津川	弥生・古墳	87	カイガ沢	縄文	110	草水町2丁目跡	縄文(前)
21	山境	縄文(前・中)・弥生	42	五社神社	縄文(後)	65	新田川	古墳	88	大沢洞穴	縄文(後)	111	新田	縄文
22	森田	弥生・古墳	43	中店	弥生	66	石川	弥生・古墳	89	大沢峠	縄文(中)			
23	高矢C	古墳	44	向屋敷	縄文	67	福島甲	縄文	90	上ノ坪南	古墳			





第3図 秋葉遺跡周辺の遺跡分布図（縄文・弥生・古墳）



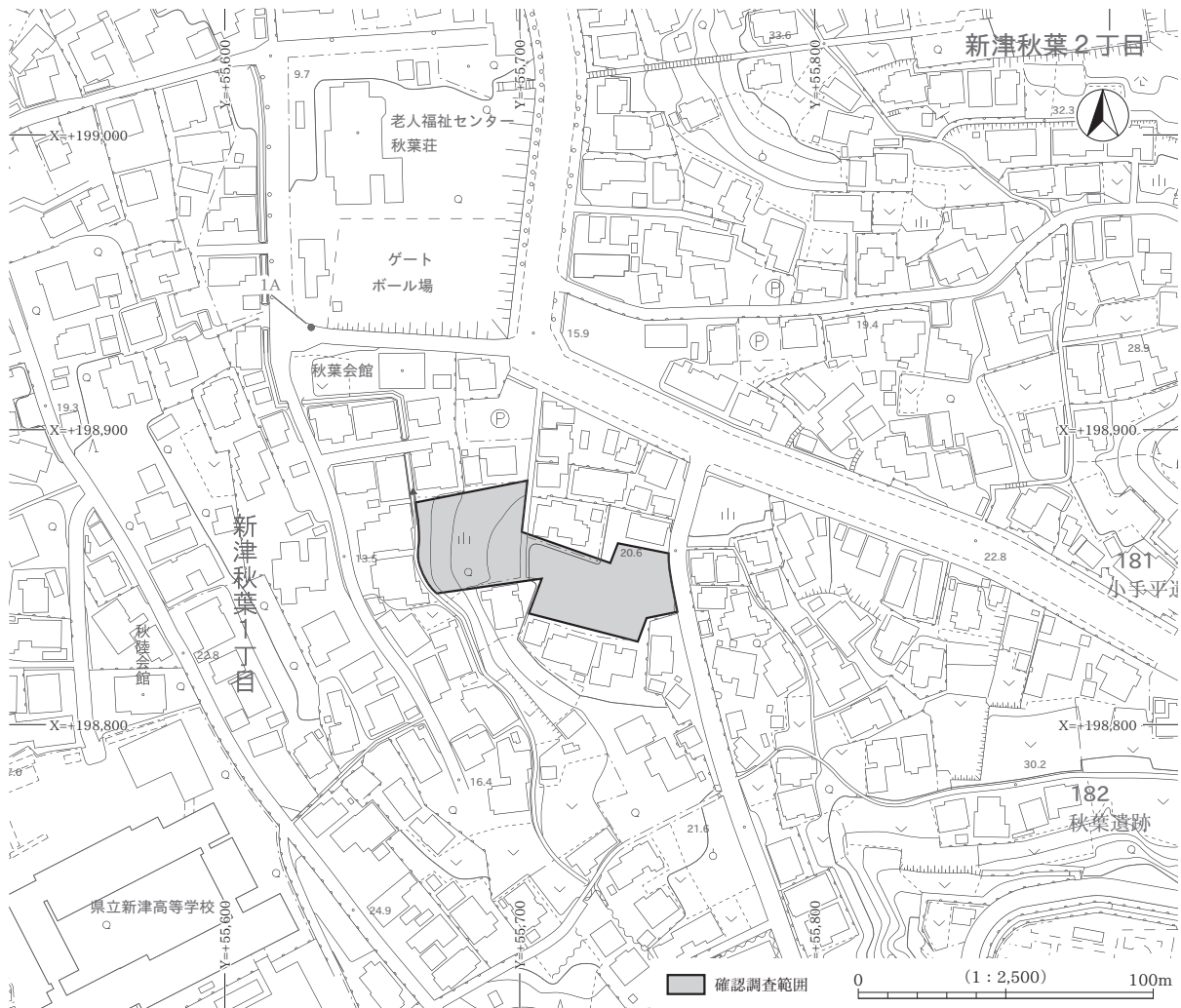
# 第Ⅲ章 調査の概要

## 第1節 確認調査(第4～6図)

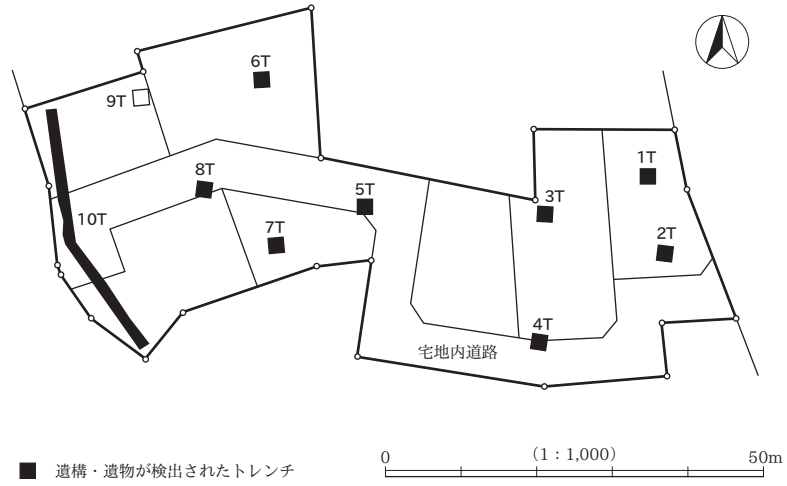
宅地造成の計画に伴い新津市教育委員会が主体となって行った調査である(第1次調査)。本遺跡において初めての発掘調査となった。調査は平成10(1998)年7月24日から7月28日の間の実質4日間行われた。開発予定地内に任意にトレンチを10か所設定し、人力により地山まで掘り下げた後精査を行った。一部のトレンチでは遺物の出土量が多く、地山までの全掘を行えなかった。

調査の結果、北西隅の9トレンチを除く全てのトレンチで遺物が出土した。遺物の多くが縄文土器で、時期としては中期中葉を中心とした中期前葉から後期初頭のもので出土した。石器は製品がなく剥片や礫石器が出土した。また、2・6・7トレンチでは土坑が各1基検出され、特に7トレンチでは埋設土器が見つかった。なお、8・10トレンチからは平安時代の土師器・須恵器の小片が出土している。

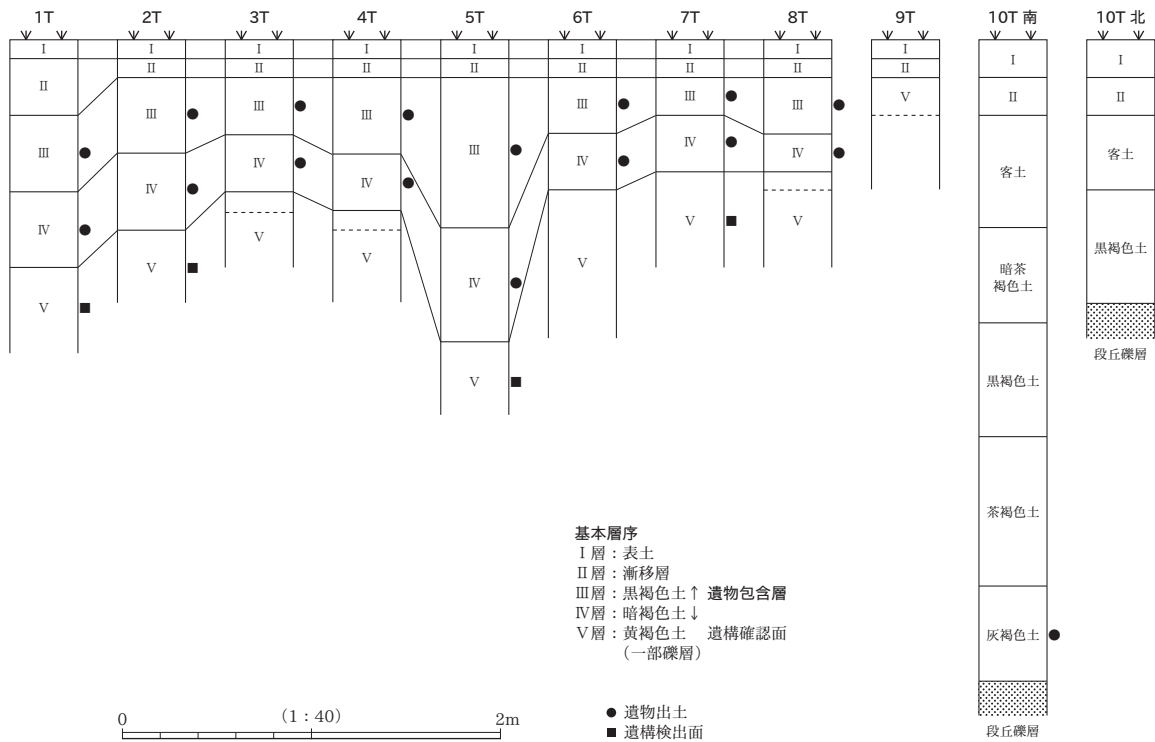
この結果、西端を除くおよそ2,100m<sup>2</sup>について本発掘調査が必要との判断を示した。しかし、当初の計画での開発は行われなかった。



第4図 秋葉遺跡確認調査(第1次調査)位置図



第5図 秋葉遺跡確認調査（第1次調査）試掘坑配置図



第6図 秋葉遺跡確認調査（第1次調査）土層柱状図

## 第2節 発掘調査(第13次調査)

### A 調査方法

#### 1) 現況(図版1)

調査地一帯は明治から昭和50年代頃まで茶畑であったが、次第に宅地化が進み調査地も砂利を敷いた簡易な駐車場及び家庭菜園として利用されていた。

#### 2) グリッドの設定(図版2)

平成11(1999)年の第3次調査に際して作成したグリッドに準じた。ただ、このグリッドは第3次調査の隣地境界を南北軸として設定し、南北軸をA～Mのアルファベット、東西軸1～14をアラビア数字で10mメッシュを組んでいる。そのためグリッド軸は正しく東西南北になっておらず、東へ2度55分3秒傾いている。調査ではこのグリッドを拡張し、測地成果2011に変換した。これをさらに2m方眼の25の小グリッドに分割し13H22のように呼称した。基準杭の打設は測量業者に委託した。

発掘調査区内の1点を含む座標は次のとおりである。

12H1 (X座標 198859.208 Y座標 55735.579 緯度 37° 47' 25.4257" 経度 139° 7' 58.1889" )

13I1 (X座標 198848.711 Y座標 55745.057 緯度 37° 47' 25.0831" 経度 139° 7' 58.5734" )

#### 3) 調査方法

- ① 表土剥ぎ：2層ある遺物包含層のうち下層にあたるIV層の上面まで遺物の出土に注意しながら重機(バックホウ)により除去した。排土はダンプにより仮置き場へ搬出した。法面は安全面を考慮し一分の勾配とした。
- ② 包含層掘削・遺構検出・遺構掘削：ジョレン等を用いて人力で包含層(IV層)の掘削と遺構の検出にあたった。排土は人力で調査区外へ搬出した。
- ③ 実測・写真：実測図は断面図を1/20で作成した。平面図や各種測量点は測量業者に委託しトータルステーションを用いて作成し、あわせて俯瞰写真を作成した。写真撮影は35mm判、6×7判のカメラを用い、白黒フィルム・カラーポジフィルムを適宜併用した。さらにデジタルカメラでの撮影も行った。
- ④ 遺物取り上げ：包含層遺物は小グリッド単位で取り上げた。遺構からの出土遺物は点数が少ないため層位・小グリッド単位ごとを一括で取り上げた。

### B 調査経過

平成29(2017)年5月26日から諸準備を開始し、6月12日に機材を搬入した。6月13日から14日まで調査区南側を重機によってI～III層を除去した。表土剥ぎと並行して作業員6名で法面仕上げと人力での包含層掘削を行った。南側の遺構を掘削し終わった後、北側についても6月19日と20日に重機によるI～III層の除去を行ったのち、人力での包含層掘削・遺構掘削を行った。6月23日に発掘作業を終え、完掘写真およびドローンによる航空写真撮影を行った。その後、調査漏れがないよう最終確認の面下げ調査を行い、6月26日に重機による埋め戻し作業を行った。

最終的な発掘調査面積は上端面積で97.85m<sup>2</sup>である。

## C 調査体制

### 【第13次調査】

調査期間	平成29年6月12日～平成29年6月26日
調査主体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長：藤井希伊子 課長補佐：廣野耕造 埋蔵文化財担当係長：朝岡政康） 新潟市文化スポーツ部文化財センター （所長：外山孝幸 所長補佐：渡邊朋和 福地康郎）
調査担当	今井さやか（市文化財センター 主査）

## 第3節 整理作業

### A 整理方法

#### 1) 遺物

遺物量はコンテナにして81箱である。ほぼすべてが縄文時代の土器・石器・石製品であった。

遺物の整理作業は次の手順で行った。① 洗浄。② 注記。③ 包含層出土遺物のグリッド別重量計測。④ 接合。⑤ 報告書掲載遺物の抽出。⑥ 実測図作成。⑦ 観察表の作成。⑧ 仮割付作成。⑨ 遺物の写真撮影。遺物実測は整理補助員が作成し、デジタルトレース及び版下作業は業者が作成しデジタルデータとした。

#### 2) 遺構

平面図を作成するにあたり、測量業者に委託した1/40の遺構平面図と手取り断面図の校正作業を行った。報告書の1/80の遺構平面図は測量業者が作成し、デジタルデータとした。

### B 整理経過

平成29年度から令和元年度までの3年間に基礎的な整理から報告書作成に至る作業を行った。平成29年度は遺物の洗浄・注記・計測・接合の基礎整理を行った。

平成30年度は遺物の抽出作業と実測作業を行い、遺物のデジタルトレースを行った。また遺構に関する図版作成。一覧表作成を行った。

令和元年度は図版作成、遺物の一覧表作成、本文執筆を行った。また遺物の写真撮影を行った。

### C 整理体制

#### 【平成30年度】・【令和元年度】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長：小沢昌己 課長補佐：廣野耕造 埋蔵文化財担当係長：朝岡政康） 新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター （所長（副参事）：渡邊朋和 主幹：天野泰伸・遠藤恭雄 係長：立木宏明）
整理担当	今井さやか（市文化財センター 主査）

## 第Ⅳ章 遺 跡

### 第 1 節 概 要

秋葉遺跡は丘陵裾の段丘上に立地する。現在の地表面は標高 20m 前後で南東から北西へ傾斜する。調査地の西側には谷があり、調査地との標高差は約 7m を測る。

遺構確認面までの深さは、現地表面から浅い地点で 0.6m、深い地点で 1.2m である。遺物包含層はⅢ層・Ⅳ層で縄文時代中期から後期の遺物が出土する。遺構は掘立柱建物が 1 棟、土坑 4 基、小土坑や柱穴 81 基が確認された。今回の調査で出土した遺物はコンテナ（内寸 54.3×33.6×10.0cm）で 81 箱である。内訳は縄文時代中期から後期の土器が 76 箱、石器・石製品が 4 箱、土製品が 1 箱である。

### 第 2 節 地形と層序（図版 3）

発掘調査着手前の調査地は、造成されたこともあり緩やかに傾斜するものの概ね平坦であった。これに対し遺跡形成当時の地形は南東から北西に向かって傾斜しており、南東隅から北西隅までの高低差は 1.1m である。1 辺が 9m 程の狭い発掘調査範囲での高低差であり、およそ 9% の勾配となる。実際に発掘調査現場に立つとかなりの傾斜を感じる。

秋葉遺跡の基本層序の堆積状況は、調査面が斜面地であるため一律ではない。現況が家庭菜園及び砂利敷駐車場であったため、宅地造成時の盛土と転圧を受けⅠ・Ⅱ層は土器を含むことはあるが攪乱されている層である。縄文時代の包含層であるⅢ・Ⅳ層は、40～60cm の厚さで調査区全体に広がっていた。また遺構確認面となる基盤層Ⅴ層は、淡黄色土（2.5Y8/3）を基本とするが調査区の南側付近では砂利を多く含むⅤb層が見られ一定ではない。これは新津丘陵の形成過程での堆積によるものか、縄文時代以前の土石流等によるものかははっきりしない。

Ⅰ層 表土 宅地造成時の盛砂

Ⅱ層 近現代の攪乱層

黒褐色土（10YR3/1）機械転圧されており非常に硬い層。焼土・現代ゴミとともに縄文土器もまじる。

Ⅲ層 縄文時代遺物包含層①

黒褐色土（10YR3/2）粘性強い、しまりあり。

Ⅳ層 縄文時代遺物包含層②

a 灰黄褐色土（10YR4/2）粘性強い、ややしまりあり。

b 灰黄褐色土（10YR4/2）粘性強い、ややしまりあり。基盤層の白色ブロック φ5cm が混じる

Ⅴ層 遺構確認面

a 明黄褐色土（10YR7/6）10～20mm の砂利が 50% 以上混じる。縄文時代後期の遺構が確認できる。

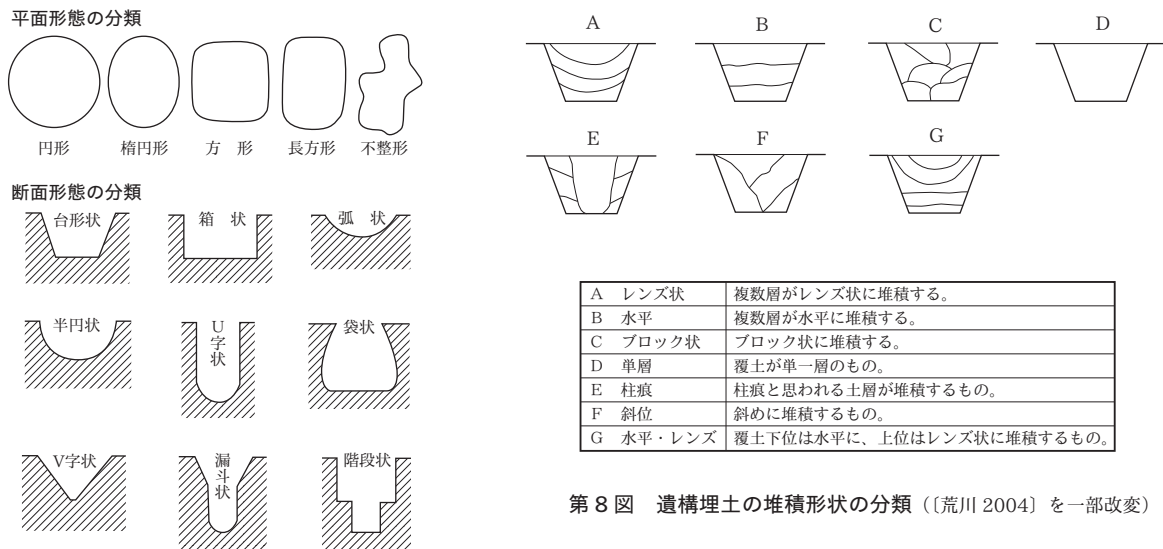
b 淡黄色土（2.5Y8/3）粘性強い、しまりあり 褐灰色土（7.5YR5/1）が貫入状に混じる。

### 第3節 遺 構

#### A 遺 構 の 概 要

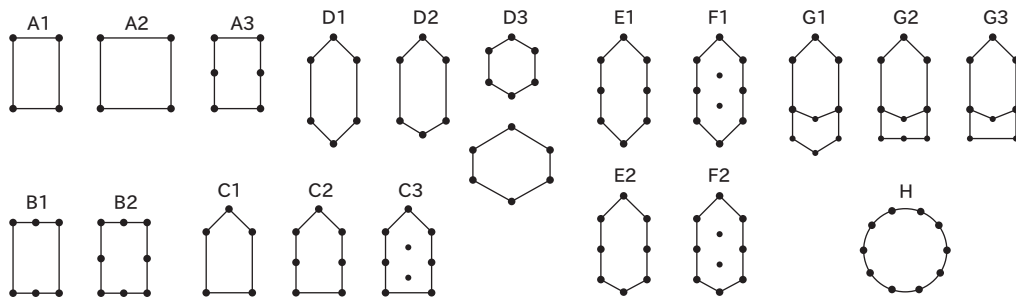
遺構番号は遺構の種別にかかわらず検出順に通し番号を付した。ただし、掘立柱建物については、個々のピットから抽出したために新たに番号を付している。説明は掘立柱建物、土坑の順に記す。詳しい遺構の計測値等は別表1に示した。遺構出土土器・土製品・石器の詳細は別表2～4に示した。本遺跡から検出された遺構の数量は掘立柱建物1基（以下SBとする）、土坑4基（以下SKとする）である。

遺構の平面形及び断面形態、堆積状況の分類については、『和泉A遺跡』・『青田遺跡』で示された分類〔加藤1999・荒川2004〕（第7・8図）によった。掘立柱建物の分類については、荒川の縄文時代後・晩期の掘立柱建物の分類〔荒川2018〕（第9図）によった。また遺構の規模と深度については、それぞれ遺構プランが確定した段階での長軸最大値と上端面から最深部までの値であり、遺構掘り込み面が遺構確認面より高かった場合、本来の規模・深度はそれよりも大きい値であった可能性が高い。



第7図 遺構の平・断面形態の分類〔加藤1999〕

第8図 遺構埋土の堆積形状の分類（〔荒川2004〕を一部改変）



第9図 縄文時代後・晩期の掘立柱建物の分類〔荒川2018〕



## B 遺 構 各 節

### 1) 掘 立 柱 建 物 (SB)

1 棟の掘立柱建物を確認した。

**SB1** (図版 4、写真図版 3・4)

12H・13H に位置する縄文時代の掘立柱建物である。P22-P26-P35-P57 と 7 次調査の SK1 の 5 本から構成される。柱穴の深度がそれぞれ 40cm 前後で、その他の小土坑に比べて深く径も大きい。主軸は N-76°-W、1 間×2 間で、北側の中間の柱穴は調査区外のため確認できなかった。桁行 5.82m 梁行 2.82m を測り面積は 16.41m<sup>2</sup> と推定される。建物を構成する P35 からは縄文時代中期の深鉢 (10) が出土している。また P26 も西壁断面で Va 層からの掘り込みであることから、縄文時代後期の中でも古い時期に位置づけられる。荒川による掘立柱建物の A3 類に分類される〔荒川 2018〕。

### 2) 土 坑 (SK)

4 基の土坑を確認した。

**SK20** (図版 4、写真図版 2)

13I7 に位置する。平面は方形で、断面は弧状をなす。確認面での規模は長軸 0.59m、短軸 0.54m、最大深度 0.18m を計るが上層包含層 IV 層から掘りこまれていたため、実際の遺構規模は計測値より大きいと推察される。縄文時代中期から後期の土器 (1～5) が出土している。

**SK54** (図版 4、写真図版 2)

12H20・25、13H16・21 に位置する。平面形は一部調査区外へ延びるため全体像は不明であるが楕円形と推定される。規模も推定であるが長軸 1.52m、短軸 0.64m となり、確認される最大深度は 0.29m を計る。北壁断面の観察から Vb 層より掘り込まれていることがわかる。縄文時代中期から後期の土器 (7・8)、土偶 (1) 石核 (2) が出土している。

**SK55** (図版 4、写真図版 3)

13I1・2 に位置する。平面は円形で、断面は逆台形をなす。確認面での規模は長軸 0.87m、短軸 0.64m、最大深度 0.14m を計るが、上層 IV 層から掘りこまれていたため、実際の遺構規模は計測値より大きいと推察される。小片のため図示していないが、縄文土器が出土している。

**SK56** (図版 4、写真図版 3)

13H21、13I1 に位置する。平面形は不整形で、断面は台形をなす。確認面での規模は長軸 0.56m、短軸 0.38m、最大深度 0.18m を計る。縄文時代中期の土器 (9) が出土している。

# 第V章 遺 物

## 第1節 概 要

今回の調査によって出土した遺物量は、コンテナ（内寸 54.3×33.6×10.0cm）換算で示すと土器が76箱、石器・石製品が4箱、土製品が1箱となる。

## 第2節 縄文時代の遺物

### A 縄 文 土 器

#### 1) 概 要

本発掘調査で出土した土器は、縄文時代中期前葉から縄文時代後期初頭に属する土器群が主体である。接合・復元ののち7次確認調査の資料2点を加え110点を掲載した。

土器は、そのほとんどがⅢ・Ⅳ層の包含層から出土している。中でも遺構が多くみつかった調査区北側からの出土が目立つ。

#### 2) 記述の方法と観察表

資料の掲載は、遺構・包含層・確認調査資料の順で行った。包含層出土資料については、概ね時期ごとに掲載している。掲載資料の提示は実測図・写真で行い、遺物個々の詳細な諸属性については観察表に記載した。なお、深鉢形土器・浅鉢形土器・蓋形土器は、それぞれ深鉢・浅鉢・蓋と略して用いる。

また、土器胎土の混和材について磨耗した石英・長石・岩石の有無と破碎した石英・長石、雲母・角閃石・ガラス状粒子・軽石の含有量に基づき以下の分類を行った。粘土に含まれる海綿骨針と赤色粒子（酸化第二鉄が被熱によって発色）は除外した。

I a 類：磨耗した石英・長石を含む土器。以下の7種に細分する。

I a1 類：磨耗した石英・長石以外に多量含有粒子がみられない。

I a2 類：多量の破碎石英・長石を伴う。

I a3 類：多量の角閃石を伴う。

I a4 類：多量のガラス状粒子を伴う。

I a5 類：多量の石英・長石と角閃石を伴う。

I a6 類：多量の石英・長石とガラス状粒子を伴う。

I a7 類：多量の角閃石とガラス状粒子を伴う。

I b 類：磨耗粒子が各種岩石に限定される土器。以下の7種に細分する。

I b1 類：磨耗岩石以外に多量含有粒子がみられない。

I b2 類：多量の破碎石英・長石を伴う。

I b3 類：多量の角閃石を伴う。

I b4 類：多量のガラス状粒子を伴う。

I b5 類：多量の破碎軽石を伴う。

I b6 類：多量の角閃石と破碎軽石を伴う。

I b7 類：多量のガラス状粒子・角閃石・破碎軽石を伴う。



Ⅱ類：磨耗粒子が欠落し、破砕した石英・長石を含む土器。以下の3種に細分する。

Ⅱa類：破砕した石英・長石以外に多量含有粒子がみられない。

Ⅱb類：多量の雲母を伴う。

Ⅱc類：多量の角閃石を伴う。

### 3) 出土土器各説

#### ① 遺構出土土器 (図版5-1~13、写真図版5)

土器が出土した遺構は、調査区東側の標高が高い範囲と、北側のSB1付近に集中している。

SK20 (1~5) 1は、キャリパー形深鉢の内湾する口縁部で、端部をごくわずかに欠損する。高く粘土紐を貼付けた隆帯で、楕円形区画と渦巻き状の文様を描く。区画の隆帯には沈線を沿わせ、その区画内に縄文LRを横回転で充填する。中期中葉の大木8b式。2は内湾する口縁部で、口端は細くつままれたように直立する。口端部は無文で、調整しない細い沈線で縦回転LRの縄文部とを画する。内外面とも炭化物の付着が顕著である。後期初頭であろう。3は直立する口縁部で、口端は丸みをもって尖り、沈線による楕円区画内にはRL縄文を充填し、さらに沈線をなぞっている。大木9b式。4は、外傾する深鉢口縁部である。半截竹管の内面で多段のカマボコ状隆帯を描出するが、器面への押しが弱いため多くは隆帯とならずに平行沈線となる。大木8b式。5は、細い棒状工具で密に沈線を引く。中期後葉の浅鉢にみられる文様だが、内面の整形から深鉢と考えられる。底面はヘラによってナデられ、おそらく敷物圧痕を消している。内外面や割れ口には、長径2mm弱の円形・楕円形の小穴が多数みられ、種実痕の可能性がある。

SK54 (7・8) 7は深鉢の体部下半で、上下端とも積み上げた粘土紐の部分で剥落している。器面全体にLR縄文を縦方向に回転施文してから、左端は半截竹管で、他は棒状工具で並走沈線を垂下させており、大木8b式である。8は太い沈線による円弧の区画内にLR縄文が充填され、再度沈線がなぞられる。中期後葉大木9b式。

SK56 (9) 緩く外反する口縁部で、口縁端面に沈線が1本巡る。口頸部には竹管で平行沈線を描く。大木8b式。

P27 (11) 器面が荒れていて判然としないが、体部で強く内折する浅鉢の口縁部と考えたい。半截竹管腹面の半隆起線で、多段の平行隆帯文とそれらをつなぐ文様を描く。中期中葉。

P35 (10) ほぼ直立する口縁部で、口端内面が丸められる。ごく緩い直線状の波状口縁の頂部近くであり、口縁に並走する断面三角形の隆帯を巡らす。大粒の石英・長石粒と共に、水晶のように透明な高温石英粒を多量に含む特徴的な胎土である。大木8b式の新しい部分であろう。

P53 (6) 筒状の体部から緩く外反する器形と考えられ、波状口縁の頂部は平坦にナデられる。口端部には弧状の粘土紐が貼付けられ、そこから細沈線が垂下する。大木8b式。

P59 (12・13) 12は、無節縄文Lを縦方向に回転施文し、口端部は横にナデて無文とする。口縁を軽く内削ぎ状に面取りしており、細い縄文原体ともども後期初頭の特徴を示す。13は深鉢底部で、縄文LRを縦方向回転で全面施文してから、粘土紐を貼り付け、その両側縁に沈線を添わせる。隆沈線という大木8b式の特徴である。底面はナデ整形される。

#### ② 包含層出土土器 (図版5~8-14~109、写真図版5~7)

中期深鉢形土器 (14~40, 43~52, 56~68) 14・16・17・20は、半截竹管腹面による密な押し引き刺突で、口縁と並走するC字状の連続爪形文を描く。15は同様の工具で半隆起線文を口縁から3段巡らし、下方は櫛歯状工具の条線文を垂下させる。工具の幅は、14・16は7mm、15・17・20は11~13mmと広い。21は、側面を尖らせた多截竹管の腹面による低い隆帯を主として縦方向に施文し、その隆帯間には指爪による細かな連続刺突を加える。上端は、粘土帯接合部分の剥落によって偽口縁を成す。22は半截竹管による平行沈線で縦・横の文様を描き、それらの交点に盲孔の円形浮文を貼り付けるが、器面の摩耗が著しく文様構成が判然としない。胎土の砂粒は微細で、金雲母を含む。23は、2本の細いRの縄を左右に巻いた原体の木目状撚糸文が、縦方向に施文される。内面は横方向に丁寧なナデ整形が行われる。24は、半截竹管によるカマボコ状隆帯を多段に巡

らし、その上に粘土紐でX状の隆帯と盲孔浮文を貼り付ける。一番上の隆帯間沈線には、連続した刺突文が加えられる。14・17・20・24は、中期前葉の新しい部分で、馬高式の直前となろう。

18・19・25・40・43・52・54・56・59は、中期中葉の大木8a式・大木8b式・馬高式・柝倉式などで構成される。18は、ごく小さな波状の粘土紐を貼付け、その上下から棒状工具で単沈線を交互に引いて、波形を強調する。この貼付け文の上下には、幅5mmの半截竹管隆帯と、先端の平らな工具による連続刺突文が巡る。屈曲の弱いキャリパー形深鉢の口縁部となろう。大木8a式であろうか。19は、逆扇状に尖った波状口縁の頂部に右巻きの渦が描かれ、正面は左に渦、右に円形浮文を並べた立体文様が付けられる。内面は整形されず、水平方向に粘土紐を積み上げた成形手法が見える。26・27は、体部が緩く外反するコップ様の器形であり、26は斜め上を向くように貼り付けられた大きな渦巻き文様と櫛歯状工具での条線文を施し、27は半截竹管による区画内に同様の条線を充填する。これら19・26・27は、信濃川中流域に多い柝倉式である。25は口端が小さく内湾して尖り、内面に段を持つ。口端と内面は、磨かれて光沢がある。並走する沈線は、半截竹管によるカマボコ状隆帯間を深くなぞっている。28～34・38は、半截竹管による隆帯と並走沈線で器面を埋め、中期前葉から続く新潟平野伝統の技法である。28は内傾する口縁部で、半截竹管腹面でのカマボコ状隆帯を多段に並走させ、3段目の隆帯にはヘラ状工具で細かな刻みを加える。29は馬高式土器の筒状の体部下半で、竹管と沈線で渦を描く。30の口端内面は粘土を貼り足して口縁端面を幅広く作り、口縁直下は粘土の貼り付け隆帯、他は棒状工具で沈線を引いているが摩耗のため判然としない。31は馬高式土器の頸部よりも上方部分で、棒沈線で渦巻きが描かれる。32は大振りな波状口縁で、棒状工具による密な並走沈線で口縁に沿わせた多段の隆帯文様を形成する。33は、筒状の土器の波状口縁で、口縁端面には1本の沈線が引かれる。波頂部外面には粘土の貼付け文様があり、それを半截竹管による二重の弧線で囲む。胎土に海綿骨針を含む。34は多截の竹管で低い隆帯を巡らす、竹管の足部分を沈線でなぞってはいない。38は筒状の器形で、細い半截竹管隆帯の間の平坦面に、先端の平らな工具で連続刺突を行っている。

35以降の深鉢の大部分は、東北系の大木8b式である。その中でも、口縁部の横長楕円区画への単沈線充填、立体的に盛り上がった渦、断面が三角形状の隆帯、体部の渦や沈線文が連結して開放沈線がなくなる、といった特徴は、大木8b式の中でも新しい傾向である。

35は、緩く内湾する口縁部で、盛り上げた粘土隆帯の貼付けによる楕円形の窓状区画を設ける。36は、緩い山形の波状口縁で、口縁端面にはしっかりと沈線が引かれ、頂部の小さな渦につながる。この外面の縁は、半截竹管の内面でナデられ、丸味を帯びる。外面はLR縄文を縦方向に回転施文する。37は、緩く内湾する口縁部だが、外面の摩耗が著しく文様がはっきりしないものの、口端近くの盲孔を持つ円形浮文からは細い粘土隆線が延び、頸部近くには3本の沈線が巡る。39は、内湾するキャリパー形深鉢の口縁部で、太い棒状工具で渦と並行沈線を描く。40は、緩く内湾する口縁部外面に粘土を厚く貼付け、そこに半截竹管で3本の隆線を並走させる。わずかに剥落している部分には小突起が付くと考えられ、そこを起点に並走隆起線は弧を描く。体部の縄文はRLの横方向回転施文である。43・44は、口縁部がやや内傾して体部上半が膨らむ器形である。口縁部には貼付け隆帯で横長の区画を設け、短沈線や刺突文を密に充填する。43の縄文はLRの横回転で、最後に隆帯の際を棒状工具でなぞる。44は、口縁端面が幅広い平坦に成形されている。45は、平口縁に小さな山状の突起がつく。口端の2cm幅ほどは厚く、そこから弧状に下がる隆起線が渦を巻く。46は、LR縄文を縦回転施文した後、太い棒状工具で沈線を引く。47は体部の膨らむ器形で、粘土隆帯が触手を伸ばすように連結して歪んだ楕円状の区画を作り、その中に複節斜縄文を充填し、さらに隆帯に沿わせて沈線を引く。48は、口縁部の内面が屈曲したキャリパー形で、高い隆帯を貼り付けた区画内に連続させた単沈線を充填する。49は、口縁部を肥厚させて文様帯を際立たせ、太い沈線による渦と楕円文様を交互に配する。横長の楕円区画内には同じ工具による短沈線を並べ、渦は8単位で口縁が小突起状に盛り上がる。頸部は無文で、直下のRL縄文は横方向に回転施文、以下の体部は斜位に回転させるため条が縦走する。50は49と同様な器形の体部で、全面にRL縄文を

縦方向に施文してから、2本一組の沈線で曲線文様を描く。51は波状口縁で、口縁端面には太い沈線が引かれる。小さな渦の直上に波頂部が来よう。断面三角形の隆線で縦に長い区画を作り、そこに無節Lの縄を充填する。52は口端を隆線が巡り、その隆線につながる渦と、渦から垂下する2本の隆線が文様の骨格を成す。縦長の方形区画にLR縄文を縦回転施文後、隆線に沿わせるように横は1本、縦は2本ずつの沈線が引かれる。56は口縁部内面が屈曲し、口縁端部は三角形に尖る。貼付け隆帯で文様を描くが、左側の弧状部分には渦が付こう。57は口縁部が内湾する樽形の器形で、粘土紐を貼り付けた太い隆帯が2列巡り、左端の円弧には56と同様に渦が来よう。RL縄文を左上から右下へと斜位に回転させるため、条が縦走する。58は立体的な大きい渦であり、口縁端面は小さく面取りされている。59は隆帯の両側に棒状工具で沈線を引くが、RL縄文はその前に縦方向に施文されている。

60～68は中期後葉から末葉の、東北系の大木9・10式である。64は隆帯の楕円区画の中にRL縄文を充填し、下端に沈線が見られることから2本の隆線が垂下しよう。口縁は小波状で、大木9a式である。62は沈線による縦長の楕円区画にLR縄文を縦回転施文する大木9b式。63は微隆起線の曲線区画内に、中が空洞の植物の茎のような工具で小さな円形刺突を密に充填しており、大木10式である。文様で飾らない粗製土器のうち、口端の磨かれた無文帯と体部の縄文を微隆起線で画する60・65～67は大木10式であり、縄文はLRの縦回転。玉縁状で口縁端面が平坦な61と、68の器形は大木9式となろうか。61がLR縄文の横回転、68はRL縄文の縦回転施文である。

中期浅鉢形土器(41・42・53・55) 41・42とも体部が直線的に開く浅鉢であり、RL縄文施文の後に単沈線で文様を描く。41は強く内折する肩部に近いと考えられる。いずれも大木8a式。53は、口縁部で強く屈折する浅鉢で、横長の窓内に刺突列を2段並べる。55は浅鉢の口縁部に付けられた大きな突起の渦が上方を向く。これらは、大木8b式の新しい部分となろう。

後期深鉢形土器(69～103) 69～77は後期初頭の三十稻場式土器で、口縁部が強く「く」字状に屈折した蓋受け状の形状と、この括れ部に付く橋状把手や体部の刺突文に特徴がある。深鉢形あるいは甕形と言われる特徴的な器形である。蓋受け状の口縁部は、内面に稜を持つ69が古く、75・77のように鈍角で丸みを持つものが新しい傾向となる。この型式に通用の、口縁部が無文帯で、かつ体部文様とを区画するキザミや刺突の加飾された隆帯は、69・70・73・75～76にある。無文帯のない71や、加飾隆帯を欠く72・74は、阿賀野川流域以北の地域で散見する。橋状把手は、粘土板を渡したような69・70が古く、蓋と結縛する紐掛けを意識した挟りのある75から、粘土紐で渦や片タスキを加飾する73・77と新しくなる。体部の刺突文は、横方向から器面を抉って粘土を盛り上げる特異なもので、71・72・74・77にある。土器を正面に見て、右側からの刺突が一般的だが、77は逆方向でめずらしい。73は摩耗しているが、把手直下に結節縄文が見えることから体部は斜縄文となろう。76には、櫛歯状条線がわずかに見える。これらの三十稻場式土器は、二段階区分のうちの古段階にあたる。

深鉢78～103のうち、78・79・84・92は飾られた土器である。78の口端には、盲孔をもつ円形浮文が平口縁から突起状に飛び出し、この浮文間を二重の弧状沈線でつないで口端の無文部と体部の撚糸文とを区切る。無文部は横方向に磨かれ、口縁端面は面取りされる。撚糸文は、1段Rの細い縄を間隔を空けて軸に巻き、縦走させている。砂粒の少ない粉っぽい胎土(Ib1類)で、外面は口端まで炭化物が付着する。79は、貼り付けた粘土紐をなだらかな山状に成形し、列点状の刺突を加える。2本の隆帯の上端と下端には、沈線が沿う。口縁部・体部とも丁寧に磨かれるが、内面は指頭圧痕状の小さく浅い凹凸があり、浅鉢にはならない。84と92は同一個体で、口縁部は直立かやや内傾する器形である。口端は肥厚して玉縁状となり、それと一体の貼付け文には太沈線で逆C字状文と3個の盲孔が配され、綱取I式の影響を認められる。口端の玉縁に沿わせた沈線は、貼付け文部分で2本一組となって45度斜め下へと延び、体部下半では沈線同士がクロスする。また、左下から突き上げる手法の刺突文が、体部上半に施文されるが、これは右横方向からの刺突を基本とする三十稻場式とは異なる。なお、口端の貼付け文部分では、口縁は小さな突起状となっているが、その内面には小指の先ほどの窪みが



付けられている。整形痕としては、底面から8cmほど上方までは、右下から左上へと数本の指の腹でナデ上げた整形痕が残る。さらに上方は砂粒が引きずられた擦痕が同じ方向に見られ、板材での削り調整であろう。

この3個体4点以外の深鉢では、80～82の口縁部内面に稜を持つような括れや、86・93の内削ぎ口縁は、三十稲場式古段階に特徴的な形状である。また、口端内面をナデて面取りする87も同様であろう。体部文様は、単節斜縄文・網目状撚糸文・櫛歯状条痕文を主体とする。単節縄文はRLが81・83・85～88・91・103の8点、LRは80・102の2点で、偏りが顕著である。回転施文の方向は、81・86・87が横、85・102・103は縦、80・88・91は斜位のため条が横走ないし縦走する。83は荒く太い縄で、口縁部は横方向、体部は斜位に回転施文する。89は、RRの直前段反撚りの縄を斜位に施文する。撚糸文は、90が1段Lの縄を軸に固く巻いたもので、98は撚り戻しのR(rr)を軸に緩く巻き回転させたため、条が乱れている。82・94～97は単軸絡条体第5類の網目状撚糸文で、82は1段Rの縄を軸に巻き、94は1段L、95は0段だが撚り不明、96は1段Rを巻いてから0段rを上巻いている。97は0段rを巻く。これら網目状撚糸文は、全て縦方向に回転施文する。93・99～101は、櫛歯状条線文を器面全体に垂下させる。93の内面には、ササラ状工具のナデによる擦痕が顕著である。

底面は、101に笹、103に木葉痕が残る。97b・102は、ヘラでナデつけられているが、92の底面は荒れていて観察できない。97bの底部側面は、ケズリによる砂粒の移動とヘラミガキが顕著である。101の上端は、平滑に磨かれ再生口縁となっている。85・98の補修孔は外面からのみ穿かれるが、85は穿孔時の力で内面の一部が剥落している。83には、長径3～6mmの種実痕と考えられる空洞を散見できる。

後期蓋形土器(104～109) 三十稲場式古段階の蓋で、7次調査の109もここで説明する。104は縁辺に沿わせた隆帯に刺突を加え、隆帯の中央寄りの際には沈線が沿う。109にはRL縄文を施文し、端面には沈線を1本引く。これらの文様は、縁辺になるほど厚みを増す断面形状とともに古い様相である。105は、貝殻の折り取りや、笹の茎を割いたような工具で、中央へ向かう放射状の刺突列を施文する。105・106の端面には丁寧な「返し」の段が付けられるが、この形状は新しい要素である。106は同心円状の細かな刺突列を密に施文する。107は2本の沈線と刺突列。108は、文様構成の分かる唯一の蓋で、4個(現存3個)の円形浮文から、2本ずつの並走沈線が弧を描いて頂部へ向かい、途中で合わさる。これらの沈線に沿わせた刺突列が、器面全体を覆っている。小さな環状把手が一对つき、その横の縁辺は意図してへこまされる。縁辺内面には、使用による炭化物が付着する。

### ③ 7次調査遺構出土土器(図版8-110、写真図版7)

SK17(110) く字状に強くくびれた深鉢で、口端には粘土紐を貼り付けて肥厚させ、段を作る。この段と一体となった隆線が渦を巻くように垂れ下がり、この土器の中心文様を形作る。また、この部分の口縁は、小さな突起状に盛り上がる。口縁部から体部全面に、1段Rの細い縄を横方向が基本となるもののランダムに回転施文する。口縁部の形状や、大きく盛り上がった渦状の貼付け文から、大木8b式の最も新しい部分に位置付けられよう。

## B 土製品

土偶(図版9-1～5、写真図版8)

1はSK54から出土した土偶の頭部である。縄文時代中期末から後期初頭によく見られる逆三角形の顔面表現で、眉と鼻を隆帯で盛り上げ、額部が一段下がった仮面の表現がなされている。目は細い沈線で切れ長の目となり、鼻は細長く鼻筋が通った表情となっている。口は棒状の工具を深く突き刺し、裏側まで貫通している。また、後頭部を覆うように板状の粘土を貼り付け、体部へと接合するが、欠損しており体部は遺存しない。2は土偶の腕部であるが、小破片のため脚部の可能性もある。外面の摩耗が著しく調整が不明である。3は土偶の脚部である。内湾の形状から右足と考えられる。外面はヘラ状工具による面取りの整形痕が残る。4は土偶の体部で

ある。断面は長方形の直方体で、後期前葉の特徴を示す。下半に腰の張りが表現されるが、腹部に相当する部分は剥落している。平滑なナデ整形による調整がされる。5は土偶の脚部である。内側にゆるく湾曲し、つま先表現が見られることから左足と考えてよい。足裏はほぼ平らで、やや前傾になるが自立する。

不明土製品・土製円盤・粘土塊（図版9-6～9、写真図版8）

6は自立する板状の土製品である。ゆるく弧を描くが、左側面は端部が残るため環状にはならない。左右非対称で上面は左下がりに傾き、手前側に傾斜している。前面・上面はナデ調整がされるが背面・底面は調整されていない。また底面は火を受けた痕跡がない。7は耳飾りと考えたが成形が雑であり対称形とならないため、何らかの土製品と考えられる。また橋状把手の一部として考えるには、側面の刻みが正面から見える位置にない。8は土製円盤である。表面には撚糸文が施され側面は平滑になる。内面は不規則な凹凸で土器の内面形成とは異なる。土器片を二次利用したものではなく、粘土を成形したものと考える。9は円形状の土製品である。中央の環状の粘土貼り付けを台付きの脚部かと考えたが、そうした場合受け部が中心に向かって盛り上がる形状となるため、台付きには当たらない。環状の貼り付け部分を上にした場合、中心に貼り付けられた環は欠損しているが、一對に盛り上がると想定され、把手の機能を有するため蓋の可能性が考えられる。10は粘土塊である。

## C 石 器

石器・石製品の出土点数は総点数125点（実測点数27点）のうち不定形石器16点（実測数4点）、楔形石器2点（同1点）、剥片28点（同1点）、石核6点（同2点）、磨製石斧5点（同5点）、砥石4点（同0点）、石皿2点（同1点）、磨石10点（同3点）、敲石17点（同3点）、凹石6点（同3点）、砥石+凹石1点（同0点）、磨石+敲石1点（同0点）、磨石+凹石1点（同1点）、敲石+凹石4点（同1点）、台石14点（同0点）、原石6点（同0点）、石棒2点（同2点）が出土した。詳細な掲載石器・石製品の観察表は別表4に示した。石器・石製品は遺構出土遺物を前半に（図版10-1～3）、包含層出土遺物を後半（図版10・11-4～27）に掲載した。以下に記載を遺構・包含層の別なく剥片石器から礫石器の順に行う。石器組成や出土点数に偏りがあり、分類は行っていない。

### 1) 石 器（図版10・11、写真図版9・10）

不定形石器（1・4・5・6） 不定形石器は16点出土している。4点掲載した。1は縦長剥片の裏面右側縁にノッチ状の剥離を行っている。4は縦長の剥片の表面左側縁下方に鋸歯縁状の剥離が施されている。5は横長の剥片を用い、左右の側縁に不連続の剥離痕が残る。6は縦長剥片を素材とし、左右に刃部を持つ。

楔形石器（7） 楔形石器は2点出土し1点図化した。表面に表皮が残るチャート製剥片の両端に剥離が残る。

剥片（8） 28点出土し、1点図化した。玉髄製の縦長剥片である。表面の打撃方向が一定で裏面と対応する。

石核（2・9） 6点出土し、2点掲載した。2は鉄石英（赤玉）製である。40mm程度の礫素材を用いている。表面に1面の剥離が残る。9は玉髄製の大型の礫素材石核である。表面左側縁に分割した面が残る。表裏面の先端部から剥離を行っている。

磨製石斧（10～14） 5点出土し、全て図化した。10は透閃石製である。先端部のみ資料である。両側縁が若干基部にかけて窄まる磨製石斧である。基部側が欠損した後、敲打の痕跡が確認できる。また、刃部は一部使用と考えられる剥離面がある。11は透閃石製である。先端を欠損する。欠損後に表裏面の剥離によって楔形の刃部を作出している。基部末端の縁辺は剥離されている。12は透閃石製である。先端側が破損している。13は緑色凝灰岩製の基部資料である。バチ型に開く形態である。14は緑色岩製の基部資料である。先端が端を破損している。端部に敲打痕が残る。

砥石 凝灰岩・砂岩など軟質な石材に擦痕が残る資料の小破片を一括しているが、台石・石皿の破片の可能性もある。図化に耐える資料がなかったため記述のみとする。

石皿（15） 2点出土し1点図化した。花崗岩製で左縁辺のみが残る資料である。中心に向かって使用による窪みが観察される。

台石 14点出土しているがほとんどが小破片である。図化はしなかったが、凝灰岩製のものが多い。

磨石・敲石類 (3, 16～25) 磨石・敲石・凹石の区分にそれぞれ複合した形態の機能の石器を一括した。砥石+凹石・磨石+敲石・磨石+凹石・敲石+凹石などが複合した石器である。主なものの記載を行う。磨石は10点出土した。断面形が偏平なもの(17・18)と棒状のもの(19)に分かれる。5cm以下の小形のものが多い。敲石(3・19・20)も17点出土している。凹石(21～23, 25)は6点出土している。円礫や不正形な形の礫を用いている。その他に砥石+凹石1点(未掲載)、磨石+敲石(未掲載)が1点、磨石+凹石(24)が1点、敲石+凹石(25)が4点出土している。

原石 遺跡内に持ち込まれた剥片石器の素材となる原石が6点(未掲載)出土している。石材はほとんどが鉄石英(赤玉)である。

## 2) 石製品(図版11、写真図版10)

石製品として包含層から石棒が2点出土している。

石棒(26・27) 26は緑泥片岩製の石棒である。裏面に破損痕跡があるが直径約60mm前後の断面楕円形に研磨によって仕上げられていたと考えられる。上端・下端ともに欠損し、剥離による割れが観察される。図の天地は不明である。27も同じく緑泥片岩製の石棒である。若干の被熱痕が全体に観察される。上下端が剥離により欠損している。実測図では上が若干窄まる様に配置したが天地は不明である。26と27ともに同一質の石材が用いられているが、粗密に差があり、27の方が、若干粒子が粗い感があるので、同一個体かどうかは不明である。

## 第Ⅵ章 総 括

### 第 1 節 遺 構

秋葉遺跡では掘立柱建物が 1 棟確認された。新潟県内の掘立柱建物は縄文時代後期からみられる。今回の調査では明確に中期・後期の遺構と層位を分けることがかなわなかったが、建物を構成する柱穴や遺構確認面直上のⅣ層からも後期の土器が出土していることを鑑み総合的に掘立柱建物が後期のものだと判断した。なお荒川による縄文時代後晩期の掘立柱分類の A3 類であり、このタイプの掘立柱建物は、村上市アチャ平遺跡〔富樫ほか 2002〕や小千谷市城之腰遺跡〔藤巻ほか 1991〕で多く確認されており、いずれも縄文時代後期初頭～前葉に比定され秋葉遺跡の時期とも一致する。

### 第 2 節 遺 物

#### A 土器の様相

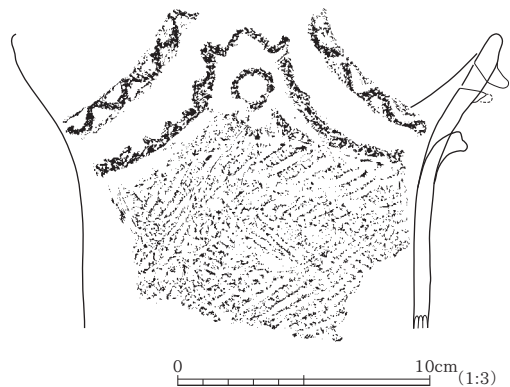
第 13 次調査においては、調査原因が個人住宅建設だったこともあり、包含層出土遺物に対して細かな出土地点の精査が行えず、遺跡における出土土器の全体像を推測することしかできなかった。包含層出土の土器から時期別の様相を見ると、中期前葉では北陸色の強い在り土器に東北南部系の土器が加わり、中期中葉では大木 8a・8b 式の東北南部的な特徴をもった在り土器のほかに馬高式などの土器が一定量みられる。中期後葉・末葉になると大木東北南部系が主となり、信濃川中流域に多い柘倉式もみられる。その後、後期初頭になると、東北南部系に加え三十稲場の古段階の土器が多くみられる。ただし秋葉遺跡では前葉の南三十稲場式がみられないことから、後期でもごく初頭に限り集落が存在していたことが推察される。

このことから、秋葉遺跡では縄文時代中期前葉から後期初頭まで断続的に人が活動していたことがわかる。また、東北系の土器を主体としつつ、在地の土器が一定量混じるといった傾向は、信濃川下流域において一般的な土器様相といえる。

#### 1) 円筒上層式土器について

第 10 図は遺跡で表採され、寄贈を受けた円筒上層 d 式土器である。円筒状の体部に大きく外反する三角形状の波状口縁が付く。波状口縁の端部には粘土紐で口唇が作られ、その上に細い粘土紐の貼付けで鋸歯状の文様が描かれる。波状口縁の頂部は平らで、この波頂部近くには内面から穿孔された穴があり、その周りは粘土紐で縁どられている。体部の羽状縄文は RL と LR の結束第 1 種で、円筒上層式に多い 0 段多条である。体部径は 13.8cm と小型で、壁厚も 5mm と薄い。胎土の混和材は、新津丘陵に特有の高温石英粒を多量に含む在地の砂粒であるが、断面は円筒土器のように真黒で、植物繊維を多量に混入しているようである。内面には土器焼成時に生じた細かなヒビが全面に見られ、焼成時の収縮を想定できる。本例は、胎土の混和材から円筒上層 d 式そのものの搬入ではないが、特徴的な要素を移入し、地元で制作した個体と言えよう。

円筒上層式は、津軽海峡を挟む青森県と北海道渡島半島を



第 10 図 円筒上層式土器実測図

中心として秋田・岩手県に分布する縄文中期前半の土器群で、a～e式に分けられる〔三宅1989〕。新潟県内の出土は、山内清男による新発田市虎丸地内での指摘が最初〔山内1972〕で、これはc式にあたる。本例は、村上市（旧神林村）樋渡遺跡のb式〔田辺・大賀2002〕と、糸魚川市六反田南遺跡のd式〔寺崎ほか2010〕に次ぐ良好な資料である。円筒上層式の県内の出土遺跡は寺崎裕助氏が集成しており〔寺崎2011〕、海岸に近い平野部が多い。新潟市内では、砂崩遺跡・豊原遺跡・大沢遺跡が挙げられている。

## 2) 土器の混和材について（写真図版11）

V章第2節において本書掲載土器110点の混和材をIa類（磨耗した石英・長石・各種岩石粒子を含む）・Ib類（磨耗した各種岩石を含む）・II類（破碎した鉱物に限定される）に大別し、含有物のあり方からIa類を7種、Ib類を7種、II類を3種に細分した。分類別の点数を第3表、新津丘陵の同時期遺跡を含む分類別出現率と個別粒子の含有率を第11図に示す。比較資料として同図に示す数値は、古屋敷遺跡・原遺跡が採集資料、平遺跡が報告書〔川上・遠藤ほか1983〕掲載資料から集計したものである。以下では、掲載資料を中期と後期に二分し、各時期の特徴を述べる。

中期に属す70点の分類別占有率は、Ia類29%・Ib類30%・II類41%である。最多を占めるII類の中で主体をなすのは、30%のIIa類（多量含有粒子が破碎石英に限定される）である。新津丘陵の平遺跡（中期前葉）や古屋敷遺跡（中期前葉～中葉）に比べII類の数値が高い点が特徴で、本次調査地に隣接した第9・10次調査出土資料でも近似した数値がえられている〔前山2014〕。含有粒子のなかで特記されるのは、ガラス状粒子（高温石英もしくは黒曜石）・破碎軽石・破碎土器である。ガラス状粒子は半数弱で確認できるが、平遺跡や古屋敷遺跡に比べて占有率が低く、原遺跡（中期～晩期）とは明瞭な格差がある。軽石は沼沢火山の噴火に由来するもので、北1kmに位置する大野中遺跡でも確認できる〔前山2018〕。破碎土器は木目状燃糸文を施す中期前葉の資料（図版5-23）に限定される。

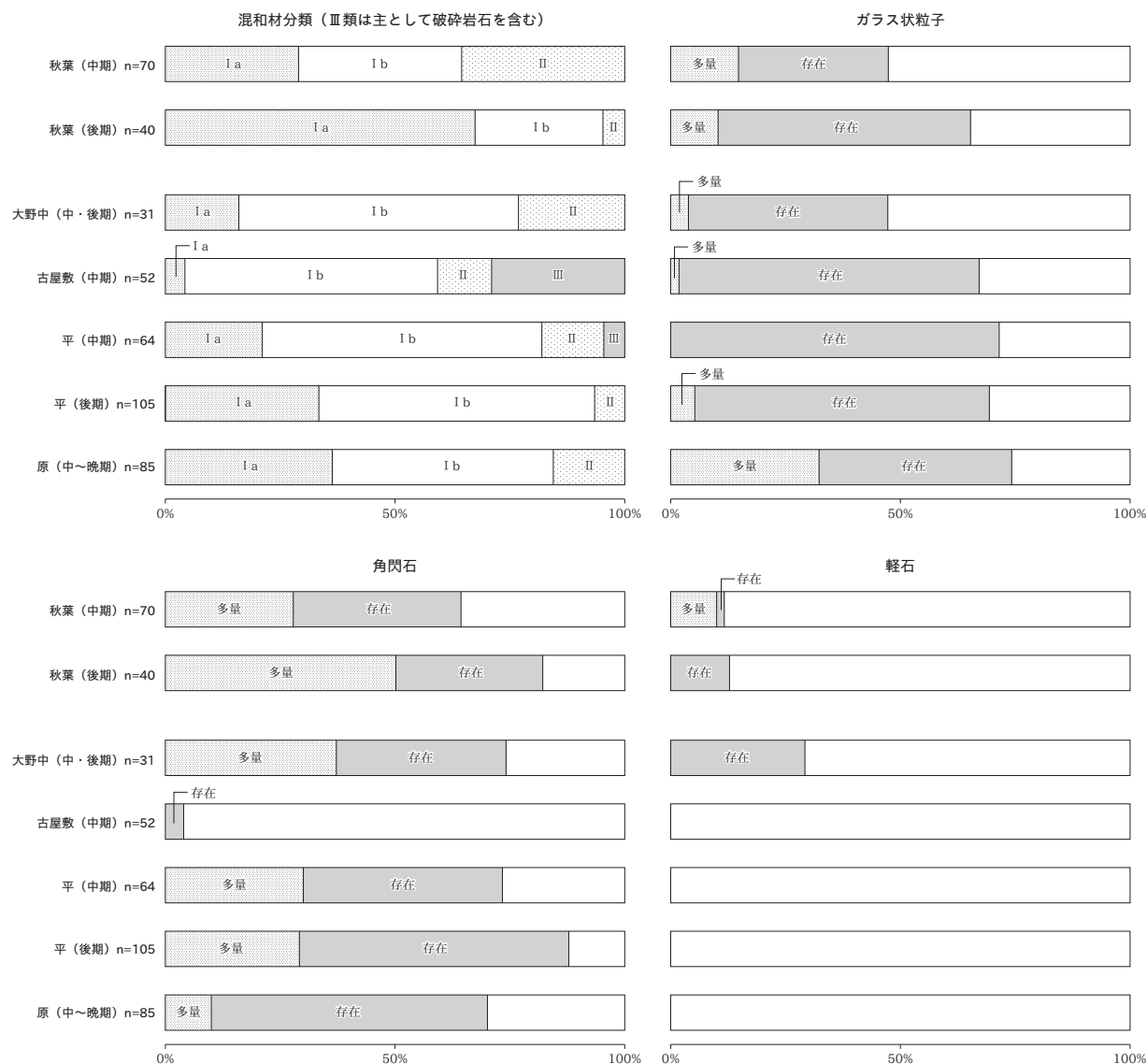
後期に属す40点の中で量的に目立つのは、30%のIb3類（磨耗岩石とともに多量の角閃石を含む）・23%のIa1類（磨耗石英以外に含有物が乏しい）・15%のIa3類（磨耗石英・長石とともに多量の角閃石を含む）である。分類別の内訳はIa類57.5%・Ib類37.5%・II類5%となる。Ia類の増加とII類の減少が特徴的で、平遺跡の後期前葉土器に比べIa類占有率の高さが指摘できる。含有粒子では、角閃石の多量含有資料が50%に達し、30%台の平遺跡の数値を上回る。

越後平野の周辺に分布する縄文時代中期～晩期遺跡で製作された土器は、混和材利用環境の違いから空間的な差異がみられる。磨耗粒子を指標とする本遺跡のIa類・Ib類は、新津丘陵の第四紀層を形成する「兎谷層」の磨耗砂や能代川の河川砂もしくは本遺跡付近の基盤層に堆積する砂粒を主として使用した資料とみられる。II類は阿賀北地域で卓越する土器で、同地からの搬入品の可能性も考慮する必要がある。しかし、本遺跡の中期・後期土器群に含まれる破碎軽石は阿賀野川で採取したことが確実な混和材であり、本遺跡で敲打痕をもつ被熱花崗岩が出土している点〔前山2014〕も勘案すれば、阿賀野川から搬入した花崗岩を粉碎して利用した可能性が高い。阿賀野川南岸の沖積地に立地する大野中遺跡は、出土土器に認める混和材の類似性から本遺跡に伴うキャンプ地と考えられる。新津丘陵の北端に位置する秋葉遺跡は阿賀野川に最も近い拠点集落にあたり、「阿賀野川低地」を日常的な生活圏とした活動がうかがえる。

第3表 秋葉遺跡第13次調査出土土器の混和材分類別点数

	Ia1	Ia2	Ia3	Ia4	Ia5	Ia6	Ia7	Ib1	Ib2	Ib3	Ib4	Ib5	Ib6	Ib7	IIa	IIb	IIc
中期	6	2	7	5				3	5	5	2	1	4	1	21	4	4
後期	9	3	6	2	1	1	1	2	1	12					2		





第 11 図 秋葉遺跡と周辺遺跡の土器混和材

## B 石器の様相

石器組成、石材と石棒の3点について若干のまとめを行う。

石器組成は剥片石器器種が少なく、縄文時代の主な狩猟具である石鎌が欠落している。おそらく調査面積に起因すると考えられる。それに対して礫素材石器が多い。その中で磨製石斧は刃部が残った資料は破損後に末端が敲打状となっている。このような形態のものは、名久井文明氏によると「木割り楔」の可能性が指摘されている〔名久井 2019〕。10・11の磨製石斧はその可能性が高いと考える。

使用石材については剥片石器全般の傾向であるが、凝灰岩・珪質頁岩などが多用されている。緑色頁岩（碧玉）・緑色凝灰岩など阿賀野川水系の第三紀系由来の石材が用いられていることも特徴的である。無斑晶質安山岩も2点出土しているが信濃川上流域由来の可能性はある。鉄石英（赤玉・黄玉）は近隣では三条市の五十嵐川上流域（堀川・渋谷 2010）や角田山系などに産出する。磨製石斧の石材は糸魚川市周辺の透閃石と阿賀野川以北の緑色岩類、阿賀野川流域にも産する緑色凝灰岩の3者が確認でき、広域での石材流通が確認できる。それに対し磨石・敲打石類は花崗岩・凝灰岩など阿賀野川流域の石材を積極的に用いている。遺跡が古段丘上に乗っていることから、

周辺の段丘崖などで採取されたものが多いと考えられる。

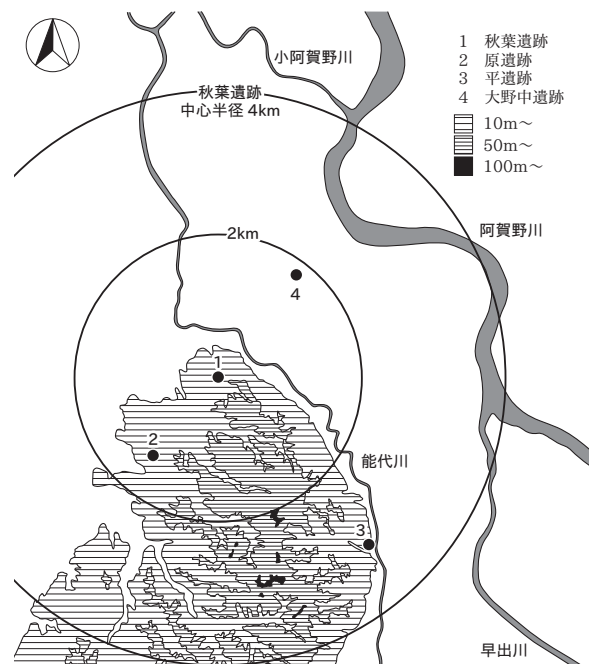
2点の石棒(26・27)の石材は緑泥片岩を用いている。所謂、「秩父石」と呼ばれる埼玉県秩父地方の荒川上流域を原産地とする遠隔地石材である<sup>注1)</sup>。秩父石は縄文時代中期以降に石棒に利用され始め、後・晩期には関東・中部を中心に信越地方まで広域な分布を示す〔長田2010、栗島2012〕。新潟県内では後期前半から中越地方を中心に新潟県全域で緑泥片岩製の石棒が出土するようになる〔長田2009〕。長田友也氏によると中期末葉段階では胴部径が100mm以上の大型のものも見られるが、後期前半には胴部径が100mm以下の中型のものが多く、さらに後期前葉段階では胴部径が50mm以下の小型石棒に含まれる一群が登場する。後期前葉の早い段階(三十稲場式期から南三十稲場式期)で県北、奥三面遺跡群の村上市アチャ平遺跡〔富樫ほか2002〕から同石材の中型石棒が出土しており、この時期には新潟県内の広範囲で流通していることが分かる。時期的にも当遺跡では後期前葉(三十稲場式期)の土器が定量出土しており、この時期の石棒の可能性が高い。また、2点ともに上下端が破損している。所謂石棒祭祀の一環として遺跡内で意図的に破壊したのか、別の遺跡から石棒としての祭祀的な機能を失った後に、両端を加工した例えば敲石の機能に用いる石器石材として持ち込まれたのかは不明である。

注1) 長田友也氏に実見の上ご教示頂いた。

### 第3節 遺跡の位置づけ

秋葉遺跡では、住居跡に加え、磨製石斧や磨石・敲石など生活必需品と言えるような道具が多く出土し、定住集落であったことは明瞭である。また、土器についても新津丘陵で多く見られるガラス状粒子の混和材を使用しているものが多いほか、阿賀野川で採取できる軽石を含有することが特徴的である。ここから近隣の阿賀野川や能代川から混和材となる川砂を調達していることが推察される。このように新津丘陵及び阿賀野川下流域で活動をしている一方で石棒などは秩父から持ち込まれた遠隔地石材で作られていることから、広域でのネットワーク活動についても積極的に行っていたと考えられる。また、混和材の観察により、約2km離れた沖積地に立地する大野中遺跡との類似性が見られることから、秋葉遺跡と大野中遺跡が集落本体とキャンプ地といった関係にあることが考えられる。

さらに広域に見てみると新津丘陵には、秋葉遺跡と同時期の平遺跡・居平遺跡、後期が主体となる原遺跡などがある(第12図)。いずれも断続的ではあるが長期間にわたって生活が行われた遺跡である。縄文時代中期の領域景観の研究によれば、移動効率の最も良い領域面積の平均は約55km<sup>2</sup>、半径4.2kmの円圏とほぼ等しい〔谷口2009〕。秋葉遺跡と平遺跡、原遺跡はほぼ2～3km圏内となり若干の誤差は生じるものの、それぞれ新津丘陵の北端、西側、東側に同時期に存在した別の拠点集落と考えてよいだろう。現時点では平遺跡、原遺跡に対応する沖積地のキャンプ地となる遺跡はみつからない。今後の発見に期待したい。



第12図 秋葉遺跡半径4km圏の縄文時代遺跡分布図

## 引用・参考文献

- ア 相澤裕子 2019 「程島館跡 第7次調査」『新潟市文化財センター年報 第6号』新潟市文化財センター
- 相田泰臣 2014 『史跡 古津八幡山遺跡発掘調査報告書 ー第15・16・17・18・19次調査ー』新潟市教育委員会
- 相田泰臣 2015a 「新潟市秋葉区舟戸遺跡工事立会出土遺物」『新潟市文化財センター年報 第2号』新潟市文化財センター
- 相田泰臣 2015b 「新潟市秋葉区塩辛遺跡工事立会出土遺物」『新潟市文化財センター年報 第2号』新潟市文化財センター
- 相田泰臣 2020 『大沢谷内遺跡VI 第15・17・19次調査』新潟市教育委員会
- 阿部昭典 2019 「第2章 縄文時代 第2節 土器 第4項 中期」『新潟県の考古学III』新潟県考古学会
- 荒川隆史・石丸和正・猪狩俊哉・加藤 学ほか 2004 『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書V 青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 2009 「掘立柱建物と建材」『縄文時代の考古学8 生活空間』同成社
- 荒川隆史 2018 「北陸の縄文晩期社会と社会組織 ー掘立柱建物集落の形成とクリ材利用からの視点ー」『季刊考古学別冊25「亀ヶ岡文化」論の再構築』雄山閣
- イ 石川智則ほか 1994 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 沖ノ羽遺跡I (A地区)』新潟県埋蔵文化財調査報告書第58集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 伊藤秀和 1996 『川船河遺跡』田上町教育委員会
- 伊比博和 2013 『峰岡城山遺跡 第2次調査』新潟市教育委員会
- エ 遠藤恭雄・澤野慶子ほか 2014 『沖ノ羽遺跡V 第18・19次調査』新潟市教育委員会
- オ 長田友也 2009 「新潟県における石棒・石剣・石刀の変遷」『新潟県考古学会設立20周年記念論文集 新潟県の考古学II』新潟県考古学会
- 長田友也 2010 「石製品からみた正面ヶ原A遺跡の精神文化」『津南学叢書第13輯 津南シンポジウムVI 正面ヶ原A遺跡から垣間見る縄文社会 ー北信越の縄文時代後期後葉～晩期前葉ー』津南町教育委員会 信濃川火焰街道連携協議会
- 尾崎高宏 2005 「信濃川右岸 16 大倉山遺跡」『シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現(第2分冊)』新潟県考古学会
- カ 加藤 学 1999 「第5章 遺構」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 和泉A遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金田拓也 2017 『舟戸遺跡II 第25次調査』新潟市教育委員会
- 川上貞雄・遠藤孝司ほか 1983 『平遺跡緊急発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 川上貞雄 1989 「第二編 考古」『新津市史資料編 第一巻 原始・古代・中世』新津市
- 川上貞雄 1994 「第一編 考古資料 一五 大倉山遺跡」『五泉市史 資料編一 原始・古代・中世』五泉市
- 川上貞雄 1995 『舟戸遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- ク 栗島義明 2012 「緑泥片岩製石棒に見る需給システムー縄文時代 後晩期の石棒製品の生産と広域流通ー」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第6号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- コ 駒形敏朗 1999 「第2章 縄文時代 第3節 集落と住居 第2項 住居」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 駒形敏郎 1992 「新潟県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集 国立歴史民俗博物館
- サ 笹澤(諫山)えりか 2009 『中田遺跡 第2次調査』新潟市教育委員会
- シ 品田高志ほか 2011 『新潟県柏崎市剣野遺跡群 剣野B遺跡発掘調査報告書 剣野』柏崎市埋蔵文化財報告書第63集 柏崎市教育委員会
- タ 高橋 保 1999 「第2章 縄文時代 第4項 中期 2 編年と地域性 中期前葉」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 高橋 保ほか 1992 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第57集 関越自動車道関係遺跡発掘調査報告書 五丁歩遺跡 十二木遺跡』新潟県教育委員会
- 滝沢規朗・高橋保雄ほか 2002 『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XIV 元屋敷跡上段II(上段)』朝日村文化財報告書第22集 新潟県朝日村教育委員会
- 田中耕作・渡邊裕之 1999 「第2章 縄文時代 第2節 縄文土器 第5項 後期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会

- 田中耕作ほか 2003 『ニタ子沢 C 遺跡発掘調査報告書 一 県営農村活性化環境整備事業（菅谷地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱー』 新発田市教育委員会
- 田中耕作ほか 2014 『中野遺跡・庄道田遺跡発掘調査報告書 一 県営担い手育成基盤整備事業（加治川右岸地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲー』 新発田市教育委員会
- 田辺早苗・大賀 健 2002 『神林村埋蔵文化財報告書 第 18 集 樋渡遺跡・堀下遺跡』 神林村教育委員会
- 谷口康浩 2009 『縄文時代の生活空間 ー「集落論」から「景観の考古学」へ』 『縄文時代の考古学 8 生活空間』 同成社
- 田畑 弘 1993 『保明浦遺跡 新潟県営高生産性大区画ほ場整備事業（田上郷地区）埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』 田上町埋蔵文化財調査報告書 第 3 集 南蒲原郡田上町教育委員会
- 田畑 弘ほか 1996 『田上町文化財調査報告書 第 8 集 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 保明浦遺跡Ⅱ』 田上町教育委員会
- 田畑 弘 2003 『田上町文化財調査報告書 第 20 集 新潟県営高生産性大区画ほ場整備事業（田上郷地区）埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 保明浦遺跡Ⅲ』 田上町教育委員会
- 田畑 弘 2004 『田上町文化財調査報告書 第 21 集 新潟県営湛水防除事業（田上地区）埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 保明浦遺跡Ⅳ』 田上町教育委員会
- ツ 立木宏明ほか 2004 『愛宕澤遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 立木宏明 2020 『原遺跡 第 10 次調査』 『新潟市文化財センター年報 第 7 号』 新潟市文化財センター
- テ 寺崎裕助 2009 『新潟県における新崎式系土器 ー縄文時代中期初頭後半から前葉の編年と型式ー』 『新潟県の考古学Ⅱ』 新潟県考古学会
- 寺崎裕助ほか 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 211 集 六反田南遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 寺崎裕助 2011 『縄文時代における移動・移住の一事象 ー新潟県糸魚川市六反田南遺跡と秋田県男鹿市大畑台遺跡の事例からー』 『新潟県立歴史博物館研究紀要』 第 12 号 新潟県立歴史博物館
- 寺崎裕助 2017 『新潟県におけるアスファルト利用 ー縄文時代を中心にー』 『縄文時代のアスファルト利用Ⅰ』 特定営利活動法人 いちのへ文化・芸術 NPO
- ト 富樫秀之ほか 2002 『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ アチヤ平遺跡上段』 新潟県朝日村教育委員会
- ナ 中島栄一ほか 1976a 『中店遺跡』 田上町教育委員会
- 中島栄一ほか 1976b 『古屋敷遺跡』 田上町教育委員会
- 名久井文明 2019 『木割り楔の時空間的展開』 『生活道具の民俗考古学 籠・履物・木割り楔・土器』 吉川弘文館
- ニ 新潟市国際文化部歴史文化課 2007 『新・新潟市史双書 2 新潟市の遺跡』 新潟市
- 新潟市国際文化部歴史文化課 2008 『新・新潟市史双書 3 石油王国・新潟』 新潟市
- 新潟市史編さん原始古代中世史部会 1994 『新潟市史』資料編 1 原始 古代 中世 新潟市
- 新潟市文化財センター 2018 『平成 29 年度新潟市遺跡発掘調査報告会』
- 新潟市文化財センター 2019 『新潟市遺跡発掘調査速報会 2018』
- 新潟市文化財センター 2020 『新潟市遺跡発掘調査速報会 2019』
- 新潟市文化スポーツ部歴史文化課・株式会社マヌ都市建築研究所 2017 『旧新津油田金津鉞場総合調査報告書』 新潟市文化スポーツ部歴史文化課
- 新津市史編さん委員会 1994 『新津市史通史編 上巻』 新津市
- フ 藤塚 明・本間信昭ほか 1995 『新潟市史』通史編 1 原始古代中世・近世（上） 新潟市
- 藤巻正信ほか 1991 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 29 集 関越自動車道関係遺跡発掘調査報告書 城之腰遺跡』 新潟県教育委員会
- 古澤妥史 2019 『第 2 章 縄文時代 第 2 節 土器 第 5 項 中期』 『新潟県の考古学Ⅲ』 新潟県考古学会
- ホ 細野高伯・伊比博和ほか 2012 『大沢谷内遺跡Ⅱ 第 7・9・11・12・14 次調査 ー一般国道 403 号小須戸田上バイパス整備工事に伴う大沢谷内遺跡第 2・4・6・7・9 次発掘調査報告書ー』 新潟市教育委員会
- 堀川正美・渋谷宏人 2010 『五十嵐川流域の石器石材について』 『三条考古学研究会機関誌』 第 4 号 三条考古学研究会
- マ 前山精明 1994 『Ⅱ 2 各時代の概観 2 縄文時代』 『豊原遺跡』 『大沢遺跡』 『大沢遺 A 地区の調査』 『松郷屋遺跡』 『巻町史 資料編 1 考古』 巻町

- 前山精明ほか 2012 『大沢谷内遺跡Ⅲ 第8次調査 - 市道鎌倉横川線改良工事に伴う大沢谷内遺跡第2次発掘調査報告書-』 新潟市教育委員会
- 前山精明・相田泰臣 2004 『御井戸遺跡Ⅱ - 2003年度確認調査の概要-』 巻町教育委員会
- 前山精明・伊比博和ほか 2010 『大沢谷内北遺跡 第3次調査 - (仮称)国道403号小須戸田上バイパス整備工事に伴う大沢谷内北遺跡第3次発掘調査報告書-』 新潟市教育委員会
- 前山精明 2014 『秋葉遺跡第9・10次調査』『新潟市文化財年報 第1号』 新潟市文化財センター
- 前山精明 2016 『原遺跡第7・8次調査』『新潟市文化財センター年報 第3号』 新潟市文化財センター
- 前山精明 2018 『秋葉区大野中遺跡出土の縄文時代遺物』『新潟市文化財年報 第5号』 新潟市文化財センター
- 松島悦子ほか 2019 『宝崎遺跡 県営経営体育成基盤整備事業(潟第4期地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- ミ 三宅徹也 1989 『円筒上層土器様式』『縄文土器大観』1 草創期・早期・前期 小学館
- ヤ 山崎 天・草間 裕ほか 2004a 『能代川関係発掘調査報告書Ⅶ 巳ノ明遺跡』 五泉市教育委員会・(株)野上建設興業
- 山崎 天・草間 裕ほか 2004b 『能代川関係発掘調査報告書 住吉田遺跡・南住吉田遺跡』 五泉市教育委員会・国際航業株式会社
- 山崎 天・鈴木 進ほか 2004 『能代川関係発掘調査報告書 箕下遺跡』 五泉市教育委員会・有限会社山武考古学研究所
- 山内清男 1972 『縄紋式土器・総論』『山内清男・先史考古学論文集・新第四集』 先史考古学会
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』 先史考古学会
- ワ 渡邊朋和ほか 1997 『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』 新津市教育委員会
- 渡邊朋和 2015 『塩辛遺跡 第7次調査』『新潟市文化財センター年報 第2号』 新潟市文化財センター
- 渡邊朋和・立木宏明・山田貴子・阿部泰之 2001 『八幡山遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 渡邊朋和・立木宏明ほか 2004 『八幡山遺跡群発掘調査報告書 -第11・12・13・14次調査』 新津市教育委員会

別表 1 遺構計測表

- 凡例 1. 確認面の覆土 第IV章第2節に記した。  
 2. 形態 第IV章第3節に記した。  
 3. 堆積形状 第IV章第3節に記した。

掘立柱建物

図面図版 番号	調査回数	層位	建物番号	方位		建物型式		身舎面積 (㎡)		間数		桁行 (m)		梁行 (m)		遺物		掲載遺物 図版番号
				N-76°-W	A3類	16.41		2間×1間		5.82		2.82		遺物の有無	遺物の種類			
				遺構	グリッド	平面形	断面形	上端長軸 (m)	最大深度 (m)	底面標高 (m)								
4	7次	Va	SB-1	SK	1	13H11・16	円形	階段状	0.48	0.38	19.37							
4	13次			P	22	12I3	楕円形	U字状	0.54	0.42	19.28	有	縄文土器、石器	10				
4	13次			P	23	12H23	円形	弧状	0.32	0.15	19.44	有	縄文土器					
4	13次			P	26	12H18・23	円形	半円形	0.55	0.32	19.29	有	縄文土器					
4	13次			P	31	12H23	円形	V字状	0.36	0.14	19.42	有	縄文土器					
4	13次			P	35	12H25、12I5	楕円形	U字状	0.63	0.39	19.44	有	縄文土器、石器	5				
4	13次			P	57	13H21	楕円形	U字状	0.65	0.49	19.59	有	縄文土器、石器	10				

土坑

遺構図版 番号	調査回数	遺構		グリッド	時代	確認面	規模 (m)			底面座標 (m)	形態		堆積形状	重複関係	遺物		遺物図版 番号
		種別	番号				上端		深度		平面	断面			遺物の有無	遺物の種類	
		長軸	短軸														
4	13次	SK	20	13I7	縄文	IV	0.59	0.54	0.18	20.17	方形	弧状	レンズ状		有	縄文土器、石器	5・10
4	13次	SK	54	12H20・25、13H16・21	縄文	V	(1.52)	(0.64)	0.29	19.48	—	弧状	レンズ状	P53を切る	有	縄文土器、土偶、石器	5・9
4	13次	SK	55	13I1・2	縄文	IV	0.87	0.68	(0.14)	20.02	円形	台形	レンズ状		有	縄文土器 石器	10
4	13次	SK	56	13H21、13I1	縄文	V	0.56	0.38	(0.18)	19.94	不整形	台形	ブロック状		有	縄文土器	5

小土坑

遺構図版 番号	調査回数	遺構		グリッド	時代	確認面	規模 (m)			底面座標 (m)	形態		堆積形状	重複関係	遺物		遺物図版 番号
		種別	番号				上端		深度		平面	断面			遺物の有無	遺物の種類	
		長軸	短軸														
3	13次	P	1	12I15	縄文	V	0.46	0.41	0.24	19.75	円形	—	—		有	石器	10
3	13次	P	27	12H19	縄文	V	—	—	(0.48)	—	—	U字状	単層		有	縄文土器	5
3	13次	P	47	12H24	縄文	V	—	0.20	0.23	19.51	—	—	—	P46に切られる	有	縄文土器 石器	6
3	13次	P	52	12I5、13I1	縄文	V	0.31	0.21	0.16	19.79	楕円形	—	—		有	縄文土器 石器	6
3	13次	P	53	12H20・25	縄文	V	0.92	(0.38)	0.22	19.55	楕円形	V字状	単層	SK54に切られる	有	縄文土器、石器	5・10
3	13次	P	59	12H20・25	縄文	V	1.04	0.32	0.16	19.58	楕円形	V字状	単層		有	縄文土器	5
3	13次	P	60	13H21	縄文	V	0.34	0.31	0.20	19.73	円形	—	—		有	縄文土器 石器	10
3	13次	P	74	12H25	縄文	V	0.31	0.27	0.08	19.67	円形	—	—		有	縄文土器 石器	10



別表 2 土器観察表

- 凡例 1. 口径・底径の（ ）内数値は復元値である。  
 2. 胎土 胎土中に含まれる混和材について記した。「石」は石英粒、「長」は長石粒、「雲」は金雲母あるいは黒雲母、「チ」はチャート、「焼」は焼土粒、「白」は白色凝灰石、「角」は角閃石、「海」は海綿骨針を表す。分類は第V章第2節に示した。  
 3. 色調は外面の色調を記した。『新版標準土色帳』（農林水産省農林技術会議事務局 1967）記号を記した。

図版 番号	写真 図版 番号	遺物 番号	調査 回数	出土位置		層位	種別	器種	法量 (cm)			文様・施文			色調	胎土分類	胎土	備考	
				遺構名	グリッド				口径	底径	器高	外面		内面					底部
5	5	1	13次	SK20	13I2		縄文土器	深鉢				隆帯 沈線 縄文 LR			にぶい黄橙 (10YR7/3)	I b2	石・長・チ	大木 8b 式	
5	5	2	13次	SK20	13I2		縄文土器	深鉢				沈線 縄文 LR			浅黄橙 (10YR8/3)	I b4	石・長・チ・角	後期初頭 付着物：内外面 炭化物	
5	5	3	13次	SK20	13I7		縄文土器	深鉢				沈線 縄文 RL			浅黄橙 (10YR8/4)	II a	石・長・雲・白	大木 9b 式	
5	5	4	13次	SK20	13I2		縄文土器	深鉢				隆帯 沈線 半截竹管			にぶい黄橙 (10YR6/4)	II a	石・長・雲	大木 8b 式	
5	5	5	13次	SK20	13I7		縄文土器	深鉢		9.5		沈線		ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	I a3	石・長・焼・角	中期後葉 底部遺存率 36/36	
5	5	6	13次	P53	13I1		縄文土器	深鉢				沈線			橙 (7.5YR7/6)	I b6	石・長	大木 8b 式	
5	5	7	13次	SK54	13H21		縄文土器	深鉢				沈線 半截竹管 縄文 LR			明黄褐 (10YR7/6)	II a	石・長	大木 8b 式	
5	5	8	13次	SK54	13H21		縄文土器	深鉢				沈線 縄文 LR			にぶい黄橙 (10YR7/4)	I b7	石・長	大木 9b 式	
5	5	9	13次	SK56	13H21		縄文土器	深鉢				沈線 竹管			橙 (7.5YR6/6)	II a	石・長・海	大木 8b 式	
5	5	10	13次	P35	12H25		縄文土器	深鉢				隆帯			橙 (7.5YR7/6)	I a3	石・長・雲・チ・海	大木 8b 式	
5	5	11	13次	P27	12H24		縄文土器	浅鉢				隆帯 半截竹管			浅黄橙 (7.5YR8/4)	I a1	石・長	中期中葉	
5	5	12	13次	P59	12H25		縄文土器	深鉢				無節縄文 L			浅黄橙 (10YR8/3)	I a1	石・長・チ・焼	後期初頭	
5	5	13	13次	P59	12H25		縄文土器	深鉢		5.4		沈線 縄文 LR		ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/2)	II b	石・長・雲・海	大木 8b 式 底部遺存率 23/36	
5	5	14	13次	包含層	12I10	IV	縄文土器	深鉢				爪形文 半截竹管			浅黄橙 (10YR8/3)	I a3	石・長・焼・角	中期前葉	
5	5	15	13次	包含層	12I18	II	縄文土器	深鉢				条線文			にぶい黄橙 (10YR7/4)	I a2	石・長	中期前葉	
5	5	16	13次	包含層	13I11	IV	縄文土器	深鉢				爪形文 半截竹管			にぶい橙 (5YR7/4)	I b3	石・長	中期前葉	
5	5	17	13次	包含層	12I14	III	縄文土器	深鉢				爪形文 半截竹管			にぶい黄橙 (10YR7/4)	I a3	石・長・焼・角	中期前葉	
5	5	18	13次	包含層	13H22	III	縄文土器	深鉢				刺突文 隆帯 半截竹管			黄橙 (10YR8/6)	I b2	石・長・焼	大木 8a 式	
5	5	19	13次	包含層	12I11	IV	縄文土器	深鉢				浮文			橙 (7.5YR7/6)	II a	石・長・雲	柵倉式	
5	5	20	13次	包含層	12I5	IV	縄文土器	深鉢				爪形文 半截竹管			明黄褐 (10YR7/6)	II a	石・長・雲	中期前葉	
5	5	21	13次	包含層	12H23	IV	縄文土器	深鉢				隆帯 多截竹管			明黄褐 (10YR7/6)	II c	石・長	中期前葉	
5	5	22	13次	包含層	12H23	IV	縄文土器	深鉢				沈線 浮文 半截竹管			浅黄橙 (10YR8/4)	II c	石・長・雲	中期前葉	
5	5	23	13次	包含層	13I11	IV	縄文土器	深鉢				木目状燃糸文 R		ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	I b1	石・長	中期前葉	
5	5	24	13次	包含層	13I6	IV	縄文土器	深鉢				刺突文 隆帯 浮文 半截竹管			にぶい黄橙 (10YR7/4)	II b	石・長・雲	中期前葉	
5	5	25	13次	包含層	13I11	IV	縄文土器	深鉢				隆帯 半截竹管			褐灰 (7.5YR4/1)	I a1	石・長・焼	中期前葉	
5	5	26	13次	包含層	13I7	III	縄文土器	深鉢				条線文			にぶい橙 (7.5YR7/4)	I b2	石・長・焼・雲	柵倉式	
5	5	27	13次	包含層	13H22	III	縄文土器	深鉢				条線 半截竹管			明黄褐 (10YR7/4)	I b1	石・長	柵倉式	
5	5	28	13次	包含層	12I15	IV	縄文土器	深鉢				隆帯 沈線 半截竹管			橙 (7.5YR7/6)	I b4	石・角		
5	5	29	13次	包含層	12I14	III	縄文土器	深鉢				沈線 竹管			橙 (5YR6/8)	I b6	石・長	馬高式	
5	5	30	13次	包含層	12I15	IV	縄文土器	深鉢				隆帯 沈線 半截竹管			浅黄橙 (10YR8/4)	I b6	石・長・焼・角		
5	5	31	13次	包含層	12I10	III	縄文土器	深鉢				沈線			浅黄橙 (10YR8/4)	I a1	石・長	馬高式	
5	5	32	13次	包含層	13I11	IV	縄文土器	深鉢				隆帯 沈線			にぶい黄橙 (10YR7/4)	II a	石・長・雲		
5	5	33	13次	包含層	13I7	III	縄文土器	深鉢				半截竹管 沈線			橙 (7.5YR7/6)	I a4	石・長		
5	5	34	13次	包含層	13H21	IV	縄文土器	深鉢				竹管			にぶい黄橙 (10YR7/4)	I b5	石・長		
5	5	35	13次	包含層	12H25	IV	縄文土器	深鉢				隆帯			にぶい橙 (7.5YR6/4)	I a4	石・長	大木 8b 式	
5	5	36	13次	包含層	12I5	III	縄文土器	深鉢				沈線 半截竹管 縄文 RL			黒褐 (10YR3/1)	II a	石・長・雲		
5	5	37	13次	包含層	12I3	III	縄文土器	深鉢				隆帯 沈線 浮文			にぶい黄橙 (10YR7/2)	I b2	石・長		
5	5	38	13次	包含層	13I11	III	縄文土器	深鉢				刺突文 隆帯 沈線 半截竹管			にぶい橙 (7.5YR7/4)	I a1	石・長・チ		

図版 番号	写真 図版 番号	遺物 番号	調査 回数	出土位置		層位	種別	器種	法量 (cm)			文様・施文			色調	胎土分類	胎土	備考	
				遺構名	グリッド				口径	底径	器高	外面		内面					底部
5	5	39	13次	包含層	12I4	IV	縄文土器	深鉢				沈線			浅黄橙 (7.5YR8/4)	I a3	石・長・焼・雲		
5	5	40	13次	包含層	13I11	IV	縄文土器	浅鉢				隆線 半截竹管 縄文 RL			浅黄橙 (7.5YR8/4)	II b	石・長		
5	5	41	13次	包含層	13I12	III	縄文土器	浅鉢				沈線 縄文 RL			にぶい橙 (7.5YR7/4)	II a	石・長・白	大木 8a 式	
5	5	42	13次	包含層	13I2	III	縄文土器	浅鉢				沈線 縄文 RL			褐灰 (10YR4/1)	I b6	石・長・雲	大木 8a 式	
5	5	43	13次	包含層	12H19	IV	縄文土器	深鉢				刺突文 隆帯 沈線 縄文 LR			橙 (7.5YR7/6)	I a4	石・長・海		
5	5	44	13次	包含層	13I11	IV	縄文土器	深鉢				刺突文 隆帯 沈線 縄文 LR			浅黄橙 (10YR8/4)	I a1	石・長		
5	5	45	13次	包含層	13I1	IV	縄文土器	深鉢							橙 (7.5YR7/6)	II a	石・長・角		
5	5	46	13次	包含層	13H22	IV	縄文土器	深鉢				沈線 縄文 LR			浅黄橙 (10YR8/3)	I b3	石・長・角		
5	5	47	13次	包含層	13H21	IV	縄文土器	深鉢				隆帯 沈線 複節斜縄文			浅黄橙 (10YR8/3)	II a	石・長・雲・焼		
5	5	48	13次	包含層	12I11	IV	縄文土器	深鉢				隆帯 沈線			浅黄橙 (10YR8/4)	I a2	石・長		
6	6	49	13次	包含層	13I11	IV	縄文土器	深鉢	(31.8)	(27.7)		沈線 楕円文 縄文 RL			黄橙 (7.5YR7/8)	I a4	石・長・海		
6	6	50	13次	包含層	13H22	III	縄文土器	深鉢				沈線 縄文 RL			浅黄橙 (10YR8/4)	I b3	石・長・雲・角		
6	5	51	13次	包含層	12I3	IV	縄文土器	深鉢				隆線 沈線 無節文 L			浅黄橙 (10YR8/3)	II a	石・長		
6	5	52	13次	包含層	12I15	II	縄文土器	深鉢				隆線 沈線 縄文 LR			にぶい黄橙 (10YR6/3)	II a	石・長・雲		
6	5	53	13次	包含層	12I3	IV	縄文土器	浅鉢				刺突文			橙 (7.5YR6/6)	II a	石・長	大木 8b 式	
6	5	54	13次	包含層	13I2	III	縄文土器	深鉢							浅黄橙 (10YR8/4)	II a	石・長・雲	大木 8b 式	
6	5	55	13次	包含層	13I1	IV	縄文土器	浅鉢							橙 (7.5YR7/6)	II a	石・長・雲	大木 8b 式	
6	5	56	13次	包含層	13H22	III	縄文土器	深鉢				隆帯			にぶい褐 (7.5YR5/4)	II a	石・長・雲		
6	5	57	13次	包含層	13I2	IV	縄文土器	深鉢				隆帯 縄文 RL			浅黄橙 (10YR8/4)	II a	石・長・雲		
6	6	58	13次	包含層	12H23	IV	縄文土器	深鉢							にぶい黄橙 (10YR7/4)	I a4	石・長・チ・角		
6	6	59	13次	包含層	13I1	IV	縄文土器	深鉢				隆帯 沈線 縄文 RL			にぶい黄橙 (10YR7/3)	II a	石・長・焼・白		
6	6	60	13次	包含層	13I2	III	縄文土器	深鉢				縄文 LR			にぶい黄橙 (10YR6/3)	I b3	石・長	大木 10 式	
6	6	61	13次	包含層	13I1	IV	縄文土器	深鉢				縄文 LR			にぶい橙 (7.5YR7/4)	I a4	石・雲	大木 9 式	
6	6	62	13次	包含層	13I12	IV	縄文土器	深鉢				沈線 縄文 LR			にぶい黄橙 (10YR7/3)	II c	石・長・雲・焼・角	大木 9b 式	
6	6	63	13次	包含層	12I4	III	縄文土器	深鉢				刺突文			にぶい黄橙 (10YR7/3)	I b3	石・長・角	大木 10 式	
6	6	64	13次	包含層	13I7	III	縄文土器	深鉢				隆帯 沈線 縄文 LR			浅黄橙 (10YR8/4)	II b	石・長・雲・焼	大木 9a 式	
6	6	65	13次	包含層	12I5	III	縄文土器	深鉢				縄文 LR			灰白 (10YR8/2)	I b1	石・長・焼	大木 10 式	
6	6	66	13次	包含層	12H19	IV	縄文土器	深鉢				縄文 LR			にぶい黄橙 (10YR6/3)	II c	石・長・焼・角	大木 10 式	
6	6	67	13次	包含層	12I15	IV	縄文土器	深鉢				縄文 LR			にぶい黄橙 (10YR7/4)	II a	石・長・雲・焼	大木 10 式	
6	6	68	13次	包含層	13I7	III	縄文土器	深鉢	36.0	(22.0)		縄文 RL			にぶい黄橙 (10YR6/4)	I b6	石・長・焼・角・雲	大木 9 式	
7	6	69	13次	包含層	13I1	IV	縄文土器	深鉢				刺突文 隆帯			灰白 (10YR8/2)	I b3	石・長・焼・白・角	三十稲場式	
7	6	70	13次	包含層	13I11	IV	縄文土器	深鉢				刺突文 隆帯			浅黄橙 (10YR8/3)	I a2	石・長・焼	三十稲場式	
7	6	71	13次	包含層	13H21	IV	縄文土器	深鉢				刺突文			橙 (7.5YR6/6)	I a6	石・長・角	三十稲場式	
7	6	72	13次	包含層	13H21	III	縄文土器	深鉢				刺突文			橙 (7.5YR7/6)	I a1	石・長・チ	三十稲場式	
7	6	73	13次	包含層	13H22	III	縄文土器	深鉢				刺突文 隆帯 斜縄文			浅黄橙 (7.5YR8/4)	I b1	石・長	三十稲場式	
7	6	74	13次	包含層	12H23	III	縄文土器	深鉢				刺突文			にぶい黄橙 (10YR7/3)	I b3	石・長	三十稲場式	
7	6	75	13次	包含層	12I10	IV	縄文土器	深鉢				刺突文 隆帯			橙 (7.5YR7/6)	I a3	石・長	三十稲場式	
7	6	76	13次	包含層	13I6	II	縄文土器	深鉢				刺突文 隆帯 櫛歯状条痕文			にぶい黄橙 (10YR7/4)	I a3	石・長・雲・焼	三十稲場式	
7	6	77	13次	包含層	13I6	IV	縄文土器	深鉢				刺突文			橙 (7.5YR7/6)	I b3	石・長・角	三十稲場式	
7	6	78	13次	包含層	13I1	III	縄文土器	深鉢				沈線 浮文 撚糸文 R			浅黄橙 (7.5YR8/4)	I b1	石・長・焼	付着物：外面 炭化物	
7	6	79	13次	包含層	12I14	III	縄文土器	深鉢				刺突文 隆帯 沈線			浅黄橙 (7.5YR8/3)	I b3	石・長・雲・角		
7	6	80	13次	包含層	13I2	III	縄文土器	深鉢				半截竹管 単節縄文 LR			にぶい黄橙 (10YR7/4)	I b3	石・長・雲・焼・角	三十稲場式	



図版 番号	写真 図版 番号	遺物 番号	調査 回数	出土位置		層位	種別	器種	法量 (cm)			文様・施文			色調	胎土分類	胎土	備考	
				遺構名	グリッド				口径	底径	器高	外面		内面					底部
7	6	81	13次	包含層	13H21	Ⅲ	縄文土器	深鉢				単節縄文 RL			橙 (7.5YR6/6)	Ⅱa	石・長	三十稲場式	
7	6	82	13次	包含層	12I18	Ⅲ	縄文土器	深鉢				網目状撚糸文 R			橙 (7.5YR7/6)	I a1	石・長・雲	三十稲場式	
7	6	83	13次	包含層	13I6	Ⅲ	縄文土器	深鉢				単節縄文 RL		種実痕	にぶい黄橙 (10YR7/3)	I b3	石・長・雲・焼・角		
7	6	84	13次	包含層	13H22	Ⅲ	縄文土器	深鉢				刺突文 沈線 C字状文			にぶい黄橙 (10YR7/3)	I a1	石・長・焼・角	網取I式の影響 図3-92と同一個体	
7	6	85	13次	包含層	13I2	Ⅳ	縄文土器	深鉢				単節縄文 RL		補修孔	明褐 (7.5YR5/8)	I a4	石・長		
7	6	86	13次	包含層	13I2	Ⅲ	縄文土器	深鉢				単節縄文 RL			橙 (7.5YR7/6)	I a3	石・長・焼・角	三十稲場式	
7	6	87	13次	包含層	13I6	Ⅳ	縄文土器	深鉢				単節縄文 RL			浅黄橙 (10YR8/3)	I a4	石・長・角	三十稲場式	
7	6	88	13次	包含層	13I2	Ⅲ	縄文土器	深鉢				単節縄文 RL			にぶい橙 (7.5YR7/4)	I b3	長・雲		
7	6	89	13次	包含層	13I1	Ⅲ	縄文土器	深鉢				直前段反撚糸文 RR			にぶい黄橙 (10YR6/4)	I a1	石・長		
7	6	90	13次	包含層	13I6	Ⅲ	縄文土器	深鉢				撚糸文 L			橙 (7.5YR7/6)	I a5	石・長・雲・焼・角		
7	6	91	13次	包含層	13I12	Ⅲ	縄文土器	深鉢				単節縄文 RL			にぶい黄橙 (10YR7/4)	I b3	石・長		
7	7	92	13次	包含層	13H22	Ⅲ	縄文土器	深鉢				刺突文 沈線 C字状文			にぶい黄橙 (10YR7/4)	I a2	石・長・焼	網取I式の影響 84と同一個体	
7	7	93	13次	包含層	13I6	Ⅳ	縄文土器	深鉢	23.4			櫛歯状条線文	ナデ		橙 (7.5YR7/6)	I b3	石・長・雲・焼・角	後期初頭	
7	7	94	13次	包含層	13I6	Ⅳ	縄文土器	深鉢	22.0			網目状撚糸文 L			浅黄 (2.5Y7/4)	I a1	石・長・雲	口縁遺存率 5/36	
7	7	95	13次	包含層	13I6	Ⅲ	縄文土器	深鉢				網目状撚糸文			浅黄橙 (7.5YR8/4)	I b3	石・長・雲・角	口縁遺存率 2/36	
7	7	96	13次	包含層	12I10	Ⅳ	縄文土器	深鉢				網目状撚糸文 Rr			にぶい橙 (7.5YR6/4)	I a1	石・長・雲・白		
8	7	97a	13次	包含層	12I15	Ⅳ	縄文土器	深鉢	18.0			網目状撚糸文 r			にぶい黄橙 (10YR7/3)	I b3	石・長・白・角	97bと同一個体	
8	7	97b	13次	包含層	12I15	Ⅳ	縄文土器	深鉢		10.8	(11.5)	網目状撚糸文 r		ミガキ ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	I b3	石・長・焼・白・角	97aと同一個体	
8	7	98	13次	包含層	13I1	Ⅲ	縄文土器	深鉢	25.0			撚糸文 R	補修孔		浅黄橙 (10YR8/3)	I a3	石・長・焼・角		
8	7	99	13次	包含層	13I12	Ⅲ	縄文土器	深鉢	30.0			櫛歯状条線文			明黄褐 (10YR7/6)	I a3	石・長・焼・角		
8	7	100	13次	包含層	13I1	Ⅳ	縄文土器	深鉢				櫛歯状条線文			にぶい黄橙 (10YR7/4)	Ⅱa	石・長・雲		
8	7	101	13次	包含層	12H23	Ⅳ	縄文土器	深鉢		13.6		櫛歯状条線文		管痕	にぶい黄橙 (10YR6/4)	I a7	長・雲・焼		
8	7	102	13次	包含層	13I12	Ⅳ	縄文土器	深鉢		10.0		単節縄文 LR	ナデ		浅黄橙 (10YR8/3)	I b3	長・雲・角・海	底部遺存率 12/36	
8	7	103	13次	包含層	12I10	Ⅳ	縄文土器	深鉢		14.0		単節縄文 RL	木葉痕		浅黄橙 (7.5YR8/4)	I a3	石・長・焼・角	底部遺存率 7/36	
8	7	104	13次	包含層	12I13	Ⅱ	縄文土器	蓋	34.6			刺突文 隆帯 沈線			橙 (7.5YR7/6)	I b3	石・長・焼・角	三十稲場式	
8	7	105	13次	包含層	13I12	Ⅲ	縄文土器	蓋				刺突文			浅黄橙 (10YR8/3)	I a1	石・長	三十稲場式	
8	7	106	13次	包含層	12H23	Ⅳ	縄文土器	蓋				刺突文			橙 (7.5YR7/6)	I a1	石・長・焼・角	三十稲場式	
8	7	107	13次	包含層	13I16	Ⅲ	縄文土器	蓋				刺突文 沈線			にぶい黄橙 (10YR7/4)	I b2	石・長・雲	三十稲場式	
8	7	108	13次	包含層	13H22	Ⅲ	縄文土器	蓋	16.2			刺突文 沈線 浮文 環状把手			橙 (7.5YR7/6)	I a2	石・長・角	三十稲場式 付着物：内面 炭化物	
8	7	109	7次	包含層	12G	I	縄文土器	蓋	19.6			沈線 縄文 RL			浅黄橙 (10YR8/3)	I a1	石・長・チ・焼	三十稲場式	
8	7	110	7次	SK17	16G	1	縄文土器	深鉢			(14.5)	隆線 縄文 R			浅黄橙 (10YR8/4)	Ⅱa	石・長・雲	大木8b式	

別表 3 土製品観察表

- 凡例 1. 器種  
 2. 胎土 胎土中に含まれる鉱物・小礫について記した。「石」は石英粒、「長」は長石粒、「雲」は金雲母あるいは黒雲母、「チ」はチャート、「焼」は焼土粒、「白」は白色凝灰石、「角」は角閃石、「海」は海棉骨針を表す。  
 3. 色調 外面の色調を記した。『新版標準土色帳』(農林水産省農林技術会議事務局 1967) 記号を記した。  
 4. 産地

図版番号	写真図版番号	遺物番号	調査回数	出土位置		層位	器種	大きさ (cm)			色調	胎土分類	胎土	備考
				遺構名	グリッド			長さ	幅	厚さ				
9	8	1	13 次	SK54	13H21		土偶	6.0	4.1	3.8	橙 (7.5YR7/6)	I a3	石・長・焼・角	中期末～後期初頭 頭部
9	8	2	13 次	包含層	12I10	Ⅲ	土偶	(3.6)	1.9	1.6	浅黄橙 (10YR8/4)	I b3	石・長・雲・焼	腕部か
9	8	3	13 次	包含層	12I10	Ⅳ	土偶	(4.8)	2.5	(2.4)	浅黄橙 (10YR8/4)	I b3	石・長・焼・角	脚部 (右足)
9	8	4	13 次	包含層	12I10	Ⅳ	土偶	(6.7)	4.7	2.9	にぶい橙 (7.5YR7/4)	I a3	石・長・角・海	後期前葉 体部
9	8	5	13 次	包含層	13I2	Ⅳ	土偶	4.1	2.3	1.3	明黄褐 (10YR7/6)	I b4	石・長・焼・白	脚部 (左足)
9	8	6	13 次	包含層	12I10	Ⅳ	器種不明	(12.9)	7.8	4.3	浅黄橙 (10YR8/4)	I a3	石・長・焼・角	
9	8	7	13 次	包含層	13H22	Ⅲ	器種不明	3.5	2.1	1.9	橙 (7.5YR7/6)	I a1	石・長	
9	8	8	13 次	包含層	13I1	Ⅲ	土製円盤	5.8	2.3	1.1	にぶい黄橙 (10YR7/4)	I b3	石・長・角	擦糸文
9	8	9	13 次	包含層	13I1	Ⅲ	円形状土製品	(9.8)	7.1	2.6	橙 (7.5YR6/6)	I a2	石・長・焼	蓋か
9	8	10	13 次	包含層	13I6	Ⅳ	粘土塊	4.0	3.7	3.2	橙 (5YR7/6)	I b1	石・長・焼	

別表 4 石器・石製品観察表

図版番号	写真図版番号	遺物番号	出土位置			種別	石材	法量 (mm, g)				備考
			遺構名	グリッド	層位			最大長	最大幅	最大厚	重量	
10	9	1	P47	12H24		不定形石器	緑色凝灰岩	33.09	20.08	6.42	3.39	
10	9	2	SK54	13H21		石核	鉄石英	43.16	39.48	31.00	52.86	
10	9	3	P52	13I1		敲石	花崗岩	77.77	68.85	37.78	216.42	
10	9	4	包含層	13H21	Ⅲ	不定形石器	珪質頁岩	67.40	51.10	12.65	31.74	
10	9	5	包含層	12I4	Ⅳ	不定形石器	珪質頁岩	39.90	60.80	9.10	17.11	
10	9	6	包含層	12H25	Ⅳ	不定形石器	珪質頁岩	55.00	40.20	13.70	20.05	
10	9	7	包含層	13I11	Ⅲ	楔形石器	チャート	63.05	39.15	24.05	56.77	
10	9	8	包含層	13I11	Ⅳ	剥片	玉髓	48.15	35.40	8.85	11.12	
10	9	9	包含層	13I1	Ⅳ	石核	玉髓	104.50	123.35	65.90	1066.80	
10	9	10	包含層	13I2	Ⅲ	磨製石斧	透閃石	76.05	50.95	24.70	166.88	刃部
10	9	11	包含層	13I1	Ⅳ	磨製石斧	透閃石	81.05	51.60	20.25	165.53	基部 敲石転用
10	9	12	包含層	13I6	Ⅳ	磨製石斧	透閃石	53.85	53.00	26.20	114.41	基部
11	9	13	包含層	12H19	Ⅳ	磨製石斧	緑色凝灰岩	69.30	44.90	18.05	44.24	基部 礫素材
11	9	14	包含層	12I11	Ⅳ	磨製石斧	緑色岩	54.15	42.80	25.55	92.80	基部

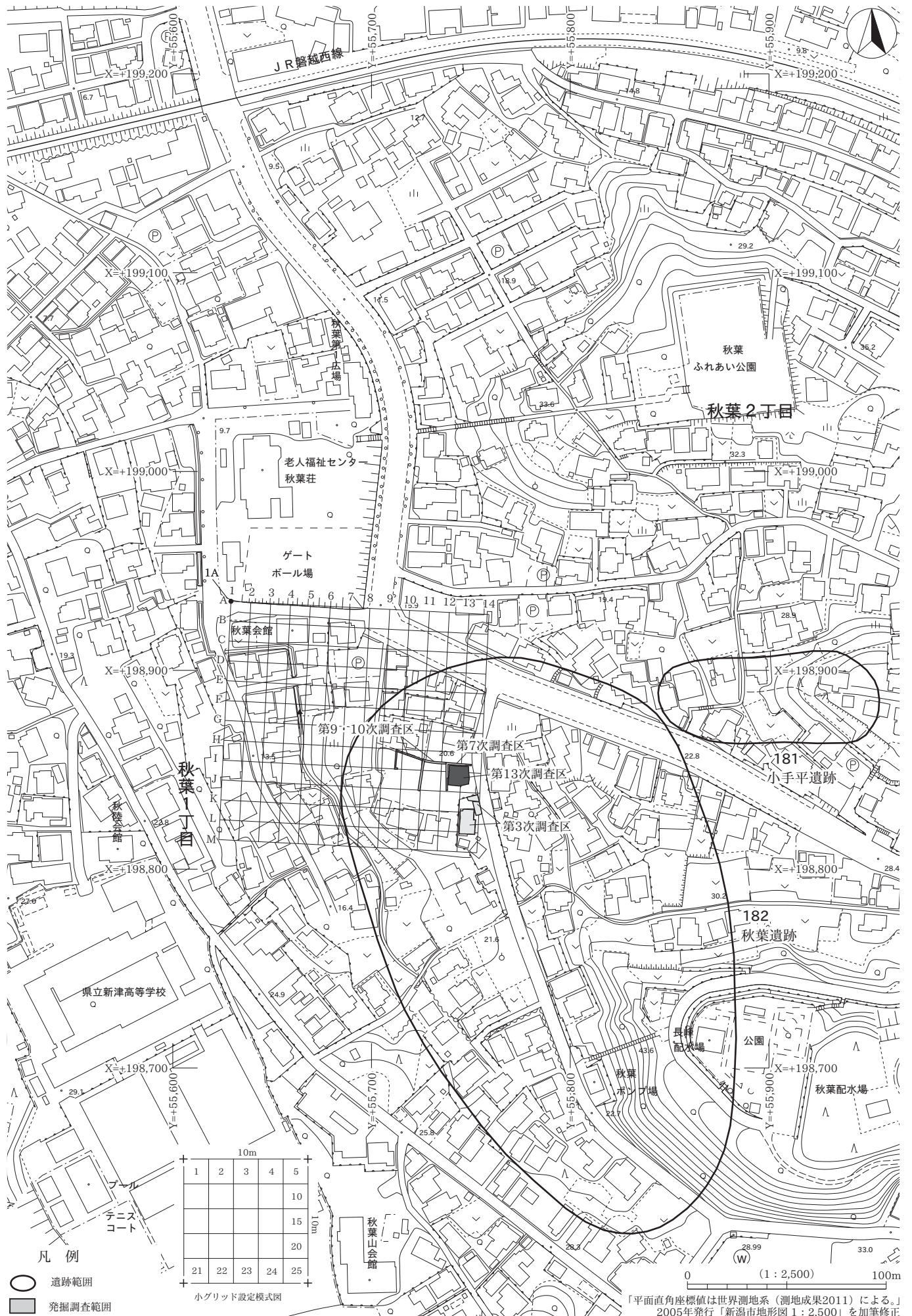
図版番号	写真図版番号	遺物番号	出土位置			種別	石材	法量 (mm, g)				備考
			遺構名	グリッド	層位			最大長	最大幅	最大厚	重量	
11	10	15	包含層	12I13	Ⅱ	石皿	花崗岩	85.55	119.80	46.05	389.40	
11	10	16	包含層	13I1	Ⅲ	磨石	緑色凝灰岩	125.70	105.05	60.85	1119.65	
11	10	17	包含層	12I13	Ⅲ	磨石	凝灰岩	58.45	47.25	22.05	58.51	
11	10	18	包含層	13I11	Ⅳ	磨石	緑色凝灰岩	214.10	82.72	57.54	1,635.38	
11	10	19	包含層	12I14	Ⅲ	敲石	花崗岩	66.90	74.25	34.35	243.97	
11	10	20	包含層	13H22	Ⅲ	敲石	石英	64.95	64.50	39.45	147.63	
11	10	21	包含層	13I1	Ⅲ	凹石	凝灰岩	104.85	83.75	25.05	187.75	
11	10	22	包含層	12I14	Ⅲ	凹石	砂岩	70.30	83.15	56.05	339.83	
11	10	23	包含層	13I7	Ⅲ	凹石	凝灰岩	97.25	74.75	33.50	234.53	
11	10	24	包含層	13I1	Ⅳ	磨石 + 凹石	花崗岩	114.70	103.85	49.00	840.95	
11	10	25	包含層	13I12	Ⅲ	敲石 + 凹石	砂岩	80.55	90.90	33.25	298.93	
11	10	26	包含層	12I3	Ⅳ	石棒	緑泥片岩	85.35	50.30	38.70	218.01	秩父石
11	10	27	包含層	13I11	Ⅲ	石棒	緑泥片岩	71.75	59.90	54.80	377.79	秩父石 被熱

# 圖 版



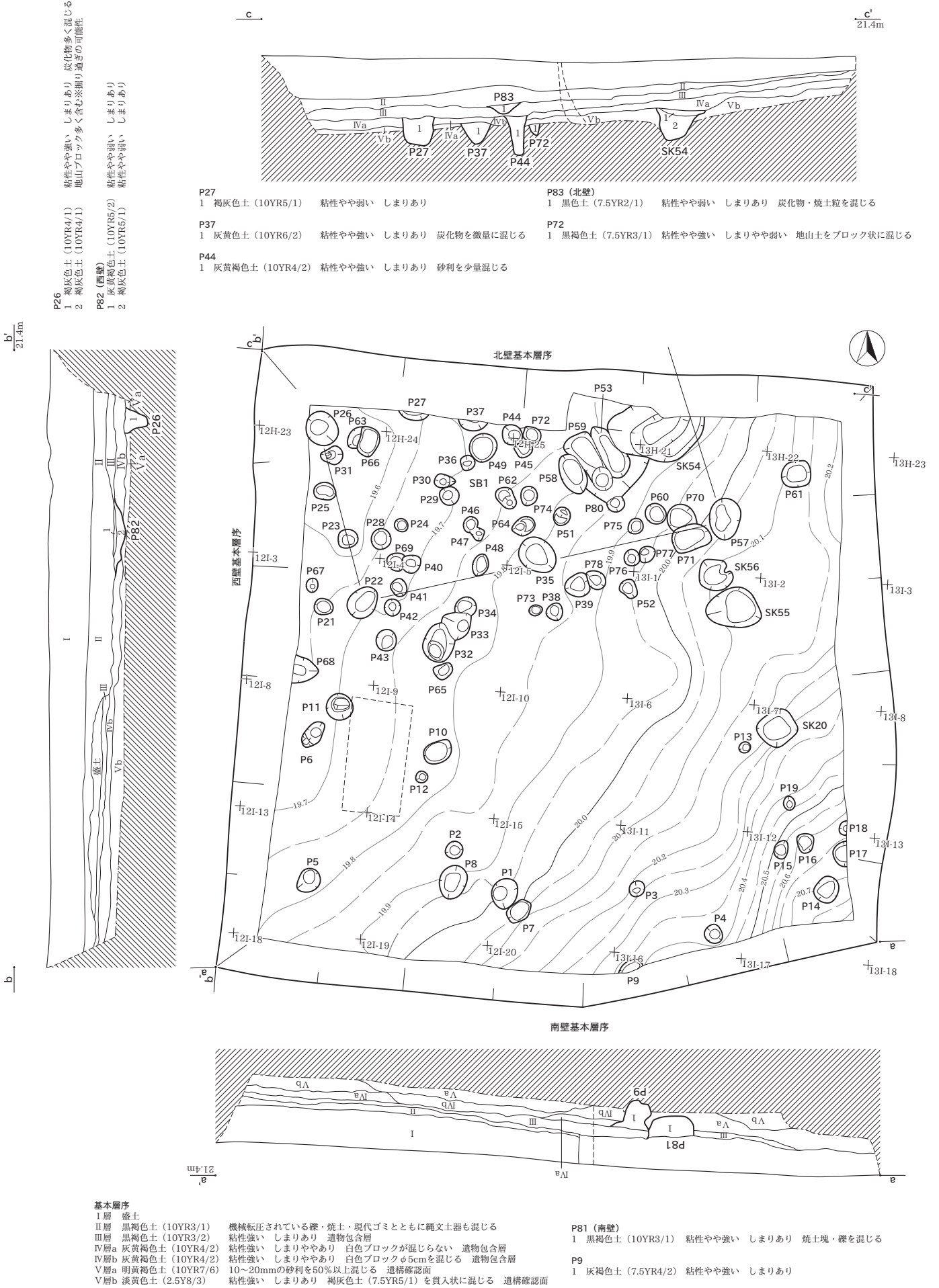




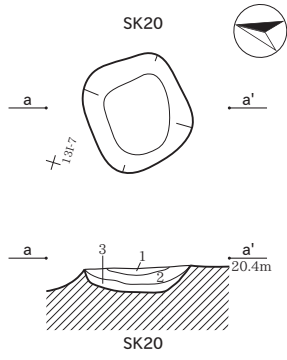
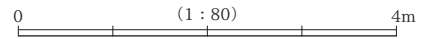
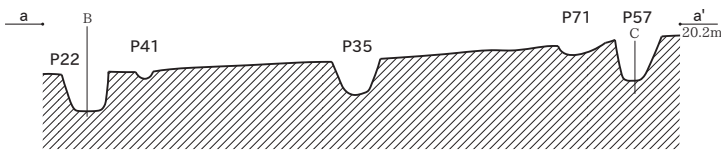
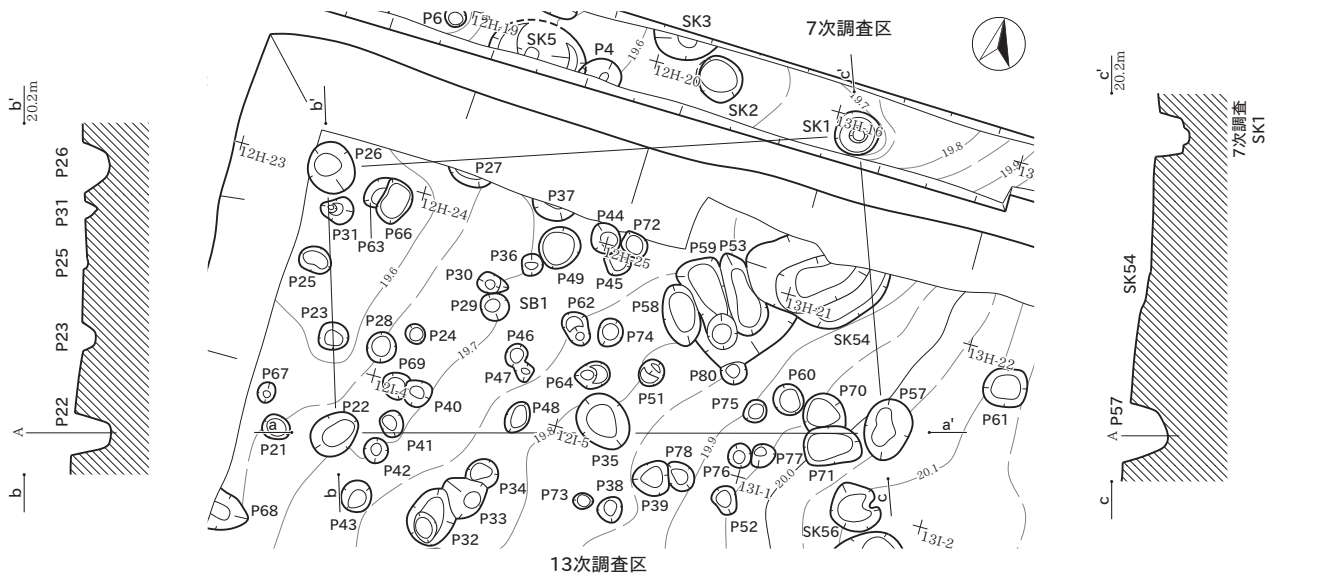


「平面直角座標値は世界測地系（測地成果2011）による。」  
 2005年発行「新潟市地形図 1 : 2,500」を加筆修正

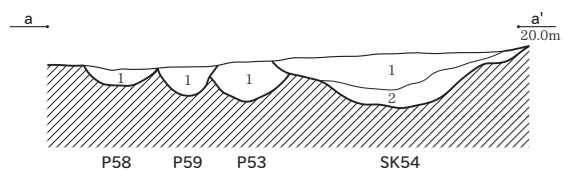
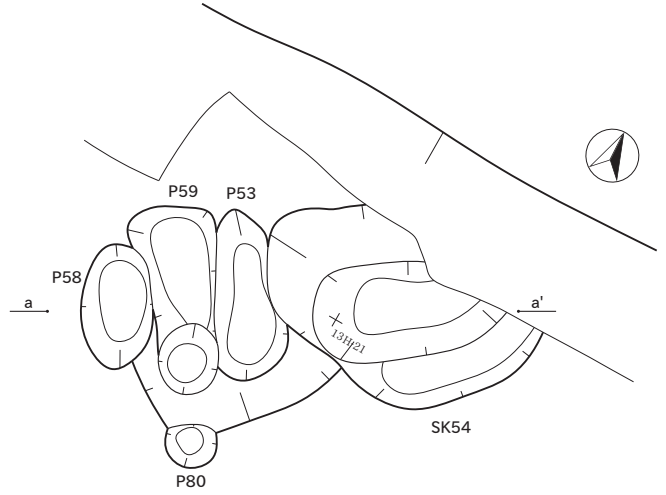




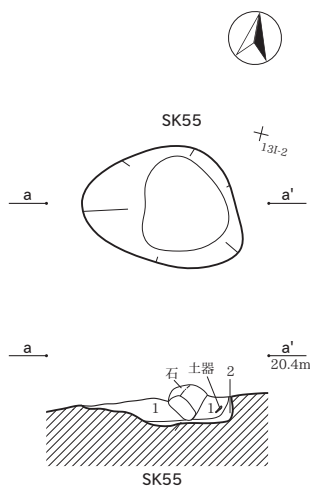
SB1



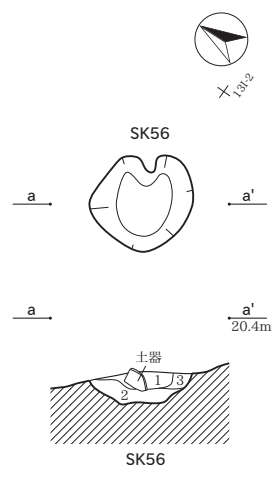
- SK20
- 1 黒色土 (7.5YR2/1) 粘性やや強い しまりあり 土器多く含む
  - 2 褐灰色土 (7.5YR4/1) 粘性やや強い しまりあり 炭化物を混じる
  - 3 灰褐色度 (7.5YR6/2) 粘性なし しまりあり 砂利を多く混じる



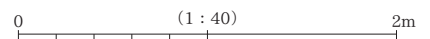
- P58  
1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや強い しまり弱い
- P59  
1 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性やや強い しまり弱い 焼土粒を少量混じる
- P53  
1 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性やや強い しまり弱い 焼土粒を少量混じる
- SK54  
1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや強い しまりあり 炭化物と焼土粒を混じる  
2 灰黄褐色土 (10YR5/2) 砂利を多く混じる



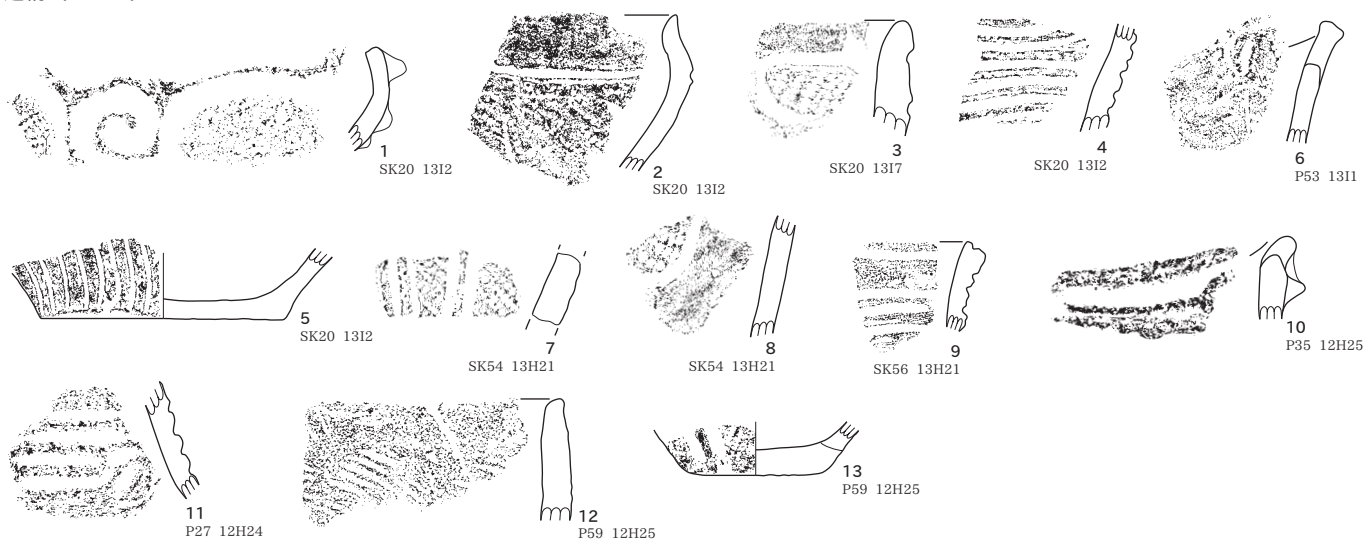
- SK55
- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱い しまりあり 礫多く入る
  - 2 ぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘性やや弱い しまりあり 砂利多く含む



- SK56
- 1 黒褐色土 (2.5Y3/1) 粘性やや強い しまり弱い 地山土をブロック状に少量混じる
  - 2 褐灰色土 (10YR5/1) 粘性やや弱い しまりあり 砂利を混じる
  - 3 灰黄色土 (10YR6/2) 粘性やや強い しまりあり 白色の地山土をブロック状に少量混じる



遺構 (1~13)

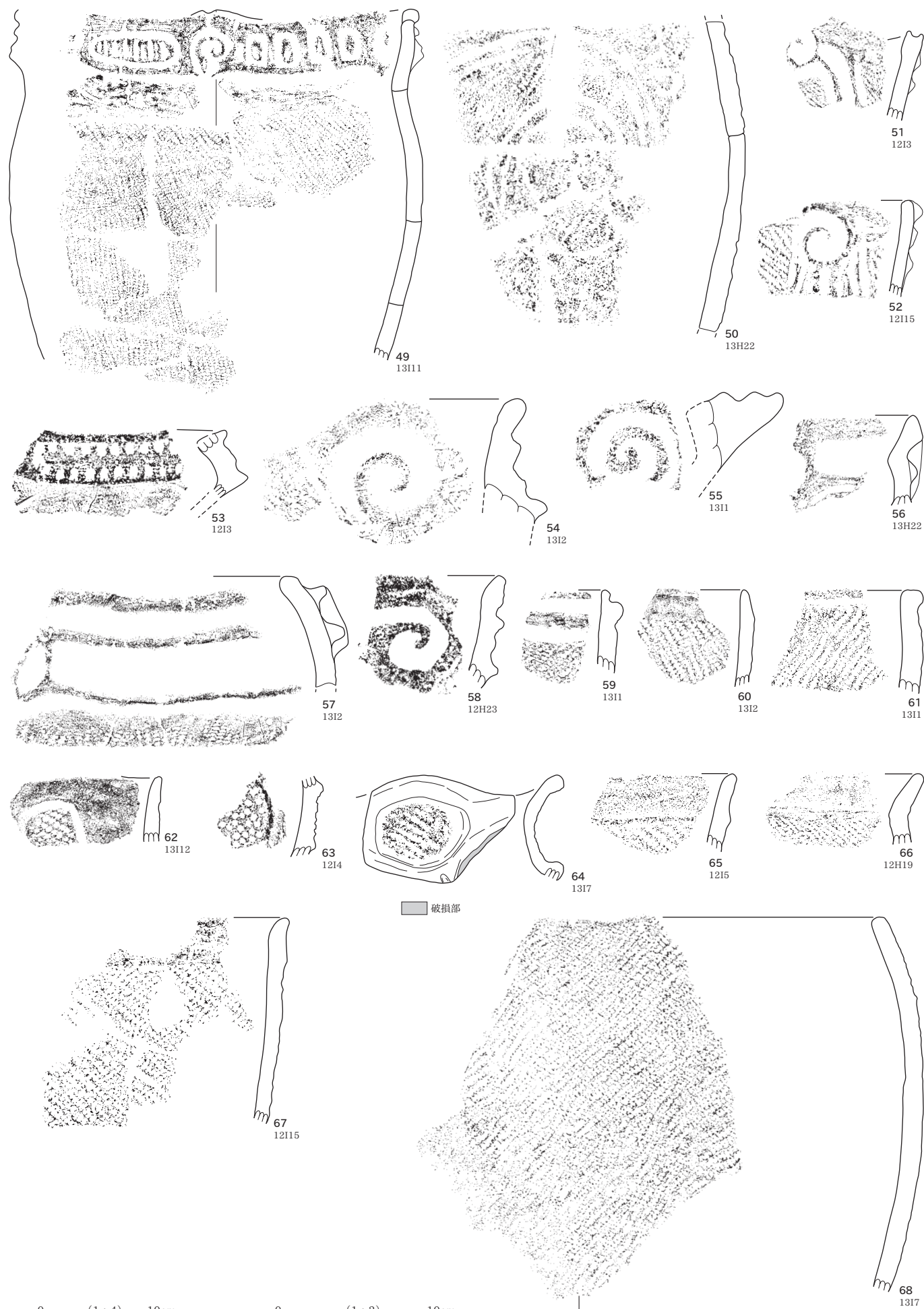


包含層 (14~48)

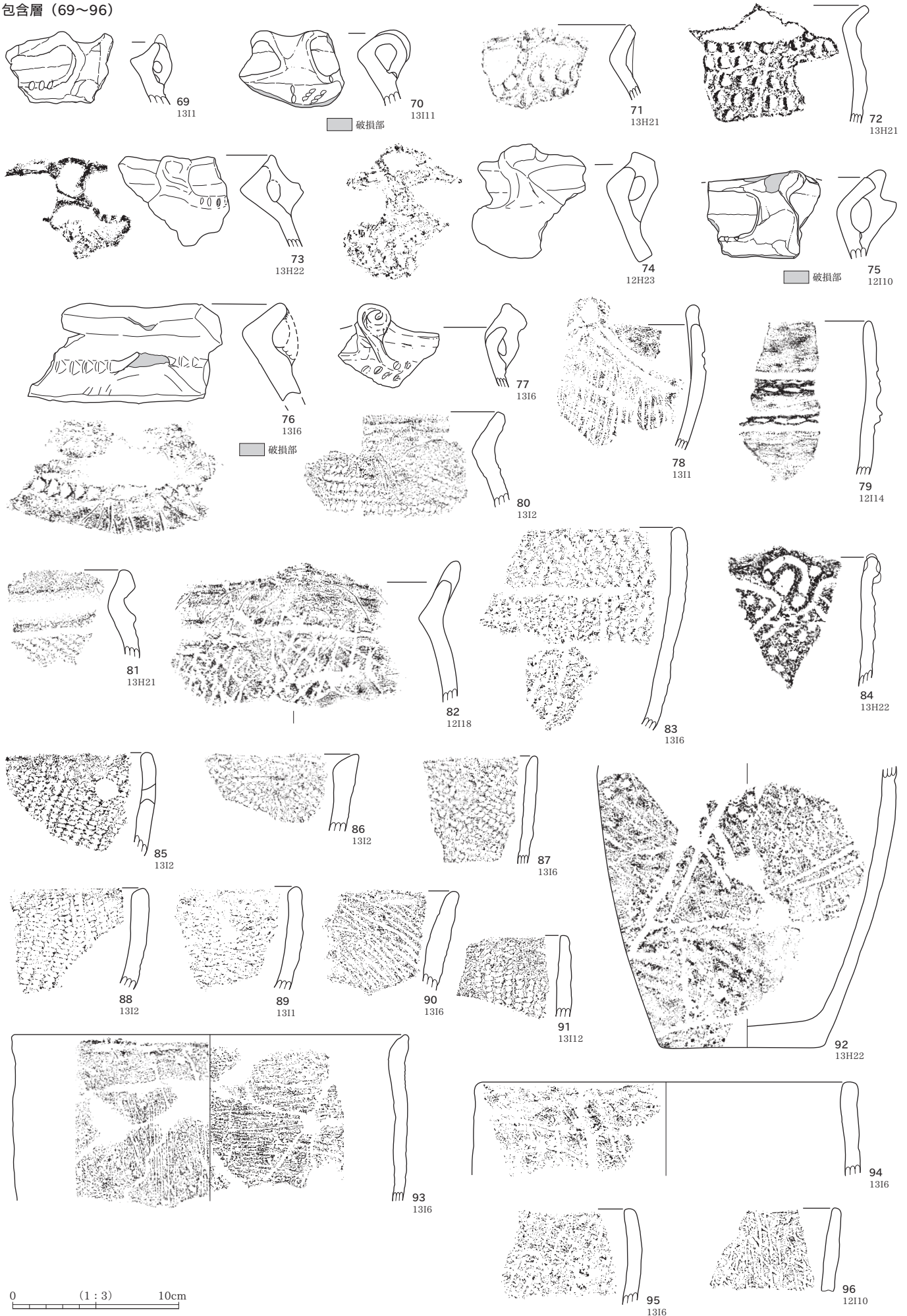




包含層 (49~68)



包含層 (69~96)

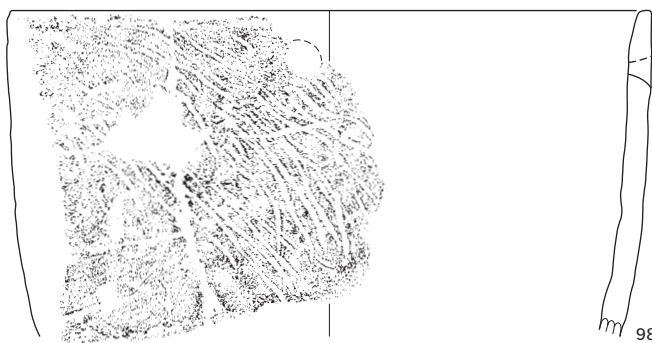




包含層 (97~108)



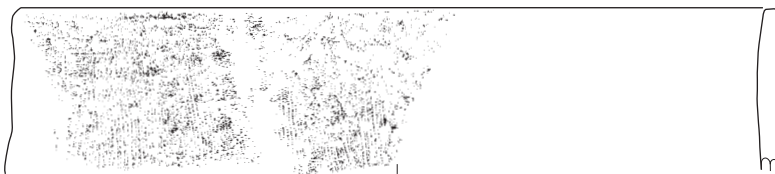
97a  
12I15



98  
13I1



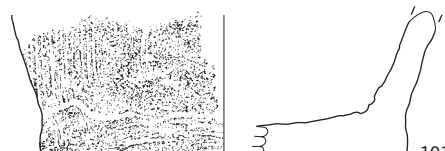
97b  
12I15



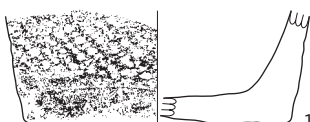
99  
13I12



100  
13I1



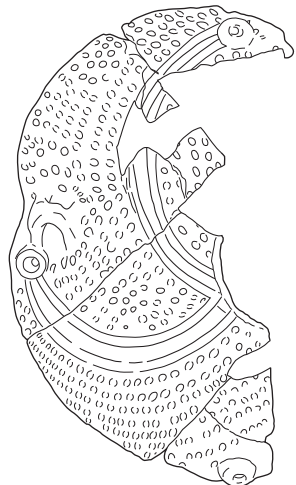
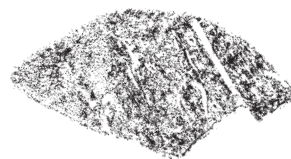
101  
12H23



102  
13I12



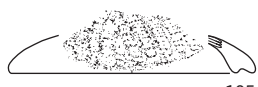
103  
12I10



108  
13H22



104  
12I13



105  
13I12

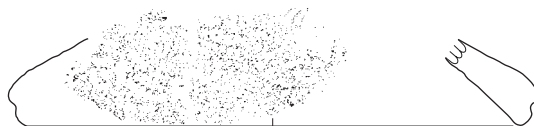


106  
12H23

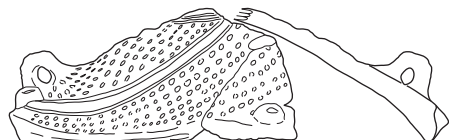


107  
13I16

7次調査 (109・110)



109  
12G

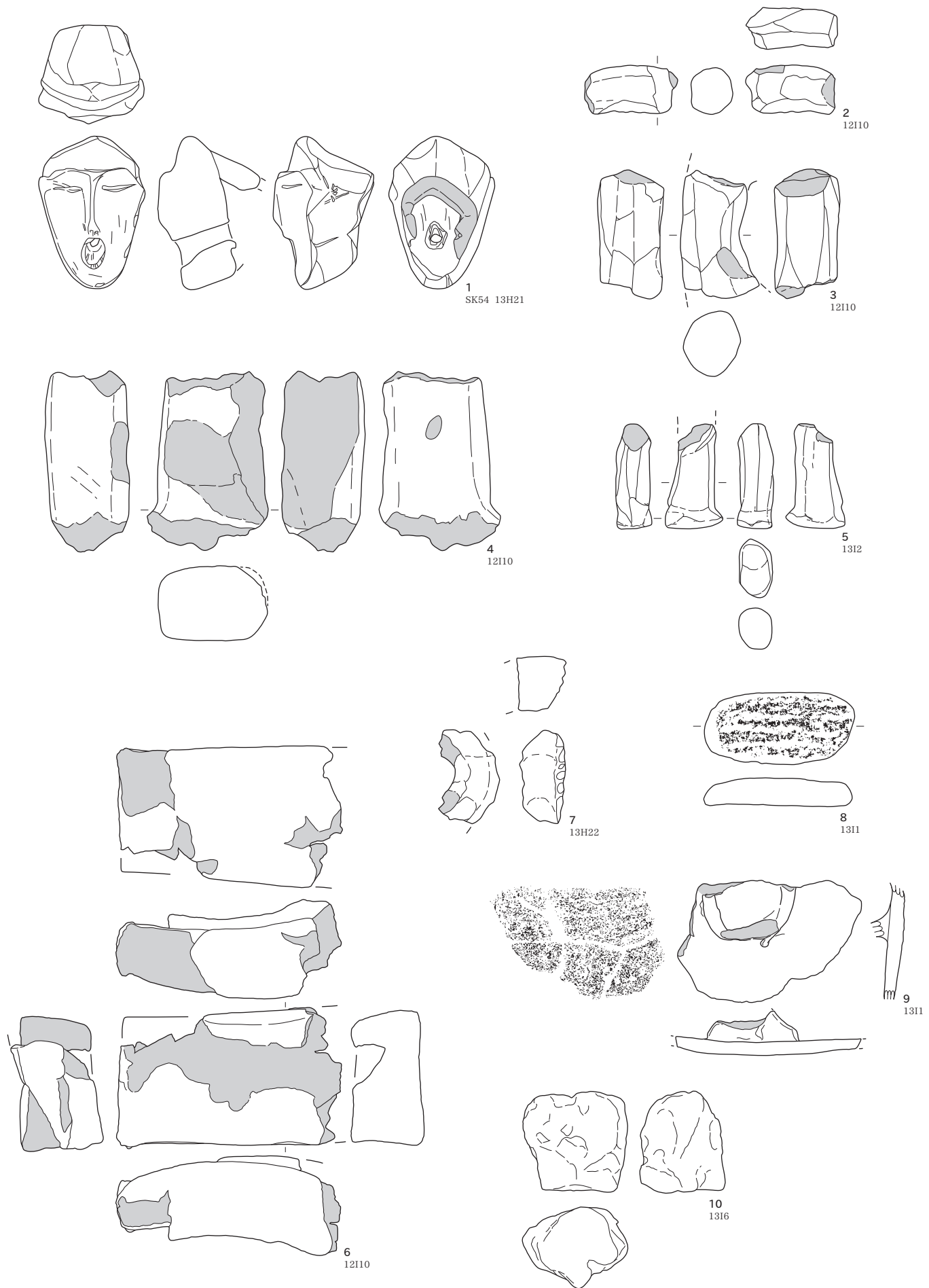


108  
13H22



110  
16G SK17

土製品 (1~10)

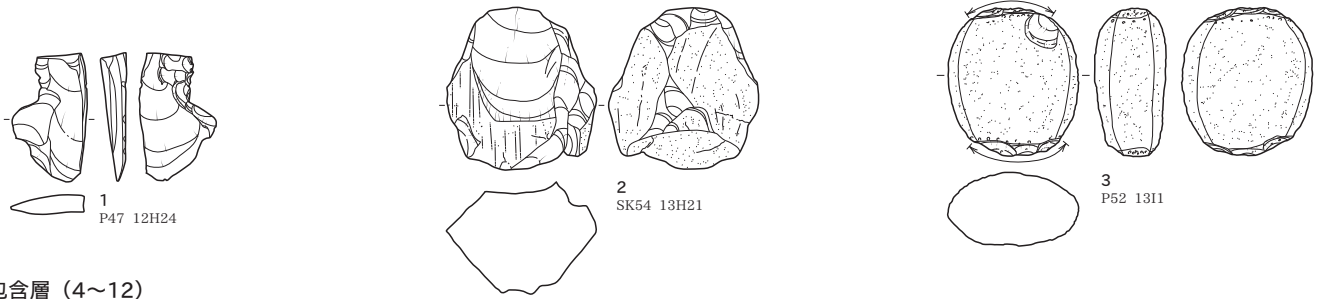


破損部

(6・9) 0 (1:3) 10cm

(その他) 0 (1:2) 5cm

遺構 (1~3)



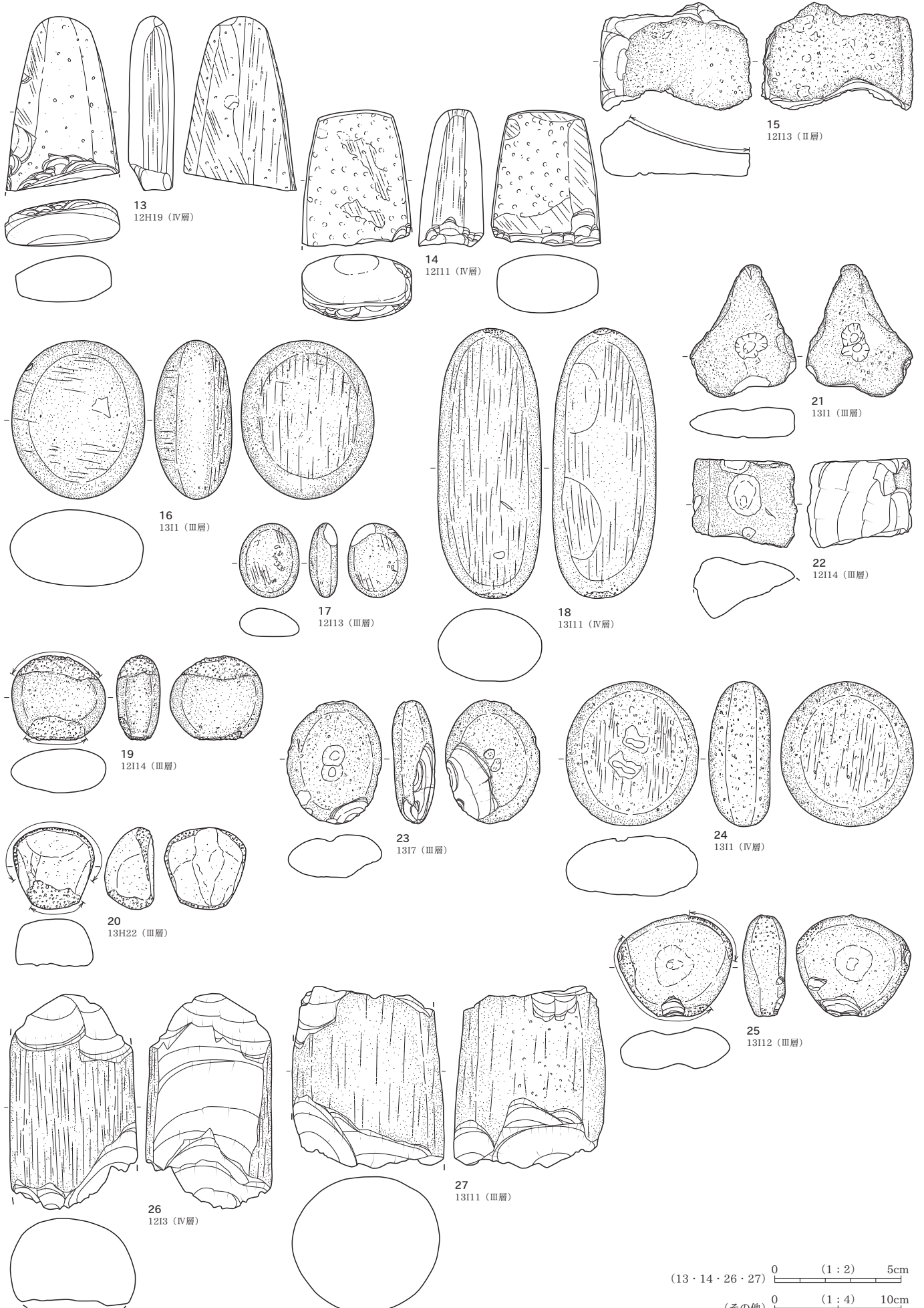
包含層 (4~12)



0 (1:2) 5cm  
 (その他)  
 0 (1:3) 10cm  
 (9)  
 0 (1:4) 10cm  
 (3)



包含層 (13~27)







秋葉遺跡空中写真(北から)



秋葉遺跡第13次調査完掘写真(北から)





着手前状況



表土掘削



基本層序 1 (南壁)



基本層序 2 (西壁)



SK20 土層断面 (西から)



SK20 完掘状況 (西から)



P53・58・59 SK54 土層断面 (南東から)



P53・58・59 SK54 完掘状況 (南東から)



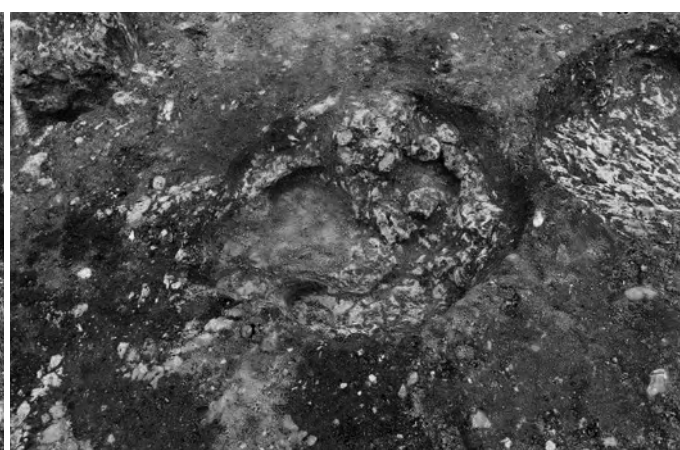
SK55 土層断面(南から)



SK55 完掘状況(南から)



SK56 土層断面(南西から)



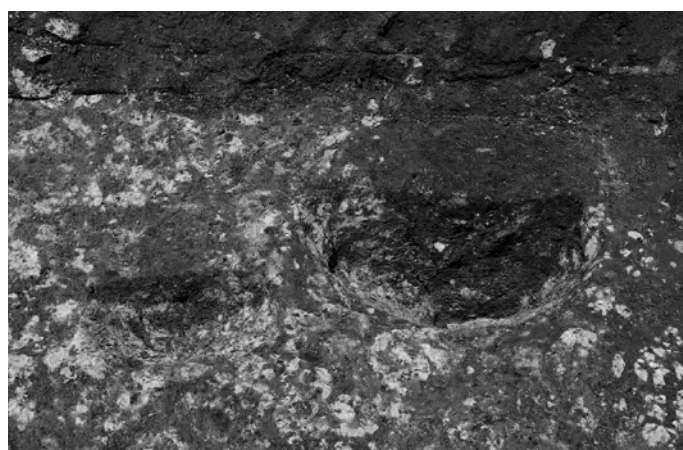
SK56 完掘状況(南西から)



P22 (SB1) 土層断面(南東から)



P22 (SB1) 完掘状況(南東から)



P31・P26 (SB1) 土層断面(東から)

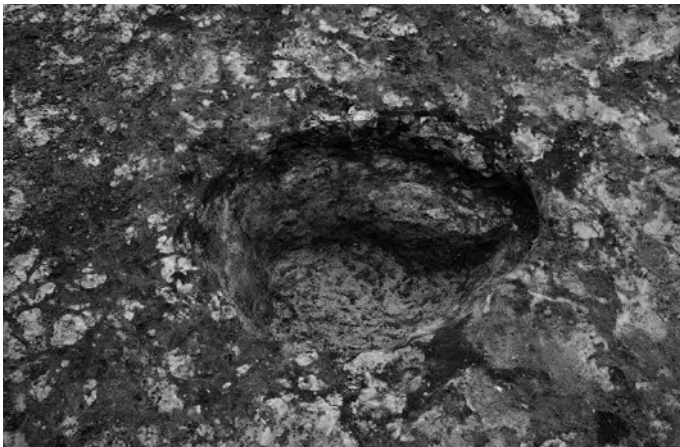


P31・P26 (SB1) 完掘状況(東から)





P35 (SB1) 土層断面 (南西から)



P35 (SB1) 完掘状況 (南西から)



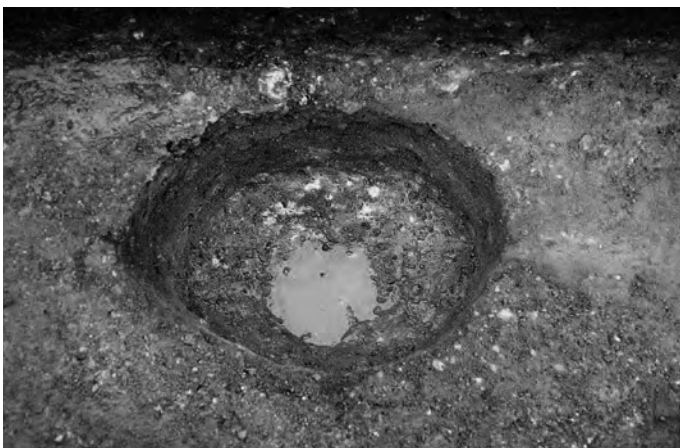
P57 (SB1) 土層断面 (西から)



P57 (SB1) 完掘状況 (西から)



第7次確認調査 SK1 (SB1) 土層断面 (南から)



第7次確認調査 SK1 (SB1) 完掘状況 (南から)

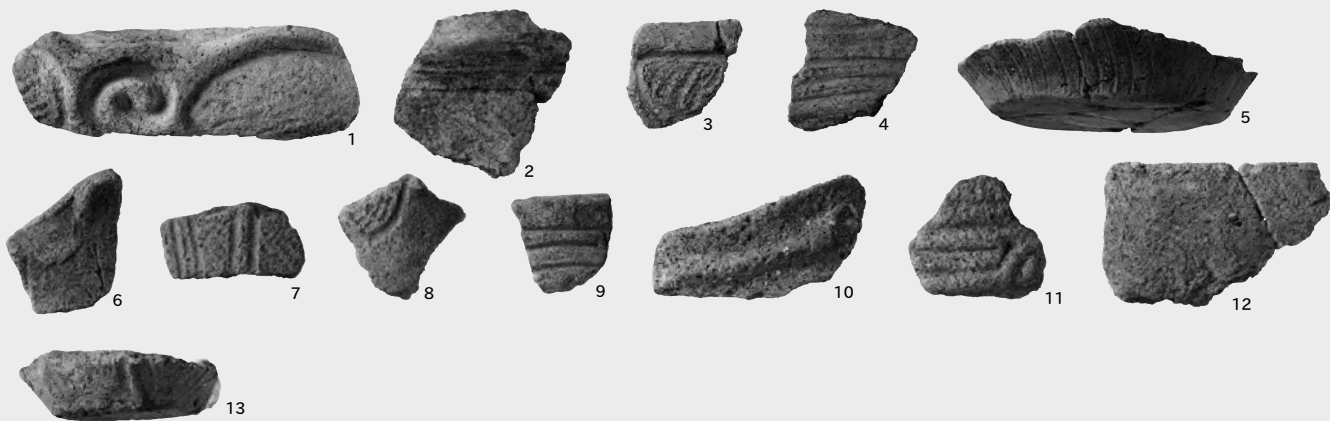


完掘状況 (西から)



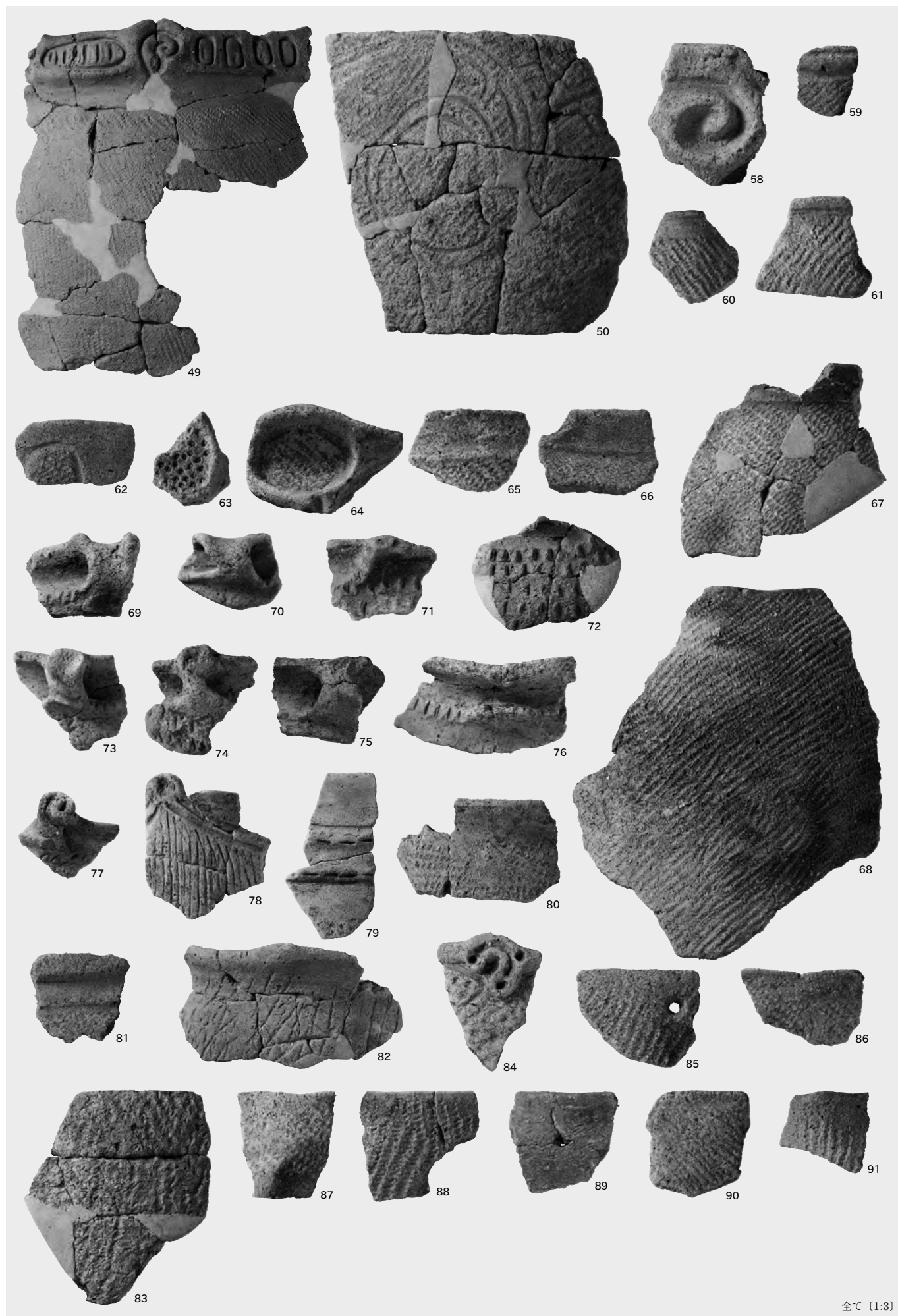
第7次確認調査 完掘状況 (西から)

遺構



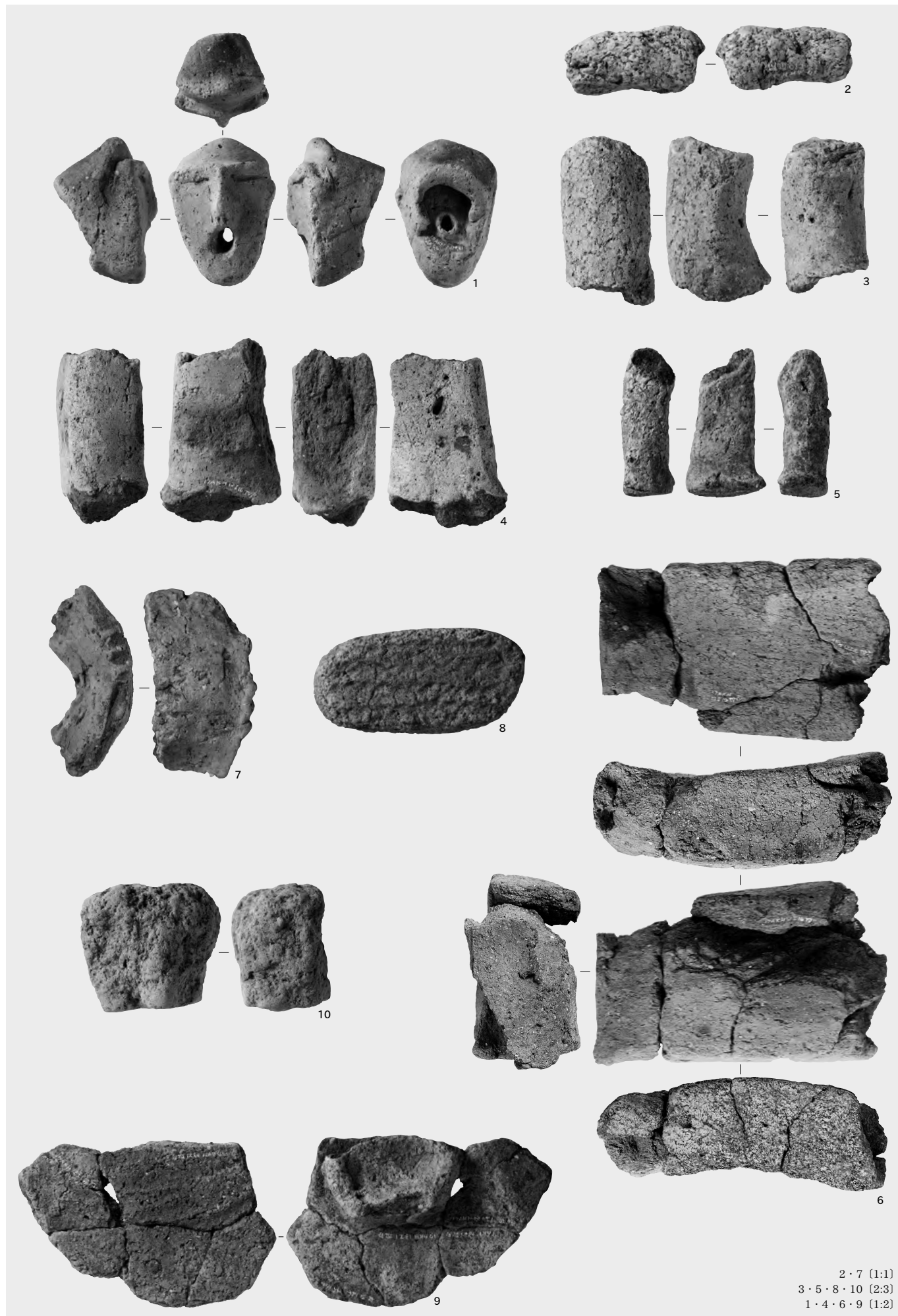
包含層



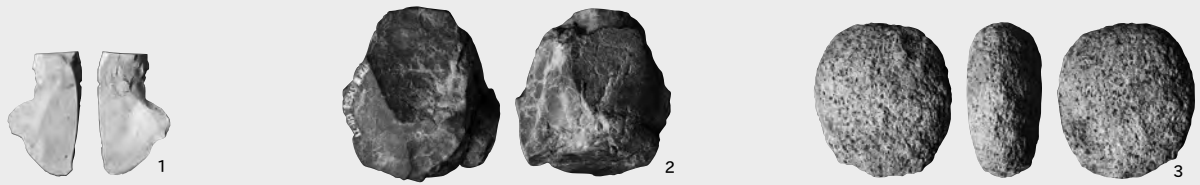




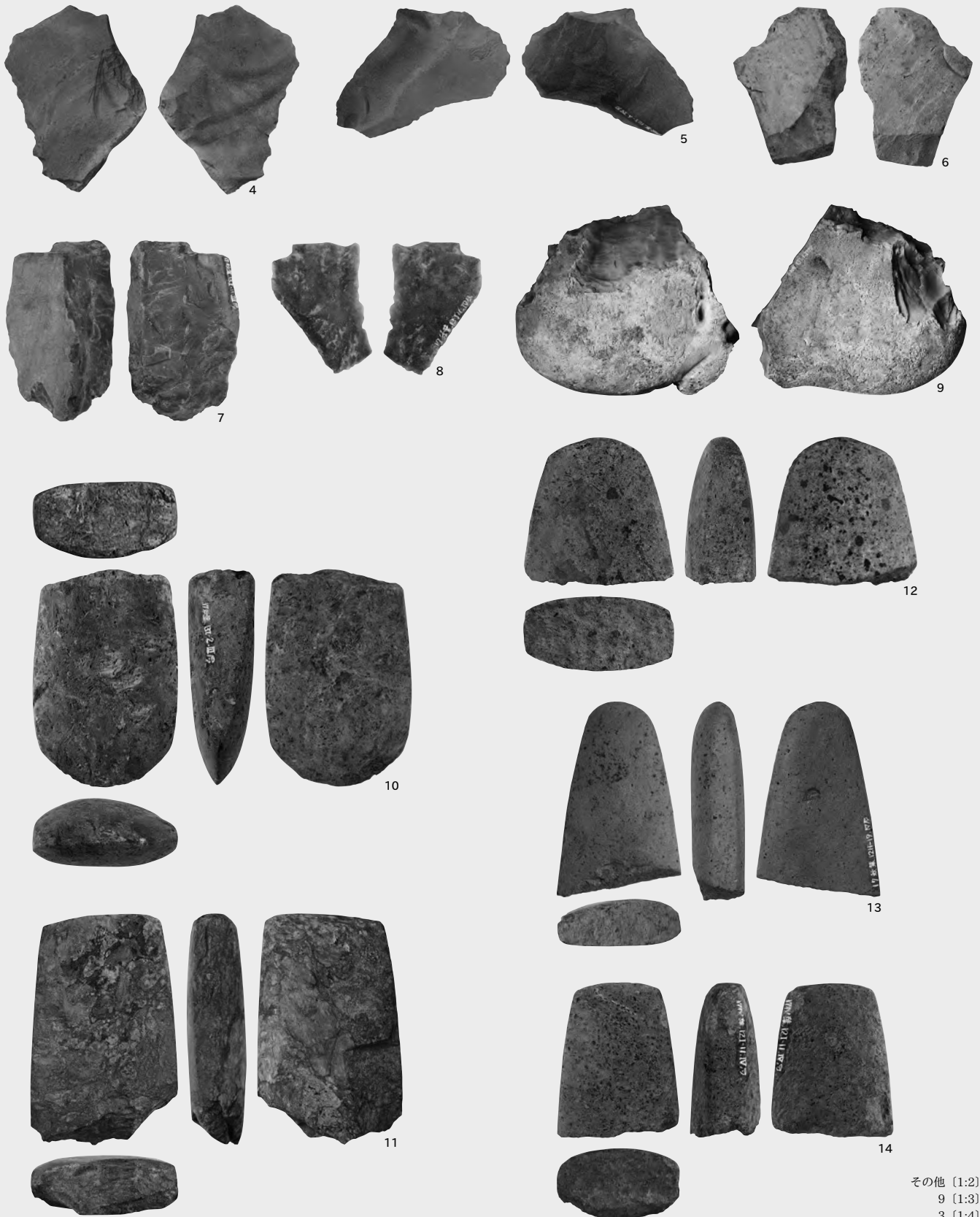




遺構 (1~3)

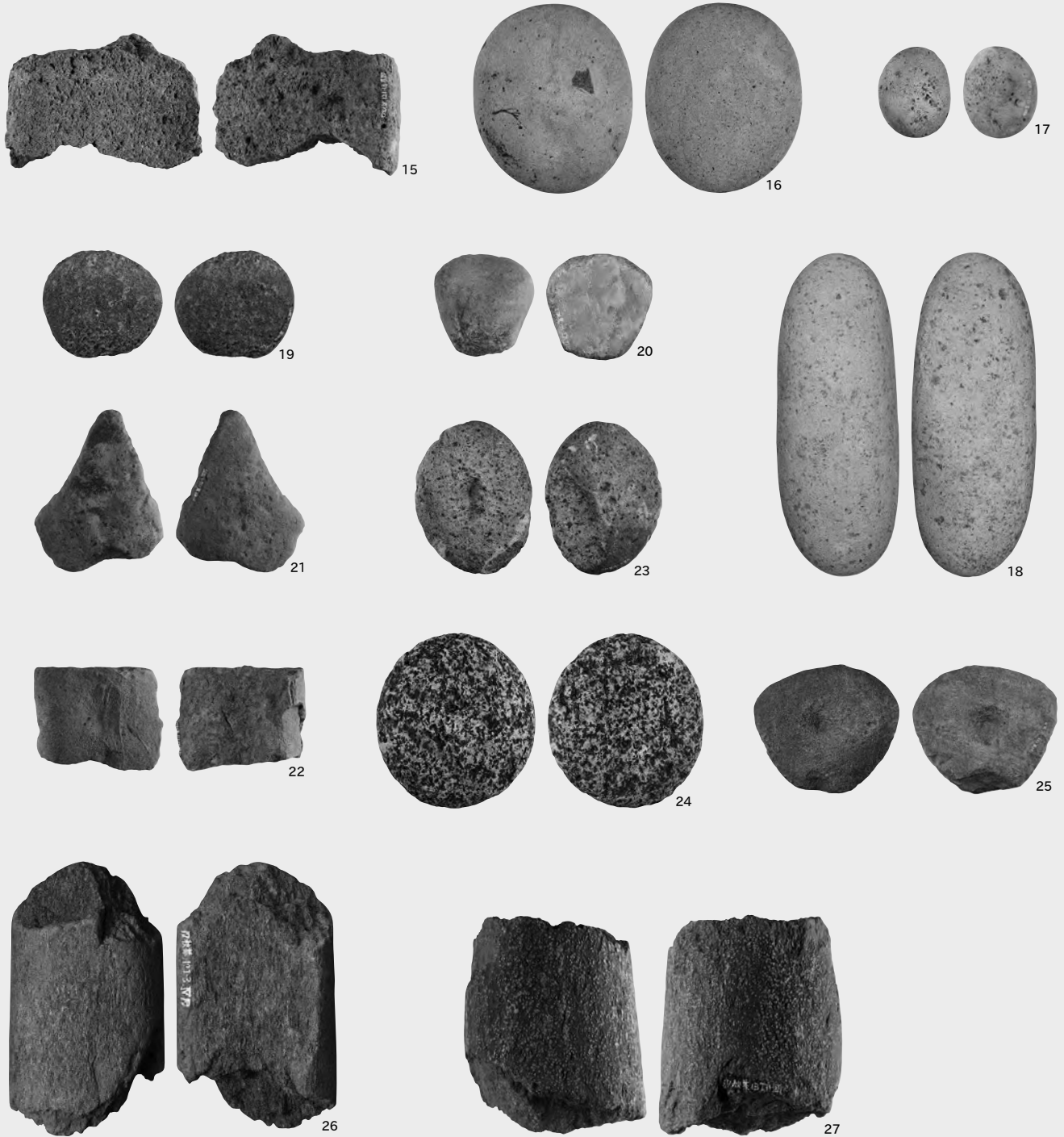


包含層 (4~14)

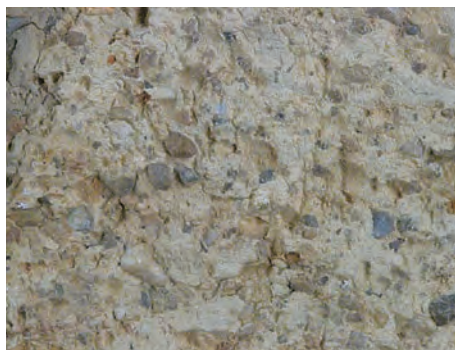


その他 [1:2]  
9 [1:3]  
3 [1:4]

包含層 (15~27)







I a1 類 (図版 5-11)



II a 類 (図版 5-20)



I b1 類 土器片含有 (図版 5-23)



I b6 類 軽石含有 (図版 5-30)



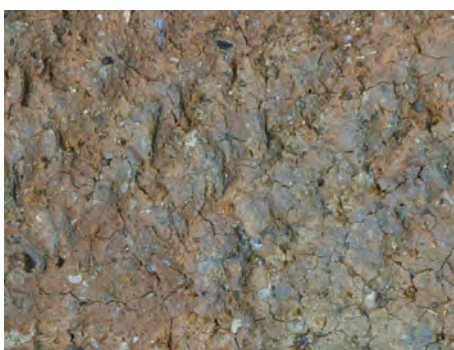
I b5 類 軽石含有 (図版 5-34)



II a 類 (図版 5-36)



I a3 類 (図版 5-39)



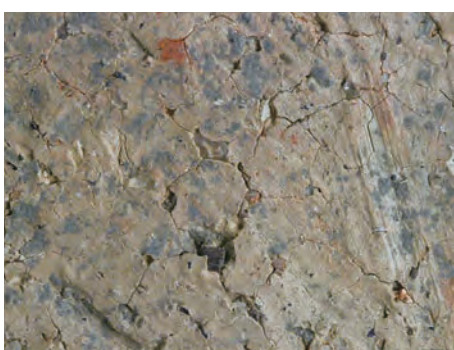
I a4 類 (図版 5-43)



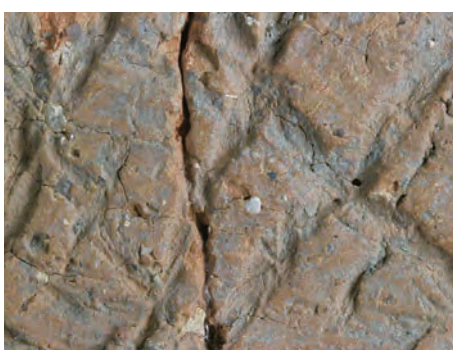
I b3 類 (図版 5-46)



II a 類 (図版 6-57)



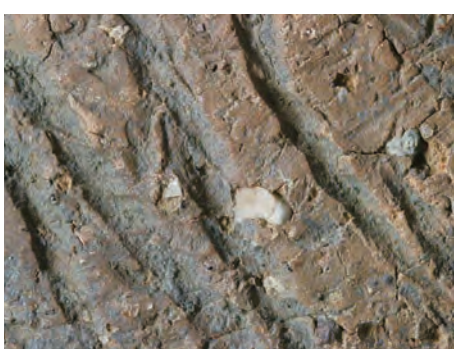
I b3 類 (図版 7-80)



I a1 類 (図版 7-82)



I b3 類 (図版 7-83)



I a3 類 (図版 8-98)



I a1 類 (図版 8-106)



# 報告書抄録

ふりがな	あきはいせき だいじゅうさんじちょうさ							
書名	秋葉遺跡 第13次調査							
副書名	—個人住宅建設事業に伴う秋葉遺跡第2次発掘調査報告書—							
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	今井さやか・立木宏明・田中耕作・前山精明（新潟市文化財センター）							
編集機関	新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター							
所在地	〒950-1122 新潟市西区木場2748番地1 TEL 025-378-0480							
発行機関	新潟市教育委員会							
発行年月日	西暦2021年2月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あきは 秋葉遺跡	にいがたけんにいがたしあきは 新潟県新潟市秋葉区 あきは 秋葉1丁目4704	15105	182	37° 47' 25"	139° 07' 58"	20170613～ 20170626	97.85	個人住宅建設に伴う本発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
秋葉遺跡	遺物包含地 集落遺跡	縄文時代（中期中 葉～後期初頭）		掘立柱建物（SB）1棟、 土坑（SK）4基、小土 坑（P）81基		縄文土器・土製品（土偶 など）・石器（磨製石斧・ 磨石など）		
要約	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遺跡は新津丘陵の北端部にあたり、段丘上に立地する。現地標高は21m前後で、周辺は宅地となっている。</li> <li>・調査は個人住宅建設に伴い平成29（2017）年に実施した。発掘調査面積は97.85㎡である。</li> <li>・調査の結果、縄文時代後期と考えられる掘立柱建物1棟が確認された。</li> <li>・出土土器は縄文時代中期前葉から後期初頭の範囲に収まり、信濃川下流域の一般的な様相と一致する。</li> <li>・石器は磨石・敲石・磨製石斧といった生活に必要な道具以外に祭祀具として石棒が2点出土している。</li> <li>・土製品は、縄文時代後期の仮面土偶の頭部のほか、ハート形土偶の体部・脚部が出土している。</li> </ul>							

## 秋葉遺跡 第13次調査

—個人住宅建設に伴う秋葉遺跡第2次発掘調査報告書—

2021年2月25日印刷

2021年2月26日発行

編集 新潟市歴史文化課文化財センター

〒950-1122 新潟市西区木場2748番地1

TEL 025 (378) 0480

発行 新潟市教育委員会

〒951-8554 新潟県新潟市中央区古町通7番町1010番地

古町ルフル4階

TEL 025 (228) 1000

印刷・製本 株式会社ハイグラフィック

〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号

TEL 025 (233) 0321